

川柳塔



平成三十年六月一日発行（前月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇九三号

日川協加盟

No.1093

六月号

第二十四回 川柳塔まつり

とき 十月六日(土)

ところ ホテル・アウィーナ大阪

◎ 詳細は6月号15頁をご覧ください。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。巻末の綴じ込み残暑見舞広告原稿台紙に原稿を貼付(又は記入)してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個人 ①1/4頁 一口 二〇〇〇円

②1/2頁 一口 三〇〇〇円

★団体

①1/3頁 六〇〇〇円 ③2/3頁 一二〇〇〇円

②1/2頁 九〇〇〇円 ④一頁 一八〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十日

川柳塔社

1 講座 90 分、全 40 講座をお好きなものから受講できます。

心理学基礎コース

フロイト、ユングや話題のアドラー心理学、箱庭療法やカラーージュなどアート系の学び知りたかった「こころの不思議」を学べます。

春開講
受講生
募集!



箱庭療法の講座で実際に作ります。

経験豊富な講師陣から、心理学の基礎を見て、聴いて、声に出して、全身で体験しながら学んでいただけます。初心者の方がたくさん来られる講座です。

無料体験講座お申込み受付中

心理学基礎コースや、こころ学びのことがよくわかる無料体験講座を実施しています。下記URLまたはQRコードから、お気軽にお問い合わせください。

<https://www.kssc.or.jp/?p=6421>



お申し込み・お問い合わせ

公益財団法人 関西カウンセリングセンター

TEL 06-6809-1225 FAX 06-6809-1226 MAIL koza@kssc.or.jp

H.P <https://www.kssc.or.jp> 関西カウンセリングセンター | 検索

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-6-8 堂島ビルディング5階

▼京阪本線・地下鉄御堂筋線「淀屋橋駅」①番出口より北へ5分

▼京阪中之島線・「大江橋駅」⑤番出口より北東へ3分

全日本柳人写真名鑑

小島 蘭 幸

平成三十年版、全日本柳人写真名鑑を開くと、お世話になった人、懐かしい人、最近会った人達が次々と飛び込んできます。写真を見ながら作品を読んでいるとほのぼのとしてきました。

重ね塗り私色を模索する

弘兼 秀子

広島市の本通りで、大竹川柳会の皆さんとばったりお会いしたことがあります。その中にセーラー服姿の秀子さんがおられました。今から半世紀以上も前のことです。現在、秀子さんは大竹川柳会会長として活躍されています。

月の夜星の夜もう忘れよう

やすみりえ

4月11日、岡山県の弓削川柳の小径・公園で句碑建立除幕式があり、ご一緒しました。文化庁文化審議会委員のりえさんは、多数の公募川柳の選者、監修を務められています。

歳月へ夫婦とろ火の愛を積む

永石 珠子

山口県萩市で開催された全日本川柳大会で私は初めて選者を務めました。その折いろいろとアドバイスをして下さったのが、同じ選者として出席されていた珠子さんです。6月9日の熊本大会でお会いしたいものです。

柔らかな光は君の愛でした

藤井 智史

私は、NHKひるまえ川柳の選者として、四年目になりますが、第1回の特選が智史さんでした。智史さんは現在、川柳塔社同人として活躍されています。

年金の暮らし猫にも言っておく

今岡 健柳

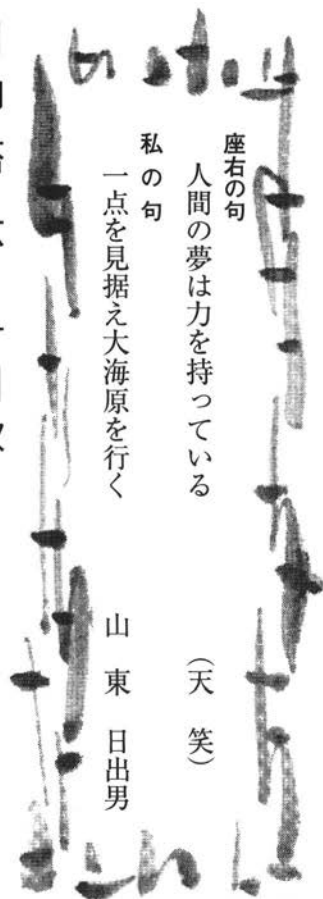
昨年の松江市川柳大会でお会いした時、NHKひるまえ川柳の入選句をプリントしたTシャツを着ておられたのが健柳さんです。

生きるとはつくづく自分とのいくさ

西出 楓楽

この度の写真名鑑の編集委員長として、四名の委員と共に活躍されたのが楓楽さんです。楓楽さんは、川柳塔社の相談役です。

まだまだ多くの人を紹介しなかったのですが……最後にご応募して下さい皆様へ厚く御礼申し上げます。そして編集委員の皆様、美研アート様、ありがとうございました。



座右の句

人間の夢は力を持っている

(天笑)

私の句

一点を見据え大海原を行く

山東 日出男

川柳塔 六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「但馬の棚田」

■巻頭言 全日本柳人写真名鑑

定住者としての川柳

小島 蘭 幸……(1)

川柳塔(同人吟)

藤村 亜 成……(2)

川柳塔の川柳讃歌[®]

小島 蘭 幸 選……(4)

橘高薫風句抄

木津 川 計……(44)

自選集

坂 本 蜂 朗……(46)

■ショートエッセイ「日の丸の微笑み」

坂 本 蜂 朗……(49)

温故知新

川 上 大 輪 選……(49)

水煙抄

吉 村 侑 久 代……(50)

英語 de Senryu[®]

新 家 完 司 選……(67)

俳風柳多留一二篇研究 60

吉 村 侑 久 代……(68)

愛染帖

新 家 完 司 選……(70)

檸檬抄「退 屈」

山 口 光 久・斉 尾 くにこ 共 選……(74)

主幹・理事長の選任について

定住者としての川柳

藤 村 亜 成

昭和五〇年一月「川柳ねやがわ」が発足したが、その翌年一〇月の句会に詩人小野十三郎氏を招き、「定住者の文学・或は詩と川柳に及ぶ」の講題で話してもらった記録を見つけ、再読してみた。約一時間に及ぶ筆録で、全文紹介できず残念だが「川柳は定住者、即ちその地域社会に住む庶民のものと思われるので少しは参考になるのではないか」と持論を展開する。小野十三郎と言えば、伝統的な抒情を否定(1948年「奴隷の韻律論」)し批評性、即物性に富むリアルな詩風を確立された事で有名だが、小野に傾倒した詩人長谷川龍生が小野十三郎全詩集の解説の中で、「物」の瞬間の動き、心の発火点、構想の円周、イメージの展開、それらが同時性をもって、一つの明確なフールドをつくりだす。それは、日本の伝統的な歌にはかつてなかった歌の視点であった。と述べている。

本題に戻るが氏は「住所を定めぬさす

一路集	「タイム」	鴨谷瑠美子選	(78)
「不足」	後藤宏之選	(79)	
初歩教室「感謝」	居谷真理子	(80)	
川柳塔鑑賞	升成 好	(82)	
水煙抄鑑賞	島 ひとかる	(84)	
せんりゅう飛行船	新家 完司	(85)	
『麻生路郎読本』余滴 ⁽⁴⁶⁾	栗原 道夫	(86)	
追悼 閻魔さんに逢いに行つた敏さん	中原比呂志	(88)	
追悼 柳弘さんを悼む	川 端 一歩	(89)	
インスピレーション・ナビ 印象吟	大 西 泰 世	(90)	
川柳塔WEB句会「桜」	青砥たかこ・石橋芳山共選	(92)	
第33回 国民文化祭・おおいだ2018		(93)	
五月本社句会		(94)	
句会燦燦	弘 津 秋 の 子	(98)	
各地柳壇(佳句地十選/福士慕情・古久保和子)		(99)	
六月各地句会案内		(112)	
柳界展望		(114)	
■編集後記(ひとこと/富永恭子)	朱夏・勝弘	(116)	

座右の句

身のうちの花瓶に花のない日なり

(楓 楽)

私の句

隠しても心の闇を照らす月

大 浦 芳 子

らい人、漂泊者はふる里にあこがれる。そこから生まれる抒情を拒絶し反対の立場にある定住者の文学を位置付けたい」と話し、また、自分は旅行嫌いだから、合理的に定住者を意識してするようにとられるかもしれないが、十八世紀の詩人アルフレッド・ド・ビニーの「旅行」という詩に「いかなる国、いかなる土地が私の目に目新しいだろう。私の思想が予め描き出すことのできないいかなる土地、いかなる国があるか」要するにいかなる国も、土地も、予め描き出す頭の中の思想だというのだ。つまりわざわざ自然を見に行かなくても、頭の中の思想にあるのだと言う。これは定住者としての意識を持った思想で一般庶民(地域定住者)にもある思想であることは確かで、定住者の眼で見る川柳に思想を持つてほしいと結ばれるのである。

小野十三郎は亜鈍との交流の範囲でしか川柳の理解は無いが、川柳をリアルとして捉え批評眼(思想)を持ちなさいと詩人の立場から提言されたのである。あらためて川柳を文学として位置づける要素の一面として自覚させられたのである。



小島蘭幸選

檀原市 居谷 真理子

ちりりんと咲くふわり咲くひよいと咲く

あてもなく歩けば城跡に着いた

三泊の心やさしい街でした

泣けるだけ泣いたら虹がつくれるよ

夜の桜告別式は明日の午後

その時はその時いまは生きる時

大阪市 升成 好

悔いぬよう今日一日を使い切る

七人の敵が私の研磨剤

雑音がなくて眠れぬ旅の宿

たとえようない程うまい昼の酒

掌と同じ温度にする手紙

のどかだと褒め住みたいと言わぬ過疎

尼崎市 永田 紀恵

ペーパードライバーだから免許は返さない

酒蔵の試飲チヨロチヨロけちくさい

掛け損になってお祝いがん保険

ひとつ嘘つけば二つ目薬に出る

演技力名優並の北のドン

八起目で知った転びのテクニク

松原市 森松 まつお

酒抜くともども調子が出てこない

七時までビール半額急がねば

大丈夫だろうか絵馬に躍る誤字

はてここは外国ですか大阪城

出された物残さず食べて痩せている

家事全般奥儀極めたのはワタシ

尼崎市 山田 耕治

車掌さんが待つてくれてる走らねば

アルバムの疼くページをまた見てる

恋人は詩人困ったことである

タマちゃんも行くところがある今日は留守

脈とってにつこり母にVサイン

目の奥に好きだと書いておきました

西宮市 秋元 てる

有難い何時もの朝が待っていた
観る人に添うて答えてさくら散る
浮き沈み流れ任せも乙なもの
いらん事は言うな お薬増えるだけ
眠れぬと言う老母昼寝三時間
待合室仲間のよう な敵のよな

寝屋川市 籠島 恵子

倒れても伏しても一本の道
ゆっくりと羽根を広げる二十四時
折り紙の折り目性格みぬかれる
わたくしのスマホ能力持てあます
ブランド品わからずどうもスミマセン
冬の線路にも春が来て夏が来て

箕面市 中山 春代

さくらさくら湯たんばやと片付ける
よもぎたんば春を踏んでる万歩計
樹木葬わたしは花の精になる
うつし世に別れを惜しむ花筏
病棟の窓を雀がのぞきこむ
寝そびれて鬼平を読む良い時間

大阪市 田中 ゆみ子

象の居ない動物園の淋しい絵
歴女でも理系女でもなく飯を炊く
夫が居て子が居て旨し木の芽あえ

風呂敷の度量四角も三角も

私の今日一日へ二重丸

怖いものはなかった水色の日々

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

花水木の下でシルエットが招く
何も彼も拝むしぐさでいる温み
すり抜けを許さぬ脇をしめている
わたくしの都合で知らぬ顔をする
嗜んだワインで饒舌になった
明日のため少しの酔いとちよつと夢

竹原市 岩本 笑子

孫と折る千羽鶴です夢を追う
二年ぶり娘の優しさに癒やされる
バアちゃんとハーフの孫が言うてくれ
娘と孫とお墓参りの空は晴れ
少し安堵ガンは眠っているらしい
五つ程病を持って生かされる

米子市 吉田 陽子

花に来て風に帰って行く仏
真心と分かる小さな荷が届く
裏切りは突然朝の鏡から
ほつといて欲しかったのは若い頃
新しい羽だむずむず感がある
原発を匿う桜うつくしい

堺市 澤井敏治

異議ありとテレビに叫ぶ父である
人すまぬ町にさくらの咲く無情
人ごみを避けたら散っていたさくら
魚跳ねる薄目を開けただけの午後
留守電に入ってたのはくしゃみ三つ
ひと呼吸おいて補助線ひとつ足す

土佐清水市 辻内次根

一頻り風の形に春の雨
田に水を張って日本の里になる
どうしたものかと遺影に独り言
夢の中だろうか陽射しが温かい
日本語の雅在来種の挽歌
息切れがしている昨日から今日へ

神戸市 細川花門

人生の黄金古稀を過ぎてから
推敲の一句春暁まで及ぶ
好きなことすきなだけで暮らすなり
春愁と妻に言っても取り合わず
啓蟄と言うが我輩穴の中
初蝶に出逢う遠くでホーホケキヨ

三田市 北野哲男

子へ荷物隙間埋めとくよい紙面
年一度存在示す山桜
蠶つちまゆの文字を教えに来る黄砂

洗濯機止めて笹鳴き確かめる
祈ること忘れて帰る花の寺
断捨離に私の過去が消えてゆく

神戸市 富永恭子

自信持ち風に向かつて立つ風車
デコボンの出べそに深い意味は無い
手をつなぐ人が恋しい春霞
ジブリから学ぶ人間とは何か
筍が木の芽を待っているらしい
花散らす雨も雨なり葉は笑う

尼崎市 藤井宏造

デミタスのコーヒー少しもの足りぬ
歯を磨く片手を腰にあてながら
刑事よりおまわりさんは優しいそう
老い二人しゃあないなあと一つ傘
無料でも北朝鮮の旅は嫌
婚姻届出さないと出来ない離婚

桜井市 安土理恵

春色に満開女たちのカフェ
わたしを消しに地下街に潜る
花花花へたこやきの匂い
気がかりを詰めたリュックと人波へ
当然のようにやってくる もしも
仰ぐ花あなたもいずれ散るでしょう

藤井寺市 鈴木 いさお

近ごろ少しうすい気がする僕の影
有難いお経をうつらうつら聴く
うちの猫ときどき愛想笑いする
死にたいと思つたことはありません
ワンカップ呑む金だけは残しとく
もどり寒なのに亡友は戻らない

大阪市 川端 一步

友情の絆となつた痛み分け
疲れたら代り番こという妙手
内視鏡まるで童話のトンネルだ
負けん気の桂馬が飛んで戻れない
六厘坊調べて路郎惚れ直す
民営化古巣に少しある未練

河内長野市 山岡 富美子

本屋さん超高層にある窓辺
胃薬は要らないお喋りが弾む
花は散る微熱のつづく日も終わる
物忘れ瞬間芸が冴えてくる
猜疑心自分を信じられなくて
堂々巡り答弁という目晦まし

南あわじ市 萩原 狸月

風邪ですか花粉症かと聞くマスク
花が散り第二志望へ子は巣立ち
マンションとおこがましくも言う古屋

緊張が少しゆるんで五月病
味よりも高い値段で覚えてる
ワープロが横書きにした日本語

鳥取市 夏目 一粹

雨宿り待つか濡れるかエイ走る
そのうちにゴミの捨場はきつと宇宙
老いてゆくことを忘れていた不覚
厄介になりそうお年寄りの群れ
どん底が長いと丸くなってくる
残すもの心だけですきようなら

松山市 柳田 かおる

春色に拳をひらく蕾たち
お疲れさまでしたふわりとスイトビー
吹っ切れたように弾けたシャボン玉
斜めから観ている新しい魅力
足元にあつた想定外だった
ため息を春の音符にのせてみる

岡山県 田中 恵

自然から学ぶやさしい花言葉
ほめ言葉ひとつ探して陽が沈む
直角に曲つて影を困らせる
ふる里が両手ひろげて待っている
花よりも笑顔きれいと書いてある
愛情の証に花を絶やさない

東京都 川 本 真理子

夫婦喧嘩負けたのは若かりし亡父
相槌の得られぬ昔話する

退院を待つて仕舞った雛飾り

猫の字のけものへの背丸く書き
正しいという字が少しくまくなる

八王子市 川 名 洋 子

咲いて魅せ散つて魅せます花筏

ケータイの電源切つて芝桜

猫までも寛いでいる春日影

絵具手にアマチュア画伯春うらら

子等の声聞くこともなく桜老い

横浜市 菊 地 政 勝

紫煙輪に吹かす男に職がない

銭湯の富士にやすらぎ置いてくる

転ぶのは自分のせいにしたくない

百歳へフアイトを燃やす腹八分

廃業のいきさつを知るまねき猫

さいたま市 星 野 育 子

大空に好きな一字を書いてみる

バラが咲く公園を借景のカフェ

子育てにかける手塩の匙加減

口喧嘩している中は仲が良い

最終便一点だけを見てる人

朝霞市 前 田 洋 子

関西弁の通じるところ転居先
独り居へ時に弱気が顔を出す

根気ない老猫明日の我が姿

良い方に受けて摩擦を避けている

亡夫の分まで吞めぬが供養兼ね

上尾市 中 村 伸 子

瘦せたたと夫の言葉にある温さ

ほらあそこ白い花がと若き看護師

眠れぬ夜クラシックとさだまさし

映画のような夢を見ました主役です

大負けに負けたら見るぞDVD

可見市 板 山 まみ子

サービスにくれたラップがくつつかぬ

車みなすり傷だらけあかいろ(エジプト旅行二句)

灼熱の王家の谷の音は風

ロボットに頼つて暮す時が来る

風格の藤井六段まだ十五

愛知県 早 川 遡 行

逃げるとき必ず後ろ振り返る

挨拶のない騒音に腹がたち

損をした儘では終われない株価

酒飲めるうちはまだまだ生きられる

持つべきは友 酒飲みに来てくれる
温泉へ行こうよ先の無いのち

犬山市 金子 美千代

見て見てと梅の競演くらくらす
完全に諦めついた雨になる
重ね塗りして私の色にする
花吹雪亡夫のもとへ飛んで行け
高いから効くと思っているサブリ

犬山市 関本 かつ子

向き変えて見れば愉快な事ばかり
百均の数珠で子供もご焼香
オクターブ下げ香典の額決まり
五十年とうに過ぎてもクラス会
スーパールの二階店員だけ目立ち

鈴鹿市 小河 柳女

便利な渦へ巻きこまれ流される
落花ふわり浄土までふわり
大切なこと見て学ぶ見て習う
わが孫よダイヤモンドの心ばえ
虫殺したらシステムがこわれます

富山市 島 ひかる

豪雪に耐えて花見に華を添え
作家ではないのに作家だと言われ
首の皺気になり出来ぬネックレス
八十路には八十路に似合うネックレス
くまモンに逢う団体の一人です

神戸市 上田 和宏

やっぱり桜朝な夕なに見飽きない
平穏だ院主の筈が聞こえる
平和的に過ごせば明日も平和です
悩み無き顔づくりして家を出る
平成つ子季語の暮しが遠ざかる

神戸市 奥澤 洋次郎

料亭と居酒屋にある平和論
進化する科学は私おびやかす
人間の匂なつかし町工場
国民は煙に巻かれて消える税
また一人若者消えるビル隙間

神戸市 能勢 利子

予定では老後ハワイで暮らして
理解力だんだん落ちてシンプルに
家族の名怪しくなってきた老母
落ち込むと亡夫の日記を読み返す
昔遊び教えてくれるユーチューブ

神戸市 山口 美穂

頑張れもしんどう素直にはなれぬ
藤咲いて亡父見送った日を思う
亡母さんも好きだったよね桜餅
雨に耐えた桜も風でさようなら
来年も会えたらいいね花見上げ

明石市 梶谷和郎

尼崎市 藤岡りこ

無呼吸のたびに閻魔が振り返る
妻との和やつと見つけた交差点
先頭は風除け二番手を走る

人の面被ると悪さしたくなる

浮き沈みあるも切れ目のない歩み

芦屋市 黒田能子

愚痴ひとつぶつける人がいてくれる

老介護今現実になつてきた

積み上げた記憶がみんな消えそうだ

幸せの二人の鐘が鳴りやまず

鐘の音に誘われ白い鳩が舞う

尼崎市 市坪武臣

親しみが増せどマナーは崩さない

慣れすぎてもマナー忘れずありがとう

急がねば逢いたい人も老いてくる

ラブラブの君に逢えるかクラス会

古書の街を覗いて通る癖がある

尼崎市 加川靖鬼

燃え尽きたらしい静かになりはった

人生航路やつと入江に辿りつく

フグ提灯ふくれ面したまま吊られ

日本の地図買い占めてさくら咲く

地図にない風を読んでる渡り鳥

裏通り満開の花ひっそりと
厳しいが心ソフトな子の嫉
一人旅満面笑みの孫が来る
よろめいて足腰頭まで倒れ
料理下手鈍包丁のせいにする

尼崎市 藤田雪菜

幾年月カナダの友にあこがれる

いい事がありそう道の駅覗く

水牛車三線の音と海光る

口紅を赤に元気を貰う春

雑念を落してくれる美容院

加西市 金川宣子

やめられぬ透明人間つまみ食い

携帯を持たぬ友との待ち合わせ

四月馬鹿純な私が踊らされ

オレオレの電話も欲しい老い一人

免許証返納したい火の車

川西市 大坪一徳

政官財リーダーに無い正義感

住宅のローンも終わり暮も建て

老々介護ボチも仲間に入れてやる

小走りで妻を追うこの体力差

二〇〇本すべて観ているサユリスト

川西市 岡 一心

たゆみなく踏みしめ歩く初舞台
祝勝会悔やし涙も祝い酒

世論には叶わぬ人気安倍総理
百手先読みきり少年棋士見事
ママすてき私の未来晴れ舞台

川西市 山口 不動

色事を老人書いてみたくなり
斎場に掲げる家名見て通る
司馬遼と一緒に歩く紀行文
桜散る見上げずに行くひとり者
孫赴任横浜と聞き地図を買う

篠山市 北澤 稠民

病院で飲み会日時決めました
いいことが半分あればよしとしよう
真心をつかい果した日の疲れ
体力と反比例する老いの意地
良い方に良い方に取る思いこみ

篠山市 酒井 健二

贅沢に今日もさら湯の風呂にいる
傘の露切って明日の絵を描く
リセットが出来ぬ頭を持て余す
安宿にくすんだ花が咲いている
雨と風吹いてなんぼの旅でした

篠山市 酒井 真由

草上の午餐げんげの首飾り
かさねゆく微罪と生きる歎びと
真実が暴かれてゆくにぎり酒
還らざる日々月下のギターソロ
まだ学び足らぬ世間のうらおもて

三田市 足立 つな子

明日ありと想わず今日を生きること
在るがまま深入りせずに素で居たい
団欒の温もり離れ独り立ち
うぐいすに迎えてもらう墓参り
もやもやと踏ん切りつかぬ友が逝く

三田市 上田 ひとみ

友と書くまたあえるまで何度でも
元気ですそう言ってまた出す元気
今までは幸運だった指定席
義母はもう眠っていたいだけになり
お砂糖を入れる入れない自由です

三田市 尾崎 一子

千年桜側に次世代継ぐさくら
千年桜観光バスと草団子
訃報メールさつき別れて来たばかり
満開のさくらを背に寺まいり
青春の夢みる孫に癒やされる

絵手紙に母の真心届けます

三田市 久保田 千代

助け合う人の輪花が咲いた街

運命線替える言葉を重ね聴く

マンネリにならぬアイディア絞り出す

丸く住む夫婦の保つ車間距離

三田市 多田 雅尚

大相撲必ず写すきれいどこ

孫の顔見せても他人は喜ばず

「そだねえ」で済まぬ4月の物価高

パソコンも持たぬ我が身にネットでと

未成年ノンアル飲んで罪なるの

三田市 谷口 修平

明日に向け病室予約する議員

コンビニの味に近いと褒められた

女子会は酒が無くても盛り上がる

ルビ無しで名前読めない保育園

文字読めぬ子でも空気は読んでいる

三田市 野口 真桜子

一行詩孤独な夜を飼ひ馴らす

大病で緩んだリング細い肩

空の巣を捨てられぬ母は古い

桜桃忌今年も細い雨が降る

大病で医者に内緒のサブリ増え

妻子から免許返納迫られる

五百円貸したと言えず五年たつ

土壇場になると結構出る力

叱られた上司に出合う喫煙所

パツとせぬ顔が集まる喫煙所

三田市 堀 正和

種袋抱いて暦と睨めっこ

外出へ三日振りにと髭を剃る

長寿国 青春切符混んでます

新しい仲間はみんな福の神

平成が平和のままで終るよう

三田市 村田 博

命綱外して古稀の武者修行

新緑にテンポ良くなる万歩計

トップから玉虫色の指示が出る

縮こまる気持ちに少し吟醸酒

蒲公英の絮とワルツを舞う土筆

高砂市 松尾 柳右子

血糖値何とか保つ八十路過ぎ

晴天のつづき墓参も一周忌

カラオケが好きで元気に歳重ね

一人居になれて野草は話好き

裏庭に花が咲いてる手間いらす

宝塚市 田中 章子

フットワーク軽く桜へ旅支度
阿咩とはいかぬがそだねーでふたり
正比例からだ弱ると気も弱る
謝りながら生きるのはよそう
桜散って三色団子食べました

宝塚市 丸山 孔一

片手だけ手袋道で泣いている
門前で手合わす少女清清し
持つてゐるが何の部品か解らない
黄泉の国 国境線が見え隠れ
何となく危険頭上で鳴くカラス

西宮市 緒方 美津子

吊り皮にエールおくれ立ちつづけ
老い進む丸くなつてはいけません
母さんは忘れたふりをしてくれる
家庭内別居音を大事にしています
人間ドック歳相応がうれしくて

西宮市 亀岡 哲子

ひと切れでも買うてめでたい春の鯛
しっかりと生きてのんびり暮らしたい
賞味期限追うて一人の台所
まかないも三日であきたアルバイト
どないかして生きて行けると言うタイプ

西宮市 西口 いわゑ

助け合う形でふわり花いかだ
花吹雪座してひと時空になる
花の下ハンカチ敷いてくれたひと
階をゆつくり花に会いに行く
雨降りも予約を果たす菌科の椅子

西宮市 福島 弘子

間に合った投句もう次追つて来る
退屈を飛ばす球春胸躍る
タイムマシン迷った挙句今がいい
肥料足らず曲りきゅうりも自家産は
水不足あの豪雪にある安堵

西脇市 七反田 順子

こぶし咲く街路樹の応援歌
珍らしく車内読書の五六人
出不精の夫をさそつて動物園
餌隠す犬の仕草に笑いあい
屋台骨揺るがすことはないように

姫路市 古川 奮水

ペン先が素直にすべるいい知らせ
玉音を聴いた天皇退位する
何となく笑って散った午後三時
実戦を知らない政治屋軽い口
白鷺城美人に写る桜咲く

奈良県 安福和夫

苦勞人己の過去を内に秘め
聞き上手人の心が読めている
太子なら千の相談こなすかも
世界へもアピールしたい和の心
平和理念必須たるべし全宗教

奈良県 谷川 憲

満員車紙の新聞希有となり
入社式みんな期待の星だった
新米のウグイスが鳴く懸命だ
デジタルでは表現できぬ人の機微
歳とるごと嫌なところが亡父に似る

奈良県 中原 比呂志

自治会に幼児の声なし子どもの日
花吹雪隅に寄せられ愚痴話
祝宴も人手不足か紙コップ
免許証返して足腰鍛えられ
薬には頼らず歩く一万歩

奈良県 長谷川 崇明

苺喰む特急電車通過待ち
パネル増え野菜に替えて売る電気
休まずに動く十指よありがとう
四苦八苦クロスワードのスケジュール
五十年結ぶ夫婦の赤ワイン

奈良県 渡辺 富子

憂さすべて華麗に流す花いかだ
乗り遅れた時流に吠えている夫
追うものをなくして石になる男
ゆったりと五感をひらき深呼吸
淋しさと背中合わせで雨を聞く

奈良市 阿部 紀子

夫の友病院を抜け会いに来た
そのまま二人鳥取へ行き飲み明かす
それ以来二度と会えずに逝きました
飲み友を無くした夫寂しそう
能楽と和食味わう優雅な日

奈良市 大久保 眞澄

疑わしきは罰せずという無罪
あなたはもう死に体なんですよ総理
鏡よかがみウエストを知らないか
蛋白質より糖分が性に合う
義理チョコも渡せずボソボソと食べる

奈良市 高橋 敬子

靴箱にはかぬヒールが場所を占め
タイムリー落花の中に鳩の鳴く
抜く生える競走しあう庭の草
我のみの時間に合わす炊き上り
奈良行きはまるで私が異邦人

奈良市 辻内 げんえい

花見ツアー葉桜ばかり見て歩き

鉄棒は俺に似るなと孫を見る

ゲームアプリを勝手にスマホ孫五歳

救急車乗ったあの日は忘れない

シンプルに生きてはいても絡む糸

奈良市 米田 恭昌

ハナ丸の勢いスマホ買えと言う

鉄拳はもう死語となる部活動

傷心を里の山河に癒やされる

人は善ほのほのさせるミニコラム

未来予想もう笑わなくなった鬼

生駒市 飛永 ふりこ

能楽を受け継ぐ気概はつらつと

菜の花の御飯老舗の味わいが

白髪はやわらかくつきり気骨見え

花水木伸び伸び生きる大空へ

些細でも針で突けば大事に

香芝市 大内 朝子

生きていてよかった花のファンファーレ

花吹雪風のかたちを舞い遊ぶ

春うららとても不気味なオスプレイ

わたくしの心まるごと知るさくら

来年も会う約束をするさくら

香芝市 山下 純子

鬼瓦にらみきかせて家守る

鬼嫁の噂のわりにチャージミング

入学の喜び春をひとりじめ

ときめきを忘れないでね葉指

指先まで真心込めておじぎする

和歌山市 磯部 義雄

堺越しに貸し借りをした味噌醤油

髪染めた妻三ツ四ツ若返る

充電が利かずいいよ賞味切れ

先生も新入生の名が読めぬ

春が来て雪の被害も忘れがち

和歌山市 上田 紀子

辛酸を舐めて大きくなる器

手の内はもう読まれてる妻の勘

数珠繰って命と対峙するお経

正論を口にしたなら首が飛ぶ

街中に一際光る老舗の灯

和歌山市 坂部 紀久子

八十路今は自慢の歳と言われない

眉毛に白髪いらぬ貫禄ついてくる

表には見えぬ所に自負を持つ

昨日の悔いふつつふつと爪を切る

女人禁制そんな言葉がまだあった

和歌山市 武本 碧

和歌山市 堀 富美子

棄て家一日経てばもう忘れ

夜明けのコーヒー尽きぬ話を混せている

それなりの絵を画き続け現在地

かたつむり急いでみても絵にならぬ

説教のとぎれがなくて固い椅子

和歌山市 土屋 起世子

一日の笑う回数増えた春

釣りきちの息子の旨い一夜干し

娘の家モダンになつてすまし顔

器から溢れぬように盛るサラダ

庇つてる嘘は素直に聞いておく

和歌山市 福井 菜摘

生き延びるための揉み手は忘れない

しがらみの梯子はずして楽に生き

三猿の自我をたたんでひとつ屋根

年輪を重ねて醸す渋い味

八十路まだ滾るものあり辞書が友

和歌山市 古久保 和子

山菜も私も灰汁を抜いてから

お花見の莫塵にも上座らしきもの

本屋閉店街が乾いてきたようだ

エンピツを削っただけで今日おわる

日曜を待ち遠しいと思わない

身の丈で明日の私のレール敷く

スニーカー春の出版を待っていた

肩張らず生きるひと日が楽しくて

胸熱くしてナツメロ絶唱す

有難う言いたい人が傍に居る

和歌山市 松原 寿子

感情を削って風を抱いている

ピンからキリキリのままでも生きられる

誘われたお茶から時を癒やされる

シングルの文字と素直に生き延びる

逢えぬままやと解ったことがある

岩出市 藤原 ほか

その後は幸多かれと祈りたい

運命と諦め路を歩いてる

リバーシブル上手に使い暮らしてる

春だからすてきな人と出会いたい

春になるテンションあげて闊歩する

海南市 小谷 小雪

濁音が回転軸にからみ付く

恢復もゆつくりになる旅帰り

キコキコ自転車春を軽くする

唇からポロリ零れてから底に

幼子の髪なびかせよ三輪車

海南市 堂上泰女

子の母校勝つて感謝の寄付すこし
病院へ行く弟の手を借りて
足の怪我癒えれば花は満開で
娘からの電話は母を呼ぶばかり
意志強い息子母似と誉めてやる

紀の川市 宇野幹子

挑戦へ翼しつかり補強する
魂も血もたぎらせる一行詩
ナイーブな真昼の月がいじらしい
ぶれの無い背中を子等に見せておく
晩学をふるい立たせる電子辞書

紀の川市 北山絹子

百均の傘で寄り添う仲のよさ
大輪のバラと比べるアマリリス
冷汗が出そうな席に付く至福
父の背の広さは僕の誇りです
延長戦ピンチヒッター買って出る

紀の川市 楠原富香

遺産分け固い絆も崩れ行く
三つ指に秘めた女の底力
自分史の中に脈打つ忍一字
ため息はつかぬと決めた老介護
産声に父は万歳してしまう

紀の川市 山東日出男

厳寒のカムチャッカにも春は来る
ずぶ濡れの犬よおまえも独りかい
公平なチャンスを生かすのはあなた
羽化をするトンボは天気図が読める
ジェット機のはるか彼方に北斗星

田辺市 岡本昇

決めた道まっ直ぐ行けば夜が明ける
冷凍の魚は肩が凝るだろう
少しづつほぐしてゆこう堅結び
見栄張らず等身大の道を行く
ご先祖が幅を利かせた門構え

橋本市 石田隆彦

大きいのを取ってしまった欲悔む
リセットをしても白紙に戻れない
喜寿傘寿ローカル線がよく似合う
偽りの答弁心痛まぬか
疑念抱く民に答えを返さない

京都市 清水英旺

ふり返ること多くなる八十歳
八十路来てしきりに思う親の死期
お花見は隣の桜で済ましとく
湯につかり聞く雨音は花散らし
雨をゆく張り合いのない選挙カー

京都市 藤井文代

八幡市 今井万紗子

溜め息でバツと見えたのは現実
いつのまにか守るお金に守られて

あまい声斜めで聞くと裏の声

口で言えぬ「ごめんなさい」は書くことに

今朝もまたわたしに喝とラジオ体操

京都市 榎本宏子

濃い目だな贗作だろう写楽の絵

ブラックの味通ぶり知った初デート

ストックした冬の皮下脂肪外さねば

しどろもどろ胸がまぶしい男の子

強気の姑歳に勝てぬと孫の守り

京都市 三宅満子

来年も飾れるだろかお雛さま

筍の元気をもらい夏を待つ

三食を作って食べて二重丸

長年の精進見せる京舞妓

ヘルパーのソフトな声で動く母

長岡京市 山田葉子

ケキョケキョと鶯はまだりハーサル

百人百色老いをそれぞれ輝かす

若さ保つほんの少しのやせ我慢

縫れたまま丸い言葉が出て来ない

刺激のない暮らし足りないのはリズム

ガラス窓ピカピカにする母真似て

誉めて有めて時によいしょして二人

満ちるまで二人三脚走らねば

夢中になれる趣味の一つに生かされる

遅咲きだけどあなたに出合い結ばれた

大阪府 米澤俣子

この国に生まれしあわせ花の下

たっぷり目がいい愛もビタミンも

義理で振る旗はそろそろ下ろす時

深呼吸五臓六腑へ青い風

薫風忌先生しのぶ雀鰯

大阪市 岩崎玲子

新年度こころ入れ替え口癖に

新緑の中通り過ぎ若返る

朝の家事BGMはラジオです

遠廻りしたが晩学おもしろい

夢で会う母はきれいなままでした

大阪市 内田志津子

病癒え少し遅れて咲く桜

万策は尽きたふりだしに返ろう

いつだって丸い母の背道標

この星に命預けてみるとする

幾つもの命預かる介護の手

大阪市 宇都 満知子

長生きしてね言われる歳か誕生日
手ぶらの子あれこれ持つて帰らせる
車窓から花見しながら行く句会
一年生いつてきますが誇らしげ
納豆 奴 工夫してますトッピンゲ

大阪市 江島谷 勝 弘

杖もつと席を譲ってくれました
婆ちゃんは月に二回も旅に出る
不器用は誰にも負けぬ自信もつ
疑惑もたれたら私なら辞めます
迷うのはフトコロ具合次第です

大阪市 榎 本 日の出

天狗にも鬼にもあつた絶頂期
満面の笑みが幸せ呼んでいる
思い切り蹴った小石が動かない
暇つぶしの筈のゲームにはまった子
裏の裏見抜くお人に恐れ入り

大阪市 榎 本 舞 夢

春寒波過信しすぎて風邪を引く
無理出来ぬ年になつたと自覚する
一気に春落ち込んだ老い熱くする
卒業入学彩る桜待ったなし
老い二人見事な桜貰う活

大阪市 大川 桃花

眼鏡頭に置いて亡父の歳越える
難儀やなあ食後の菓子か癖になり
やっぱりなア神も奇特な人が好き
貼って飲んで点す塗る薬あしんど
女三人一人が泣いて喧嘩済む

大阪市 大治 重信

浮き浮きと花咲く道を遠回り
救われし妻の笑顔と子沢山
助け合い救い求めたツーショット
悪女かも赤い唇紅莓
誰とでも挨拶交わす花見酒

大阪市 奥村 五月

虎負けて消えてしまった休肝日
ライバルが強くなったとほめ殺し
飛行機も列車も止めた凄雪
下戸さえも桜の下で踊りだす
土俵には女医も上がれぬ緊急も

大阪市 笠嶋 恵美

透析の弟急死聞くショック
棺の中まだ死んだとは知らぬ顔
弟の死からいろいろ学びあり
老化を認め心自由にあそべる
桜さくら新自転車でウツ飛ばす

大阪市 古今堂 蕉子

へその緒のなんと見事な命綱
問題にするなと親切な他人
そうだ生れ変わるんなら花だ
締切りが迫り活性化する脳
朝一番コーヒー飲むため食べるパン

大阪市 坂 裕之

新芽吹く古い葉散らし活きいきと
奥の奥突き詰めないで手打ちする
何度でも挑戦するが届かない
誰だって言いたい事の二つ三つ
バス停へ駆け込む人を待っている

大阪市 田浦 實

茶柱に背中押されて小旅行
言い争う相手いるって幸せだ
他人との比較やめたら気が楽に
川柳塔届く日胸がどつきどき
花鳥風月やっと仲間に入れてくれ

大阪市 高杉 力

戦略がいるぞ大盛りかき氷
髪型の話さびしく聞いている
恋みくじ優柔不断と出ています
花柄の切手を探すラブレター
客を見てトラキチになる運転手

大阪市 高杉 千歩

生命線とうに切れてる九十二
カレンダーに○がないホーム半年
マンションに囲まれ空が遠くなる
洗面所朝の笑顔が写らない
介護士さん美人揃いで遅しい

大阪市 谷口 義

洗濯物ひらひら五月のひらひら
これが人生だ素麺がおいしい
反抗期に入ったらしい炊飯器
もうすんだことだし桜も散ったし
おばあさんの日傘に夕焼けがまぶしい

大阪市 津村 志華子

戴きまず御馳走様と日々感謝
熱燗と好きな酢蛸でご命日
老いたとて心に光るものがある
山菜が届いて春があふれ出す
お経より童謡がよいエンディング

大阪市 津守 なぎさ

病室の夜明け感謝と鳥の声
考えと同じにならぬ骨粗鬆
遠来の友は生いき艶がある
つらくても歩行訓練回復期
制限のある三食も愛の鞭

大阪市 寺 本 実

末吉と神様までが皮肉言う
定年後エプロン姿板につく
キレイねと皮肉まじりに言つたのに
耳遠く妻の愚痴にもなれました
ニュース後は血圧下げる薬要る

大阪市 栃 尾 奏 子

雷鳴と共に激しい猜疑心
雨の中泣けばだあれも気づかない
無人駅私と猫の雨宿り
泣き果てた女は虹を描くだろう
あり合わせ女は雨に逆らわず

大阪市 原 田 すみ子

約束がもう明日になる日の流れ
半分こ欲もまだまだ抱いている
悔しくて泣いたわたしを卒業す
スマホ誤作動ペットフードが四個来る
消したい色わたらしいと人が言う

大阪市 平 井 美智子

佳作ですよと中途半端な誉め言葉
以上でも以下でもなくてワカメ汁
お守りのように抱いてる古い疵
少しづつ捨てる淋しくないように
柔らかくなるまで今日を揉んでいる

大阪市 平 賀 国 和

花の下孫が生まれて宮参り
緑の風受けて元氣な鯉のぼり
子供の日母の粽を思い出す
子らのため続いて欲しい平和な世
南と北民族の血が物を言い

大阪市 藤 田 武 人

新しい世界へ挑むアスリート
逆算をしても真実変わらない
閉じ込めた愛の想い出第二章
気まぐれな女神が仕組む乱打戦
故郷にポツリ二人掛けのベンチ

大阪市 藤 原 千恵子

隊を組み卒業記念バイク行く
涼しい眼拾った財布届ける児
おだて上手息子に乘せられて使われる
一期一会香道とやら覗き見る
どんなのか臨死体験興味あり

大阪市 山 本 加お里

姉歌い一緒に歌う長電話
薬指ダイヤの指輪もういらぬ
欲しいものまだまだあつて生きている
ドツと沸きよくよく聞けば私の句
薄味に慣れて以来の倦怠期

大阪市 吉内 タカ子

ほうびかな桜トンネル車椅子
寒暖差まけてマスクは外せない
ああ天気コーヒー飲みに遠回り
七回忌コーヒー好きは忘れない
好きさだけ自由に言える世に拝む

大阪市 若本 安代

蝶々と花の咲く音聞いてます
趣味ひとつ母ささやかに若くする
念入りに君に会う日の服選ぶ
ためらいを見せると弱くなる私
花選ぶ人はやさしい顔になる

堺市 奥 時雄

披露聞くため最前列をとる
折角の前列呼名なしですむ
入選に投句の友の顔浮かぶ
句会ではオモロイ奴を通してく
川柳の趣味けなされたことはない

堺市 柿花 和夫

老いの波意外なことに私にも
何もかも許したくなる花明り
あのセレブ大阪弁で値切ってる
酔うほどに丸まって飲む同期会
幸せはきつと遅れてやってくる

堺市 加島 由一

花吹雪おきなおうなの通り抜け
通り抜け終活などは考えず
最高齢のキスは大提灯の下で
妻と花見た日腸閉塞になる
妻としか夫婦ぜんざい食べてない

堺市 源田 八千代

小学校がごみ埋め立ての敷地とは
国民に支持をされたと突つ撥ねる
花冷えにお医者さんまで風邪気味で
嫌厭の花粉症またぶり返す
週一で一時間だけのデイケア

堺市 齋藤 さくら

あんた誰いつか行く道受け止める
五年生孫にスマホを教わった
紅引いて一つ二つの嘘を付く
言い訳が虚しくなってくる夕日
気が置けぬ友にストレス分けている

堺市 坂上 淳司

赤提灯見ると突撃したくなる
二日では治らず三日酔いの老い
酔うてまへんでと呂律怪しい飲んだくれ
ご機嫌な親爺付馬連れ帰る
飲まなけりや左団扇と悔いる老い

堺市 遠山 唯教

聴くだけで解決したという悩み
どん底のいまを出発点とする
妻が結婚した歳になる孫娘
人も世も流れるままの遠賀川
再会の六十年が走馬灯

堺市 内藤 憲彦

晩学のなるほどと言う宝もの
マイナナーバー要ると窓口譲らない
ひとりでは生きてないよと傘を貸す
急カーブばかり選んで初デート
白い靴少し汚れて合う歩調

堺市 矢倉 五月

ティッシュ抱えて今更花粉症デビュー
生クリーム布団にイチゴ鎮座する
風呂沸きましたにハイハイ今日の会話です
それじゃあと またねで別れられる仲
失言ひとつゴロンと胸に重い石

池田市 栗田 久子

やさしさ強さ女としての武器と見る
雑草は名のりもせずに咲き終えた
えぐみも旨味わう筍のえぐみ
そこそこという重宝なあいまいさ
花も実もある人と見たしなやかさ

茨木市 島田 誠一

スマホ見て欠伸こらえている議會
長々と市長代理がする祝辞
宴の社長おだての詩吟止まらない
証人の椅子で揺れてる人の道
薬づけしても長寿と今日の幸

貝塚市 石田 ひろ子

葉桜になって公園ほつとする
堂堂と生きる緞帳降りるまで
捨て切れぬ本ごめんねとダンボール
春野菜祖母の出番の台所
浮かんだ句だんだん駄句になっていく

河内長野市 大島 ともこ

ただいまの声で私をはかる母
久し振り会釈をしつつ名を探る
運命的の出会いまさかの勘違い
肝っ玉母さんの壁超高い
デリシヤスな人参で夫走らせる

河内長野市 梶原 弘光

バカ陽気野菜は霜で死んだあと
骨密度アップ信じて納豆食う
血液はサラサラ気持もサラサラ
一見さん同士肩組む縄のれん
亀さんの例もあるからマイペース

新緑にうぐいすの声畑起こす

河内長野市 木見谷 孝代

冒険と銘打ち来たり孫二人

体力は下降六歳児に負ける

お持ち帰りのおでんをたんと仕込む朝

子の注いだビールに酔うた春の宵

河内長野市 黒岩 靖博

十度目の免許更新裸眼で可

はがゆいと弱る身体に気合い入れ

初孫は今なら抱ける力ある

あれこれと健康寿命日々努力

呑み足らんもう一軒と思案する

河内長野市 辻村 ヒロ

また薬増えて長生き目指して

好奇心あつて楽しく生きられる

イエスノーだけでなかった分岐点

八十路から我がまままましゃしゃり出る

もう少し甘えていたい傘の中

河内長野市 藤塚 克三

孫出来ぬ夫婦は庭で花野菜

草むしりすつきりしたが花粉症

土いじり汗が呼びます生ビール

筍に木の芽を添えて旬の酒

俺みたい採れた胡瓜は曲がつてる

バリュームのように小言を流し込む

十四歳目指す天下は無量大

きらめいて老犬も初講義

よろしくとドサリ閻魔へ袖の下

半透明だから明日に夢がある

河内長野市 森田 旅人

若者の悶えスマホに吸いとられ

じぐざぐに光も陰も見て歩む

やさしさをくれる花壇の日向ぼこ

勉強努力大いに遊ぶ日記帳

語らない友の涙に耳すます

河内長野市 山室 光弘

ノーマイク清楚な顔が凜とする

濡れ落葉妻はこの世のリスベクト

都合悪いフェイクニュースに仕立てあげ

ライバルの野辺の送りに去る時代

目配りも心配りもして男

岸和田市 岩佐 ダン吉

言葉選び空気を読んだ日が暮れる

四面楚歌それでも僕は黙らない

損得を離れしつかり空仰ぐ

反論を浴びて私が生き返る

弱みまで私の武器にしておこう

岸和田市 宮野みつ江

早すぎた桜にずれた春ブラン
戻り寒しまいかけてたコート類
出窓に猫絵になる所知っている
家族とや猫一匹と私だけ
遅い春猫も遊んでくれません

岸和田市 雪本珠子

本当は淋しい老いの瘦せ我慢
人間って酔えばぼろりと本音でる
輪の中の会話で脳を活性化
週二回身体と対話する八十路
好奇心持ち続けたら脳元氣

四條畷市 吉岡修

溜まり場を探ってみたいリトマス紙
豪華ロビーの無料の席でひと休み
一本道なにもためらうことはない
神前の誓いみごとな偽装ぶり
正体なく酔うても同じことを言う

吹田市 木下敏子

にこにことラジオ体操朝の顔
苦勞した事は忘れて花盛り
薄味に馴れてゆっくり歳を取り
チューリップ並んで六つ咲いてくれ
たんぽぽの踏まれて丸い花咲かせ

吹田市 須磨活恵

生真面目で正論吐いて疎まれる
春彼岸法話ききつつ舟を漕ぐ
ささやきに心が迷う五月闇
五月晴れ地蔵もちよつと眠たげな
日が沈む今日も無事ですお蔭さま

吹田市 野下之男

またしても高官人事ひねり出し
長官もあれこれ言われもうやめた
がんばれよもらわれて行く秋田犬
息子が転勤の後地震来た
お父さんの弁當重いお月さま

高石市 浅野房子

空想を破った電話どなたかな
俳句詠む季語の多さにおどろいた
相撲見るやはり遠藤勝つてほし
色白の体にまわしよく映える
車椅子押してた人ももうあの世

高槻市 指宿千枝子

暖かい朝日に元氣湧いてくる
勢いに乗って洗濯掃除です
楽しんでおひとりさまの二十年
徘徊でなし日曜のぶらり旅
止められぬ酒と煙草がいとおいしい

高槻市 片山 かずお
好きなのためなら広くなる心

言い方も声もソフトに魅せられる

白髪が仕立てた品の良いお顔

五十年の歴史夫婦はノーサイン

我慢強い同士で続いてる夫婦

高槻市 島田 千鶴子

にらめっこ写楽の首に負けました

花吹雪出会いと別れ見届ける

終章は迷うことなく自分流

あと一歩バスを見送る停留所

ジャスミンの香りに空家秘密めく

高槻市 初代 正彦

朝からエンジェルス夜はタイガース

新緑も愛でる夫婦のレモンティー

掃除機のコードも邪魔になる齢

本棚をじんわり占めてきた柳誌

バスタブをひたすら洗う夫の顔

高槻市 杉本 義昭

核乗せてゆっくり自転する地球

合格で笑顔も桜も満開だ

ほめ言葉皮肉と知らず真に受ける

鮭缶をカシヤツと開けて酒二合

初夏の風ついハミングを口遊ぶ

高槻市 富田 美義
億ションより長屋で有つ人情味

義理人情削り浮世を狭くする

臥す妻が俺の心境元気づけ

涙腺がヤッパリ緩む義理の数珠

路地裏で学んだ真の人情味

高槻市 富田 保子

デバ地下にいろいろ並ぶ手抜き材

あのと手振りで話す悪い癖

神様へ許してほしい時がある

うんちくを傾けたがる老いの口

ゴルフよりゲートボールがよく似合う

高槻市 原 洋志

話聞く一緒に雨に濡れてから

母が来て春の音する台所

主流派の花見の席の隅にいる

サングラスかけると海が見たくなる

ペースメーカー換えて新たな恋をする

高槻市 松岡 篤

ネットでは物を買えない慎重派

またかいな妻は飲み会僕は留守

風呂屋では喧嘩風景まず見ない

新じゃがとバターのような夫婦です

プレミアムフライデーって有ったよな

高槻市 安田 忠子

春らんまんハイヒール履き颯爽と
お天気にハラハラしてる通り抜け
朝日浴びゆっくりお茶を飲む至福
十年の通院止めて調子良い
浮き浮きと帰って来れば鍵が無い

豊中市 池田 純子

花粉症なんて平気と布団干す
一年生闊歩しているランドセル
満開の桜待つてる天の国（天国へ旅立った姪へ）
甘いものたんとお食べよ天の国
しっかりと手を握ってたさようなら

豊中市 上出 修

付度が過ぎて安倍さん大ピンチ
快進撃まさかまさかの二刀流
パワハラに悩み始めた鬼コーチ
両の手でじゃんけんをしてボケ防止
定年後遅寝遅起き自由人

豊中市 江見 清

泡少し消えたら飲むカプチーノ
免許証返上事故ゼロのままで
虫ワタシ驚く春の草むしり
呼び止めたとたんに言うことを忘れ
お帰りは遅いが帰るだけでした

豊中市 藤井 則彦

ソフトタッチされた子猫の上機嫌
奇妙な夢はひよっと明日の私かも
自分ファーストずっと貫きたい余生
寝相だけは若いつもりでいる傘寿
吊革の妻の手に触れハツとする

豊中市 松尾 美智代

買ひ物は大好きだけど疲れます
無駄話楽しんできますジム仲間
心の声書き止めておく日記帳
ありがとうごめんなさいで老いの日日
新しい元号までは頑張ろう

豊中市 水野 黒兎

出席に〇と返信さくら咲く
菜の花の海にヨットは白い蝶
いつもよりちよつと浮かれる春帽子
春の滝どつと轟く青い音
見上げては塔の高さを確かめる

富田林市 片岡 智恵子

品評会自慢げに金魚は泳ぎ
自動運転事故れば運転手逮捕
京の春来たよ山門開いている
二十三の言葉聞き分けトドの芸
長寿国九十を古稀と言いたし

富田林市 関

よしみ

きらきらの水面にわたし彩載せる
春嵐写楽の口で吹いてくる
薫風を一気に吸って轍立つ
くり返す修正未完の自画像
奥の手が千本以上金剛寺

富田林市 中井アキ

もの忘れが続き限りない恐怖
その昔わたしも赤い渦だった
お隣の若さに元氣貰うてる
こっそりと遺影写真は撮っている
遠い日の愛引き摺っている踵

富田林市 中村恵

傾けた耳は幸せだけ拾う
教訓がおとぎ話の中にある
蹴躓くたびに内なるもの叫ぶ
殊更に心遠くに置く苦言
打ち明けた洗ひ浚ひに付く尾鰭

富田林市 山野寿之

乱切りの妻の庖丁低気圧
スーパ皿きれいに拭うコッペパン
三寒四温四の辺りは春よ春
逆さまに振っても出ない知恵袋
聞くだけの頷くだけのボランティア

寝屋川市 伊達郁夫

弁当を出され一日縛られる
しっかりと生きた皺です自慢です
介護ノート母の命が泳いでる
墓洗う顔にやさしい風が立つ
言い足りぬことが背中に書いてある

寝屋川市 富山ルイ子

若し場所に決めても行かぬでもよろし
予約金がフイになるとは思われぬ
古里に入るのはイヤどうしても
紫香師奥様の法事一心寺
終の場所決めねばならず考える

寝屋川市 平松かすみ

かくれんぼ好きな私のサン格拉斯
サン格拉斯二年も寝てた集会所
八十路なり手抜き上手になりました
手のしびれ足のしびれも老いの波
良い方へコントロールをしたい脳

寝屋川市 森茜

ブラックユーモア飛び交うパブのうす明かり
肅々と最前列にかしこまり
墨痕の余白に問うている無常
日溜りの猫とわたくし舟を漕ぐ
採血の午後はとろとろ前のめり

羽曳野市 安芸田 泰子

丹精の証見事に牡丹咲く
一先ずは下げた頭に湧く不満
びつたりと合った辻棲きな臭い
平均寿命それから先は余得かも
地に還る花には未練ないものか

羽曳野市 宇都宮 ちづる

満開も葉桜も観て孫帰英
春寒に洗ったコート我慢する
娘等の手を借りた断捨離よく進む
吸うと吐くヨガを始めて意識する
特売に弱く膨れる冷蔵庫

羽曳野市 徳山 みつこ

いい山だ蕨ぜんまい起立して
亡夫へのバントマイムを今一度
博打如きに血税を使うこと勿れ
戻らぬ時を逃してはなりませぬ
楠落葉掃いて香りを頂きぬ

羽曳野市 中川 ひろ介

音階のラの音ナースが呼び覚ます
胃を切除人生ちよつと途中下車
リハビリを積んでようやく娑婆の風
癌病棟逆転劇へ粥啜る
久し振りに句会選者を涙ぐむ

羽曳野市 仲谷 真

梅雨明けが今年は早く成りそうだ
衣替え室の中ではTシャツで
国会が閉会したら解散か
交流戦バリーグ強い今年もか
雨の日はドーム球場有難い

羽曳野市 藤原 大子

同じ話キュンと来る日と来ない日が
鈍感になっていざこざやり過ぐす
金運がなくてほど良い暮らしぶり
一言のウィット暗い場が和む
正義感憎まれ口を言わせてた

羽曳野市 三好 専平

コーちゃんの愛の讃歌に聞き惚れる
サンキユーがでけたら英語満点や
黒塗りのページの下の核の傘
食パンの耳大好きな妻も古い
東大を出て嘘つきになりにけり

羽曳野市 吉村 久仁雄

きな臭い手が九条に触れたがる
有象無象よりも善い人先に逝く
議事堂の空でムンクが叫んでる
継ぐ話母は黙って値札はる
勝ち馬に乗って足腰弱くなる

東大阪市 北村 賢子

広い宇宙でたった一つのこの絆
お母さん心で呼んでみる孤独
リセットの特効薬はアルコール
後期高齢納豆食べてまだ粘る
一病と仲良く付き合おう余生

東大阪市 佐々木 満作

こいのほり子供の夢は無量大
五月病ルーキー正に悩む頃
切り抜きの記事に隔世の感あり
今更に笑い話と聞き流す
後期高齢だんだん世事に疎くなる

枚方市 海老池 洋

幸せな未来夢見る花の種
哲学の道へ迷いを捨てにいく
隠してもやがてはばれる雪景色
間引く程蒔かんで欲しいダイコ種
散骨もいいなと思う花吹雪

枚方市 小林 わこ

競い合いしたくとももうできぬ人
私だけ知らなかったわ泣けてくる
巻き戻すビデオに嘘が見えかくれ
涙一つこぼして孫に笑われる
孫が来る食べたいおやつ目あてです

枚方市 寺川 弘一

神様は邪魔くさがりで返事せぬ
真実はぬるぬるするり掴めない
真実の答えにもある裏表
サンキューとアイラブユーで生きられる
副作用より命大事と薬飲む

枚方市 二宮 山久

ボランティア元気でこなす暗れ男
ほら春が来てます庭の花水木
頂点をきわめた男の高いびき
何事もなく幸せな日が暮れる
笑いネタ探して歩く楽道家

枚方市 二宮 紫鳳

春うらら老いに歯止めのウォーキング
草餅に新茶の香りおもてなし
新緑を歩いてパワー充電す
ストレスを流してくれた郷の海
何事もなかったように桜咲く

枚方市 藤村 亜成

原点はここから全てがはじまった
澄んだ目によく似合っているレンズ
年金は家計に小遣いは稼ぐ
怠けてた余白を埋める日記帳
ころころと転がる心に杭を打つ

枚方市 山口 弘委智

古新聞初入選の朱の印

ブランコを蹴って見上げる広い空

遅咲きが残り時間と勝負する

想定外枯れ木に花の咲く余生

春の朝命を繋ぐ五七五

藤井寺市 伊藤 アヤ子

さわやかに頬撫でてゆく春の風

古里は地図でみるのは近いのに

葉桜が繁った下でひと休み

朝晩の冷えに毛布が洗えない

今年こそ造幣局の通り抜け

藤井寺市 太田 扶美代

うたた寝から覚めたら桜散っていた

ステロイドと春の一日さまよいぬ

ふわふわでスカスカ私の記憶

どの辺で笑えばええのばびふべ

素通りするもう兄ちゃんの居ない駅

藤井寺市 田付 絹枝

年忘れ今日もリュックに赤い服

タクシーが徒歩をすすめる京花見

花見より行列車種が目をうばう

カート引く人に手助け吾ひよろ

正装の亡父母が夢中に我起こす

藤井寺市 吉田 喜代子

三分咲き卒業生の輝いて

仏縁か話の尾っぽ途切れない

電気ガス得な話で綱引かせ

朝食後忘れた薬持ち歩く

もの忘れ笑うしかない八十路道

藤井寺市 若松 雅枝

新調の制服似合う花の下

スタートの子に頑張れと蝶が舞う

退屈で猫と遊んだ午後三時

晴後くもりお天道様が他所見した

被災地の食糧不足救わねば

松原市 市川 雄太

平成も終わり近付く春の朝

三十歳何か今から始めよう

真剣に日本の未来考える

あの人に見てほしかった晴れ姿

安倍政治を終わらせ平和取り戻す

箕面市 大浦 初音

ランドセルやと背中になじんだね

ほめ言葉そえればやる気です子供

お互いにつかずはなれず夫婦道

窓際になって日差しが目にしみる

邪な心を洗う風の中

箕面市 酒井紀華

八尾市 寺川 はじむ

句読点うって明日も生きのびる
細く長く精進します五七五
種切れて句が出来ないと言わせない
流れ雲ひよっこり母の顔になる
雨の日は雨を楽しむ山頭火

箕面市 出口セツ子

八尾市 宮崎 シマ子

新しいおもちゃスマホに夢中です
子より悪い食事中にもスマホする
返事だけしてるが何も聞いてない
縛られず縛らず自由な色描く
賢妻だと言うと忍耐だと夫

箕面市 広島巴子

八尾市 村上 ミツ子

念願の冠雪の富士息をのむ
ふうふうと雲吹き飛ばし富士仰ぐ
しらす井口一杯に春はこぶ
ぱつと咲きぱつと散りたし私も
灌佛会慈愛いだだき甘茶飲む

八尾市 内海幸生

八尾市 山根 妙子

とても真似できぬ赫灼老い桜
桜散る車椅子よそれ急げ
盆栽に苛め抜かれた跡がない
先生は孫です携帯買い替えて
法名を貰っているのに未だこの世

九条抱いて真っ直ぐに来た日本
喜寿過ぎて十年旅券へ奮い起つ
真っ直ぐは話の奥にある含み
わくわくを秘めて米研ぐ妻の留守
七年経っても洗い流せぬ被災跡

西開ければ西風に乗り福が来る
親病めば娘等の暮しが狂いだす
漸くに閻魔さまからきた打診
孫よお前は抱いたババは抱かれぬ
大丈夫じゃあないけど今は生きてます

人命よりも大事な伝統つてなに
救命のあと塩をまかれた土俵
立てば座れず座れば立てぬ痛み
笑い続けるわろてんか終わっても
順調に遅れることだってあるが

桜から回り舞台で季が移り
奥深い話一拍おいて得る
せっかちな開花に予約乗り遅れ
休刊日うっかりのぞく空ポスト
飼主のマナーにちくりチョーク跡

岡山県 池田 たか子

二度寝したつけが一日追いまわす
ライバルにロボットがいる入社式
花冷えに湯たんぽ抱いてとろりとろ
コンビニへ歩く訓練シニアカー
音無しの構えで老いが攻めてくる

岡山県 高岡 茂子

手造りのコサージュ胸に孫祝う
「ほたるの光」昭和と共に消えていた
秀才とはどうもご縁のない家系
料理掃除上手に手抜き日を送る
そわそわと孫とのデート待つ財布

岡山県 山縣 のぶ子

休み惚け顔をぶるつと入社式
友達が退屈しのぎ草団子
味わいはちよつと斜めの妻の顔
そよ風に笑って散ろう姥桜
普段着の私が好きと夫の言う

岡山市 丹下 凱夫

満開の桜老樹は静かなり
美しく散るために咲く桜
誠実に咲き誠実に散る山桜
柿若葉どこも幸せそうな家
マントヒヒ描けば俺の顔になる

岡山市 永見 心咲

群れ抜けてみれば空気の美味いこと
底辺に生きると決めてから強い
背負う気もないのに過去を聞きたがる
まだ癒えぬ過去を穿るカラス二羽
満月を飛び越えていく女の背

岡山市 藤成 操江

春彼岸孫も真面目に手を合わす
役員が戸別に取りにくる募金
加齢だと言われるたびにでる吐息
携帯とあめをチェックし靴をはく
疲れたと言えば倍増する疲れ

岡山市 前田 恵美子

集金に百点さげて孫が来る
他人事いつか身に降る時が来る
残念だお姉さんとは呼ばれない
何もかも推し測れずに穴があく
お花見は散歩ついでの川の土手

笠岡市 藤井 智史

ミサイルが飛ぶたび老けていく地球
カビはえる十年前の身上書
青春を駆け抜けヘッドスプリング
隊列を離れ自由なバタフライ
前向きに生きる遠くを見るメガネ

広島市 岸 本 清

宇部市 平 田 実 男

体調が良いと夢見も心地好い
便座では時に私も思想家に

脳活に般若心経なぞり書き

アッシーをしてる今宵は休肝日

薬より効き目が早いコップ酒

竹原市 石 原 淑 子

あれでもとお金の溜まる本を買う

お元氣ですか笑顔みたくてボランティア

住みよいが待機児童のゼロの里

入学の児童一人の担うもの

セレモニー終る廃線やがて野に

三原市 鴨 田 昭 紀

まだ飛べる翼があつた頃の秘話

運命という強敵に立ち向かう

あれこれとうるさいご近所のオーム

肩書を失くして気付く有頂天

冬木立根っこは諦めていない

岩国市 上 村 夢 香

うぐいすは上手になつて里の主

第二幕ベテランの味あたたかい

復興のいちご農家がピアノ弾く

底にいて上がる力を溜めている

基地の町我が家を守る戦闘機

妻とするケンカ負けたり敗れたり

野党より夫人が怖い安倍総理

辞世の句遺影そろそろなと思う

農業へ虫も抵抗力をつけ

川柳の奥の深さへのめり込む

下松市 有 海 静 枝

湯けむりにややこしい事みなほける

変化球受けてしゃっくり始まつた

賢くは成れない皺は増えたけど

小悪魔にも成れず意地張るあまのじゃく

優柔不断囁っているか花吹雪

防府市 坂 本 加 代

明日知れぬ今日の喜び甘受する

足元を温め合つて猫と居る

ルノアール美人の基準ホツとする

揺れながら一点になる時を待つ

一〇〇年の違いが分かる句の姿

鳥取県 石 谷 美 恵 子

ボチボチと出てくる祖母の知恵袋

廃屋をなぐさめるよう桜咲く

私より猫の医者料高くつき

花の名に強いが愛想ないお女性

春の陽に元氣な私見てもらう

鳥取県 斉 尾 くにこ

感性のバリエーションは豊富です

饒舌の重ね着沈黙の鎧

見ただけで私の良さはわからない

カッコ付けては破れたりほつれたり

わたくしをいつも裏切るのは私

鳥取県 竹 信 照 彦

桜下の宴今年も出来ず花を踏む

逆転打なんて無理です八十路坂

趣味だけは歳に差は無しあの世まで

ボランテИА金と体力知恵が要る

カラスでも責任取ってカーと鳴く

鳥取県 西 谷 悦 子

乱高下に苦慮する気温春初め

上横下さまま向いて椿の美

席順もなくどうぞどうぞと桜咲く

草木にも適当に水喉潤う

自分史に少しピンクを足しておく

鳥取県 細 田 裕 花

しっかりと生命線は春を浴び

花散って何も無かった顔をする

引き出しの数の多少は知りません

仲直り糸口ひとつあるけれど

想い出のからまる窓は夜開く

鳥取県 松 川 行 男

四月馬鹿あれは昨日と笑いこけ

流し雛幼友達同じ川

故郷をぐるり見渡し流し雛

流しびな無事着いたとは聞いてない

雛無口送り人こそ騒がしい

鳥取県 山 下 節 子

誰彼に愚痴をこぼしてさっぱりす

ありがとう あなたの愚痴がヒント生む

プレミアムフライデーだが休めない

母さんの愚痴は流しの前でもれ

久々の帰省の孫の背いの丈

鳥取市 池 澤 大 鯨

列なして新芽のつづく畝のはて

桜木の^{つぼみ}新芽をもいで幹枯らす

山菜の新芽をめでて散歩する

スズコ採り熊避けの鈴音澄ませ

風を見て海苔を掻き取り海女の春

鳥取市 奥 田 由 美

濃いすぎて誤字が正せぬ太いペン

お茶碗も洗ってくれる夫が好き

好きな人が好きだった街夫といく

うぬぼれの鏡見せない深いシミ

転んだ日他人の顔で夫が居た

鳥取市 加藤 茶人

鳥取市 田中 天翔

ゴマスリと付度どこがどう違う
ひと突きはペンで決めますスキヤンダル
聞こえない振りで年寄り使い分け
揉め事は面白い聞き耳を立て
美容には良いが家計簿には悪い

鳥取市 岸 本 宏 章

鳥取市 棚田 大

うきうきと捲る二月のカレンダー
お寺には垂れ桜がよく似合う
虎キチでもマテオ・ドリスが判らない
孫が住む都市の天気も知っておく
おしゃべりが得意な人の話し下手

鳥取市 岸 本 孝 子

鳥取市 谷 口 回春子

門出を祝い合わせたように咲く桜
異常気象春バテまでも連れてくる
残したい物だけ外す写真帳
歳相応の素顔ひとつを持ち歩く
筋書きのないドラマまた演じてる

鳥取市 倉 益 一 瑤

鳥取市 永原 昌 鼓

確信を抱いて闇夜をまっしぐら
どっこいしょ重い夕陽を抱いている
意地っ張りきつと家系だなと思う
オブラートに嘘を包んであげましょう
吠えている本当は泣いているのです

充電日きょうはしっかり炬燵守
夜桜に吸い込まれそうひとりぼち
主婦業の素人のまま五十年
長生きをすると秘密がまたひとつ
正直に生きて転んでそれでいい

鳥取市 棚田 大

パニックと騒ぐくらいはまだいいよ
メールでのメッセージだが心どこ
タツチの差聞こえ良い時悪い時
ホワイトチョコ夫が先に食べ出すの
側近を叱る上司も声弱い

鳥取市 谷 口 回春子

善い奴と悪い奴とは紙一重
嗅覚は犬も顔負け妻の鼻
口ずさむ孫のトーマス守唄
窓越しにたつと見てます気になる娘
コップ酒愚痴を注いで一気飲み

鳥取市 永原 昌 鼓

褒めてほめ後で教える正すこと
身の丈に合わせぬ夢見てまた嘆く
逢いに行く心は風雨厭わない
老いたれどたった一つの夢捨てず
あれやこれ出来ぬこと増え老い進む

鳥取市 中村 金祥

改ざんと隠蔽更に嘘重ね

春は忙し花見のはしごして元氣

側近を次々変えて素っ裸

ラケットを持てば老体忘れさり

帳尻が合わず渡れぬ向こう岸

鳥取市 平尾 菜美

楽な道選んだ鯉の滝登り

待ったなど利かぬ未来が走り出し

暗唱のお経すらすら軽快ね

介護綱子等と紡いで太くする

くり返す自問自答の生きる意味

鳥取市 福西 茶子

五十五回目の記念日もオーイお茶

五歳児の翼に乗って夢の国

赤い薔薇マツハのパンチ食らいそう

正直に生きた時々泣きながら

許したらあなたの為になりません

鳥取市 前田 楓花

口数の少ない人が何故か好き

親と子の距離が近づく卵焼き

日本の力になつてゐる桜

死の淵をさ迷う友の手が動く

蟻の目で見ると人間怪獣だ

鳥取市 山下 凱柳

老いらくの恋味はレモンかカルピスか

老いらくの恋の炎で火傷する

終活の準備ポチポチ始めるか

三食昼寝付きの生活何不足

春爛漫今日の吟行公園で

鳥取市 吉田 孔美子

居酒屋に預けた亭主お迎えに

居酒屋で振るまつている掬い魚

居酒屋のおばちゃんがおかず買う店

居酒屋はしんどそうだし面白そう

金庫には使い尽くした証書簿

鳥取市 吉田 弘子

墓終いの世に逆らつて墓を建て

夢のない未来より過去温める

ささやかな贅 日替りの入浴剤

下り坂軟着陸を模索する

要るものは要る主義生きた金遣う

倉吉市 猪川 由美子

隠蔽や保身に必死内閣だ

奨学金救う筈だに破産させ

桜さくらもてはやされて女王様

天皇陛下退位後ずっとお元気で

乱高下の異常氣象に草臥れる

倉吉市 牧野芳光

とんがった所が節になっている
螺旋階段下りたら明日が待っている
暖色の色鉛筆で夢を描く

裏道を知って寂しくなってくる
どう捻り出すか旅行を決めてから

倉吉市 山中康子

父さんを立てて暮らせば間違わぬ
会得して口は出せない孫の守り
あなたにはとても勝てない私流
散歩道今日のわたしは桜いろ
手塩にかけた子や孫を見上げてる

米子市 後藤宏之

狭いから散骨が良かったのんだよ
たのみごとばかりで仏怒り出す
日めくりの格言恐いおこられる
いい友でいたい男と女でも
夢ばかり追って片づけ出来ぬまま

米子市 後藤美恵子

野に置いた花が自由に咲き誇る
門灯が初出勤の靴迎え
懐に問うのは止める祝いごと
投げられた球をキャッチが今の縁
歳ですね起きて目覚まし待ってます

米子市 竹村紀の治

目立たない役が支える晴れ舞台
治ったら呑む筈だった花の下
弱点を突いてポイント二倍の日
その訳を語りたくない汚染水
葉桜になっても美味しい花見酒

米子市 中原章子

待ちわびる新芽なかなか出て来ない
エネルギー桜の花へ注ぎ見る
法要の集い妹白髪に
凜とした空気みなぎる列にいる
大谷の凄さ世界を照らしてる

米子市 成田雨奇

世の中がなんだかみんな水っぽい
カチカチ山の狸がばくの仲間です
幾度め寒の戻りの温め酒
例会のたびに孤独になる難聴
外人に会いたくなればコンビニへ

島根県 伊藤寿美

これからは一年毎に買う日記
茜雲施設ぐらしにやっと馴れ
独りの痛み抱いて独りで生きている
東京に住む子が遠い春がすみ
淋しさを入れた袋の破裂音

島根県 多久和 敬子

姿見に今日の私を確かめる
ストレスを包む風呂敷ちさ過ぎる
責められてどんどん強くなる私
油断大敵ロボットに追い越され
山坂を越えて出雲に根を下ろす

松江市 石橋 芳山

お前には無理だと結び目が固い
ブルンと脳みそ揺れてみたりして
白日に晒す我が身の展開図
米中を圧力鍋でよく煮込む
雨垂れを数えて情けないことだ

松江市 藤井 寿代

ブルースはお砂糖ですか塩ですか
丹田へ光源氏をはべらせる
モナリザの微笑みよりも今日のメシ
静止画の中にまったり居る夫婦^{ふたり}
葬ひとつ終えて大人になっていく

松江市 松本 知恵子

佃煮で旨いぞ伸びた路のとう
桜咲く里は明るし母達者
力ある方へ傾くコマネズミ
安心な野菜が育つミニ畑
読書熱失せて温泉ばかり行く

松江市 松本文子

蝶々を追って小石に蹴躓づく
誰か呼んでる 徘徊の旅に出るか
哀しみの固まり鳥に突つかれる
やっと思つけた友はホームに居るらしい
カラスが喚くそこ退けと言うように

出雲市 伊藤 玲峰

虹の橋架けて亡夫^{あな}を連れ戻す
お蔭様八十路半ばで老友^{とも}の世話
続々とハンゲル文字が泳ぎつく
風船をもらった屋根が唄いだす
阪神が勝って風邪が抜けました

出雲市 小白金 房子

健康で働く姿美しい
芽吹くもの春の光を摘んでくる
恵比須大黒名調きそう花の下
惜別の涙去り行く三江線
花の春観光船が着く港

雲南市 菅田 かつ子

親友がよいしょこらしよとやって来る
じいちゃんの部屋忍耐の軸を掛け
パンの耳持つてあひるに覚えられ
わかったと言うから当てにしていまい
森林やむかし歩いた道が無い

雲南市 松本 はるみ

花を見る暇もなかった戦中派
おだやかな春の野点に蝶も来て
一日をさらけだしてる日記帖
人の世へ媚びは売らない山桜
太陽は沈む階段登らねば

東かがわ市 川崎 ひかり

日にひとつ幸せ見つけ生きてゆく
転びなや亡夫の声聞く日暮れ道
転んでも転んでも丸くならない石を抱く
桜見る人の思いもさまざまに
御祝儀の競りで華やぐ桜鯛

松山市 栗田 忠士

一輪挿しほどの夢なら持っている
不器用に八十年も生きてきた
川柳で綴る私の日記帳
春愁などと粋がつているのは男
隠蔽もここまで来たか政と官

松山市 古手川 光

ぼとりぼとりこの世に未練ない椿
反面教師が霞が関永田町に
すぐ忘れる人が治めている日本
アスリート笑顔の奥にある闘志
脳味噌の賞味期限は切れました

松山市 宮尾 みのり

保証期間過ぎると家電音を立て
小回りは利く便利屋で終りそう
辛いこと吐いても消えるものでない
起き上り小法師疲れたとも言えず
おはようを明るい声でまだ言える

大洲市 中居 善信

ホップステップ後は息切れてしまう
余生幾許飲み損ないのになように
母だけは疑うことをしなかった
何を急いでいるのです総理殿
反戦反核譲れないもの抱いている

西予市 黒田 茂代

風景がご馳走野山浅葱色
ガラス拭き今日はしようか雨催い
現世から逃避ちぎれ雲と遊ぶ
人生に答出るもの出ないもの
ほほ笑みを知らないロボットのナース

西予市 西田 美恵子

結論は急ぐな雨もいつか止む
さくらさくら母が居たらと見る桜
正論が囁み付いてくる耳たぶに
美容室へ女再生して来ます
20ワット程の知恵ならございます

退院のわれを迎える桜道

高知県 小澤幸泉

聖堂の鐘の音つつむ春の宵

結婚の記念の日まで生きてやる

高知市と北見を結ぶ神の糸(姉妹都市)

シニア婚二人の脆さ知り尽くし

沖縄県 森山文切

東京で聞いた同級生の自死

暑い夏水鉄砲は帰省せず

女らしさをメールに添付してしまふ

ババロアが揺れて哀しくなる会話

ひまわりの迷路で迷う幸せ

熊本県 岩切康子

念ずれば何時か得られる信じてる

二年振り友の元気に安堵する

脳危うし思い出せない逢った友

誘われて古美術異美術パワー得る

手術後の夫のメニユー言う通り

熊本県 杉野羅天

初椿その一輪にあるロマン

春麗ら二輛列車の行くばかり

人生の坂降りてます肅粛と

強いふりして飲みましたボタンキュー

狼煙上がりて阿蘇に春黒い春

つくし摘み楽しうれし無我夢中

北九州市 小松紀子

きのうより今日は半歩前を歩く

夢希望あふれんばかりランドセル

ビンのフタあけてと頼む老いなのか

赤ちゃんはいいなほんわか気がなごむ

唐津市 坂本蜂朗

人間の証しのように嘘を言う

子育ての手抜きを埋める抱き締める

いい人と言われて独り見る鏡

生臭い妄想もしている傘寿

昇進に敵がぞろぞろ付いてくる

唐津市 山口高明

糾弾の野党も持たぬ決定打

鍵にぎる方は異国へ赴任され

死ぬなんて言う情熱に押し切られ

ほのぼのと女が匂う櫓がけ

百歳の夢は明日の朝ご飯

札幌市 小沢淳

齢だけを重ね未完の列にいる

三寒四温ふん切りつけよ花が待つ

セクハラにパワハラ女反撃に

取りとめのないおしゃべりにあるヒント

戦争と平和表裏の謎がまだ解けぬ

札幌市 三浦 強 一

平和つていいねパンダの列につく
笑顔には伝染力があるらしい
逆風が磨きをかけた人間味
ゴミ分別そうか私は生ゴミか
戒名の呼名が長い黄泉の句座

男鹿市 伊藤 のぶよし

遠い日の夢のかけらか花筏
一度なら仏の顔を見せておく
健康寿命まずは足腰スクワット
さすがマグロ解体ショーというデカさ
指紋ベタベタ頼りがいある薬だ

青森県 松山 芳生

地下道をするりと逃げた春の風
初対面名刺がわりのほめことは
春風の捲るページは緑色
結局は神が見捨ててゆくいのち
虹掴む業を知らない蟻である

弘前市 浅田 隆 樹

心地良い名残りの雪だ余生の身
春ですと新鮮野菜びっかびか
先送りいっぱい溜り晩年へ
腕の良い医者は早口聞きとれぬ
汽車の旅あるかもしれぬサスペンス

弘前市 稲見 則彦

わたくしをキリトリ線が囲んでる
ばば抜きを日がな一日する二人
欠点を隠さないのが長所です
公園の朝にドラマが棲んでいる
はてさてと南瓜の花に恋してる

弘前市 今 愁 女

エプリルフル雪降ったとて驚かぬ
冬から春舞台は直ぐにvariety出す
樹木師が賭けた桜もほころんで
外国の観光客もワンダフル
曖昧にしてはならない八億円

弘前市 須郷 井蛙

ヒゲ剃りの跡に残った二三本
毎日が日曜日なのに句が出来ず
副作用より当面の痛さです
基準法なくても蟻はよく稼ぎ
添乗員なしの旅行で癒やされる

弘前市 高橋 洋子

朝イチの水で体がスイッチオン
子に意見する齢は過ぎ注連飾り
欲張りを見透かされてるてんこ盛り
中段の構えで生きる二枚腰
空より川を上ってみたい鯉のぼり

水無月に雨読の葉そのまんま

妻の留守安堵と不安入りまじり

茶柱に和む一日を感謝する

着メロは誤報だったが午前二時

公文書のつべらぼうにして保存

水煙抄

(つづき)

札幌市 斉藤 宏子

雪室の人参目ざめ大あくび
作り置きごはんを食べて塾通い
手と足がカバンについた一年生
何もかも新たに光る北の春

白河市 鈴木 たけし

老農の棚田へエール送る空
波寄せるチャンス伺う平泳ぎ
熊が出る住み分けルール言いたげに
パイパスが通る祠のお引越し

ひびくと欄 原稿募集

1行15字20行まで(タイトルは別)
原稿の採否は編集部に一任のこと

第16回 鈴鹿市民川柳大会

日時 6月24日(日) 午前10時30分開場
会場 鈴鹿市中江島町18-28
TEL 059-388-1000 東樽(トウダル)鈴鹿店
☆近鉄白子駅西口より北へ徒歩12分
会費 2000円(ドリンク・昼食・発表誌呈)
兼題 各題2句・締切12時・開会13時30分
席題 「当日発表」
小林 祥司・浜野みさえ 選
「当日発表」
田沢 恒坊・水野奈江子 選
宿題 「人格」 吉崎 柳歩 選
「自由吟A」 木本 朱夏 選
「自由吟B」 天根 夢草 選
(☆自由吟は共選ではありません。別々の句
をそれぞれの選者に提出のこと)
事前投句「拝む」 橋倉久美子 清書選
ハガキに2句・住所・雅名記入(欠席投
句拝辞)
締切 5月31日(消印有効)
〒510-0213 鈴鹿市南旭が丘1-6-3
吉崎 柳歩 宛
主催 鈴鹿川柳会

第62回 全国鉄道川柳人連盟・広島大会

日時 6月25日(月) 開場 9時
投句締切 11時50分 開会 13時30分
閉会 16時予定
会場 ホテル 大広苑
〒725-0021 竹原市竹原町3591-1
TEL 0846-22-2970
呉線 竹原駅から徒歩15分
送迎バス 竹原駅 9時10分
10時35分
参加費 2000円(昼食・記念品・発表誌)
兼題と選者(各題2句・席題なし)
*欠席投句拝辞
「大地」 辻 晚穂 選
「流れる」 佐藤 岳俊 選
「わくわく」 伊東 マコ 選
「橋」 梶野 正二 選
「人間」 土田 欣之 選
「世界」 両川 無限 選
「花火」 従野 健一 選
「色」 小島 蘭幸 選
◎宿泊希望・問合せ先
〒723-0016 広島県三原市宮沖4-4-3
藤 帆子 TEL 0848-67-9062
主催 全国鉄道川柳人連盟広島大会実行委員会

川柳塔の

川柳讃歌

◎

上方芸能評論家 木津川 計

鉛筆と消しゴムまるで妻と僕

小谷 集 一

横山やすしと西川きよしも妻と僕の関係だった。なにしろ傍若無人やすしは「なるんやったらヤクザでも日本一になれ。お父さん、ピストルでも日本刀でもなんでも買うた」と息子を励まし、やくざまがい育てた。奔放だったからタクシートの運転手に「お前ら昔でいうたら駕籠かき、雲助やないかい」の暴言を吐いて訴えられ、女房役のきよしが謝り続けた。対照的にこの人はいつも謙虚だった。集一さん、消しゴム役の奥さんに感謝を。

加齢でも痛みないのはシミとシワ

大浦 初音

漢字と漢字を組み合わせて出来た漢字が会意文字です。最終ゴールに差しかかった女を漢字メーカーは「婆」と刻んだのです。波と女の組み合わせです。無数に押し寄せる波のように顔中、体中皺だらけの、くしゃくしゃのな

んちゅう汚い字をこしらえたことでしょう。さすがに申し訳なく、後ろめたくてシミとシワは神様に頼んで痛みを取り去ってもらうたのです。もし神様が聞いてくれなんだら初音さん、今ごろは痛みで七転八倒の毎日でした。

半日を河馬の欠伸を見て過ごす

平井 美智子

「三月の甘納豆のうふふふ」で知られる坪内稔典は河馬の句をも一杯詠んだ。「河馬になる老人が好きな秋日和」桜散るあなたも河馬になりなさい「みんなして春の河馬まで行きましよう」。河馬の欠伸を見て半日過ごすのは美智子さんのご亭主です。女は老いても元気な間はじつとせず一杯することが毎日あるのにおじさんはなんにもないのです。で、動物園へ行つてかくの如しですが、美智子さん、のどかでええ風景やないですか。

おばあさんの隣におばあさんが坐る

谷口 義

なんとも可笑しくて笑えてくるのは全身これ川柳家の義さんが詠むからです。私の住む近くの商店街に三人掛けの長椅子があります。毎日おばあさんが座った隣におばあさんが座っています。おばあさんはよう喋ります。なんぼでも話題があるのです。おじんはありませんから動物園に半日へたり込み、河馬の

欠伸を見えています。おばあさんは知らんおばあさんとすぐ仲良しになります。おじんは孤独なままです。義さん、男はつらいよです。

カタカナで書けば酸っぱくなる檸檬

中山 春代

戦時中ミス・ワカナやディック・ミネは困った。敵性語だったから芸名を変えよ、でそれぞれ玉松ワカナ、三根耕一に変えた。古川ロッパは盾つき、「エンタツ・アチャコがいるじゃないか」に内務省は「エンタツ・アチャコは漢字で書けない」と。檸檬をカタカナにする意味が変わるように、仮に「円立・阿茶子」にするとエンタツ・アチャコでなくなってしまう。カナも漢字もそれぞれ味があるのだ。春代さん、「レモン」は確かに酸っぱいです。

私にも活断層があるんです

古手川 光

戦争中、女の歌手は大変だった。ブルースがいかに、ハイヒールは履きな、イヤリング不可、ドレスは着るな。そんな中で渋谷のり子が中国の最前線へ慰問に行った。もんぺをはき戦意高揚の歌を歌え、と言われたが右のスタイルでステージに。兵隊たちの注文は戦中禁じられた「別れのブルース」や「雨のブルース」だった。彼女の歌に兵隊たちはみな泣いた。光さん、活断層も使いようですね。

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

旅先の動物園のフラミンゴ

潮干狩り 竿突つ立てて帽子掛

猫柳 亡き人ばかり思わるる

四つ足を連れた足跡 大砂丘

子と来れば砂丘隅まで砂の山

三人の子と玄奘のごと行く砂丘

物言わぬ金魚がうれし 誕生日

傷ついた父 その日から髭をおく

原爆忌 鳩ら火傷の脚運ぶ

ここに来て胎児のごとき祈りあり

曼珠沙華 恋わるるよりも恋うべしと

人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑

菊花展 天守へやさし菊の堀

菊の壺 薔薇の壺より物思う

青年長髪 ピストル型のドライヤー

老猿の半跏思惟像すぐ崩れ

陸橋は天下の嶮よ 梯子酒

点滴の血のみ暖色 手術室

手術なお神の議りに似し医師ら

手術なお交響楽が鳴りつづけ

紅薔薇は壺に剩れど血の足らぬ

呼吸つめていのちを合わす久しぶり

病院の丑満刻を尿捨てに

お見舞の三品四品は小包で

病院の金魚寡多なく退院す

縫針を折ってしまえり男親

クリスマス 祈れるものは祈りおり

消防車 前方睨む人ばかり

釣針を整う如し 旅前夜

元旦や 偲頌のごとくに師の一句

読み初めの今年は石田波郷集

自選集

小島蘭幸

句碑を真ん中に笑顔になつて
いる
除幕式終わると花の雨になる
除幕して五日目花が植えてある
満月になると会いたくなる句碑だ
五年後の句碑に会いたいから走る

村上玄也

週刊誌の見出し誇張が過ぎないか
オレオレも劇場型と化す手口
年老いて短くなった導火線
筋肉が弱りメリハリない身体
毎食後葉飲んだか妻が聞く

森山盛桜

六月の祝日僕の誕生日
ここに来て誤嚥は命取りになる
△が無難気楽なアンケート
純だった歌声文部省唱歌
日本語にだんだん疎くなる新語

臘にて

隣との境界線も曖昧だ

八木千代

戦時下のあの悲惨さえまほろしに
男の子二人産んで育てたのは確か
無かったか有ったか夢を見ていたか
歳月はおぼろに臘から風に

山本希久子

追うものがあり水溜まり飛び越える
つくしたんぽ春を拾って歩く土手
旬の野菜と季節に添うている命
春のブラウスうしろ姿に老いすすむ
九条が揺れる平和の灯が揺れる

板尾岳人

咲いたサイタ桜が咲きました敬具
水無月や破れた傘をさす鸚鵡
土砂降りにずぶ濡れになっている目高
長生きの秘訣タバコも酒も呑む
自殺した記憶ないのに酒旨し

川上大輪

乗り継いでようやく春に辿りつく
ところだと昔の話蒸し返す
煮詰めると愛は嫉妬になるようだ
運命を閉じ込めておく鉤括弧
ひと眠りするには丁度良い隙間

木本朱夏

かの日父の観た風景を探す旅
緑青に涙の跡のヨハネ像

うつくしいことばと美しい裸像

ゴーギャンの女の暗い目の光

喫茶エルグレコ女ばかりの昼下がり

小西雄々

湯上がりのビール値上げへ対処する

螺旋階段古傷ひとつ抱えている

れんげ草この世へ重いわが命

湯豆腐が有り一合の酒うまい

血糖値高いと食事うまくない

斉藤 岳

喜びを分け合い絆太くなる

生わさびピリッと自己を主張する

探求心途切れぬように種を蒔く

響き合う心と心いい仲間

むくむくといのち噴き出す芽の力

新家完司

としよりになりましたねと言う桜

イライラの棘を丸めて花吹雪

行きつけの酒場と同じタンブラー

時代から五年遅れてのんびりと

仏壇も位牌も墓も不要なり

高瀬霜石

梅雨時もあるさニンゲンですからね

気がつけば蛙もいない蚊もいない

食べたいと瘦せたい同居して困る

1足す1が2だとは限らない夫婦

ポイントが溜まったところに店がない

竹治 ちかし

生きる道選び日本の地に帰る

生かされて引き揚げ生後十ヶ月

自尊心守る毒薬頭数

顔知らぬ亡母が守ってくれた古稀

憲法はともあれ守りたい祖国

津守柳伸

温泉の梯子欠かせぬ常備薬

君子蘭つぼみぐんぐん競いあう

頑張りほどほどが良い骨粗鬆

京穴場ゆつたり桜見同窓会

充電をしたい頭も春霞

都倉求芽

晴天十日今年のはらはらせぬさくら

満開のさくらに今年も恋をした

春風にふいと遺影が囁いた

忘れものもう教えてくれぬ妻

とつときのお下がり待っているひとり

土橋 螢

極楽を探して歩く月あかり
生きていてよかったすこし歩こうか
夕顔を咲かせるつもり種を蒔く
薫風を走れば涙すぐかわく
長生きをして若者の邪魔をする

西出 楓 菜

四十年もう川柳も詠みつくす
AIと作句競う日すぐそこに
大失敗小さな段差踏み外す
自分責めるほかなしギブス松葉杖
日にち薬効くまで耐えるほかなし

仁部 四郎

梅雨入りを告げて予報士低頭す
梅雨晴れ間ホームの裏に干すおむつ
スーパールのチラシ梅雨明け待っている
災害は当然ではない梅雨の雨
梅雨の雨詩歌の種の程に降れ

前 ともつ

西の丸ここは国際花見何処
日日新た今日一日を光らせる
睨まぬが一瞬目線人に向け
老いるとはいいなあ度胸ついてくる
存在を神に委ねてわが余生

政岡 日枝子

がっかりをたくさん積んで生きてきた
老いてゆく音にも馴れて身を囲む
少しずつ遠退く世間との音よ
あたたかい絆をロボットは知らぬ
ご先祖の絆仏飯食べている

三宅 保 州

海を見ているときかなになつてくる
象も蟻も命一つに変わりなし
その名前ジンジャエールに酔うている
謝ってくれたらすぐに赦すのに
智恵という絆で結ぶもやい舟

宮西 弥 生

輝いた目もあるわたしのハイヒール
下心ばかりで春の絵が画けず
水の音火の音女を強くする
窓の外ひとりぼっちでない花がある
保証ないのちが笑う今日も明日

富士 慕 情

冬の絵を捲れば春を抱く蕾
牡丹雪春を知らせて舞い落ちる
冬越した虫に拍手をしよう
身を守ることは知ってる冬木立
人間も鮭も綺麗な水が好き

今年の平昌五輪における我が国のメダル数は過去最多の十三個、パラリンピックでは十個と大変な偉業を成し遂げました。国民の祝日には蔑ろにされている感じのある日の丸ですが、今回は特別に日の丸が微笑んでいるかの様にさえ感じたのです。

そもそも日の丸は、八幡船や戦国武将達の旗印として用いられていたものを、安政元年江戸幕府が日本船の印として定めたものだと言われています。

私は敗戦の時、国民学校三年生であり、長崎原爆では、戸板に乘せられた被災者を、最寄りの駅から近所の病院前路上まで、泣きながらピストン輸送したこと、その被災者の火傷に湧いた蛆虫を割箸で除去、腐臭など鮮明に覚えています。従って其の後、学校の先生に対する不信任感、戦争、日の丸に対する不快感も強くなったように思います。しかし日の丸には何の罪もなく、ただ自分の狭量が日の丸に罪を着せているだけではないかと気付き、今では国民の祝日に、何のこだわりもなく日の丸を掲げています。最後に、国民栄誉賞の話もある羽生結弦選手ですが、金メダル後のインタビュを受ける際、手にしていた日の丸を直接地面には置けないと言って、近くの人の手に預けたということでした。日本にはこんな若者が育っています。嬉しい限りです。

日の丸のトラウマ癒すメダル数

金メダル後の言動も栄誉賞

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

よその子の育ちが早いランドセル
松茸はあきらめました栗ごはん
そのうちに消える命をつい忘れ
税務署の紙一枚が恐ろしい
青春はいいな林檎のまる鬻り
いちにちのいのちの残りゴミ袋
火の車うちとは違う二月堂
大臣がかわり世間が変わらない
変わりばえない妻の美容院
川が消え人の情けも変わる街
寸陰を惜しむほどには何もせず
水平線の向こうに消えた赤い靴
水を売る今に空気も売るだろう
すきやきへきぬこし豆腐叱られる
兵馬備いくさ嫌いが一人いる
突風にわたしの絵馬が裏返る
次の世の妻は同じと思えない
千羽鶴だれも数えたことがない



川 上 大 輪 選

大阪市 森 廣 子

嬉しくてトイレカバーを春にする

春風に飛ばされそうな純情派

ブランコと昔話をしています

天翔けるお誘いの笛柔らかい

朝顔の元気が屋根を越えて行く

雑草の根気やる氣に目を見張る

河内長野市 穂 口 正 子

先頭は妻に譲って生き易し

アウトですなにがなんでも許さない

一つずつ予定追い掛け生きてます

浮んだ句唱えシャンブー氣が焦る

ごたごたを避けてごめんとありがとう

内緒だが一年ごとに若返る

佐賀県 真 島 久 美 子

後戻りできる位置までスキップで

抗えば抗うほどに蜜の味

その先を知ったら蛇になるだろう

傷痕を触って愛を確かめる

嘘です胸の海月を光らせて

ヒマワリが色褪せるまで待つことに

松山市 郷 田 み や

真ん中に座るとマッチするベンチ

暗闇はスキップをして通ります

ひと言が胸に刺さったまま四月

端っこにいつも写っている私

もういいやとピリオド打ったはずなのに

スズランの白に騙されそうになる

和歌山市 西 川 千 鶴

大望を抱いて奈落の底に居る

百均で自己満足を買い漁る

手術しよさらりと言って退けた医者

愛猫の深い溜息聞いた朝

物価高物ともしない母の知恵

通夜の席欠伸ひとつを囁み殺す

豊橋市 藤田千休

懺悔録ひとり芝居の幕を開け
禪も付度して通気性

投句終え今日は枕を高くする

エッセーに勝手気儘なベン奔る

端株にも会社支えている誇り

へそくりを引越しさせる危機管理

和歌山市 倉橋悦子

風邪花粉予防に梅雨のカビ予防

広告の裏に記した拾い文字

心地よい疲れを癒す朧月

厨房に春が来ました木の芽和え

春芽時身長がまた縮んでた

桜追い北上したくなる季節

池田市 上山堅坊

あちこちに空き家崩壊する故郷

びゅんびゅんと心に響く津軽三輪

フルスピードで逆走もするトランプ氏

窓を拭く空も緑もリニユール

こだわりを捨てて仲間の大きな輪

薄味を楽しんでいる老いの恋

横浜市 川島良子

震災を忘れぬサクラ咲き誇る

伝統か命か軍配さあどっち

大好きと大嫌いとは紙一重

浄土まだまだまだ遠い今日は雨

桜桜桜わたし元氣になりました

終活の構図大まかなるデッサン

米子市 戸田真理子

食卓に春を告げます木の芽和え

お世辞だと分かっているも心地良い

杉花粉マスクの隙を狙い打ち

大きくなれ野菜にかけるプレッシャー

一線を引いて上手に世を渡る

可燃ゴミに愚痴泣き言も詰めて出す

貝塚市 吉道あかね

検診のポイントほしい歯科の椅子

落ち椿君も宇宙を感じてる

蕾の頃は気品のあったチューリップ

残さない暮しに今は感謝する

いただきますもごちそうさまも言える幸

バチが当たるそんな幸せ続いている

尾道市 日谷寛

寄り添ってあしたへ夢をふくらます

かけがえのない愛だから抱き締める

B面の愛はときどき影絵めく

火と燃える恋へ水さす影法師

わがままな愛をとがめて薔薇の棘

七色の恋をささえる手が温い

千葉県 廣瀬良磨

会議室なにやら隅がきな臭い
転勤だと紙一枚渡される

背後から春が生まれる音がする

今の僕もう原点に戻れない

マイペースゴールは決めぬつもりです

名古屋 富田末男

苦手でも逃げない心持っている

人間は古いが消さぬ好奇心

人の為自分の為に苦心する

良い答出せる力へ汗の量

繰り返し途中で自信が付いてくる

豊橋市 小松くみ子

可愛いとモグモグタイムさえ人気

うす紅の彩り添えて山に春

切り落した蕪に芽が出たいとおしい

形から入るとすぐに飽きる趣味

シグナルはいつばい出てた兎の悲劇

豊橋市 高柳閑雲

スクランブルの渦人々の顔が無い

兄ちゃんの悪さ弟たちもグル

風船がふわりいのちをもらい翔ぶ

幸せを待ちわびている交差点

飲み屋へは地図がなくともすぐ行ける

神戸市 田本古鈴

ゆりかもめ友の愚痴など聞いている

寄り添って春は名のみの寒い夜

もし会えば恋するはずがすれ違う

生きるとはなぞなぞばかり解くことか

樹に年を尋ねてみては失礼か

神戸市 山根弘華

あつさりとご破算にする離婚印

句がぬけて私の心は有頂天

九十を走りつづけてまだ達者

図々しく欲の心は二人前

緩むタガしつかりしめて再稼働

尼崎市 清水久美子

締切に追われても行く甲子園

思い出に躓き処理が滞る

後からじゃてんで読めない走り書き

バイオリズムが狂い出す木の芽時

消しゴムで消える程度の嘘を抱く

尼崎市 近兼敦子

ふるさとの空は今でも変わらない

何回も同じ話を楽しそう

すぐ反論せずに話を聞いてみる

しがらみを置いて自由の旅探す

ふるさとをほめられ少し自慢顔

篠山市 久保木

剛

じゃがいも芽を出し世間動き出す

赤銅色日やけ農夫の誇りです

日々新たなブラマイゼロの暮らしです

断捨離をすると私も消えました

カーテンをピンクにすると寝つけない

春嵐が一夜で桜花^{はな}を持つてゆく

三日に一度免許返却後悔す

趣味多く何からやめるか迷ってる

残りの日知りたくもあり知りたくもなし

わが家だけ時の過ぎるの早いのか

三田市 九村 義徳

園児にも今日は女子会あるらしい

女子会の当ては亭主の扱き下ろし

婆ちゃんは女子会ですと孫が言う

癌保険掛け金元を取りました

保険料高くつきます核の傘

三田市 幸田 厚子

どんどんと短所似る娘がふびんです

急ぐのに妙に気になり引き帰す

アルマーニ着る僕パパは値引き品

埋蔵金探せる犬が先決や

あなたの嘘顔に出てるで図星やろ

三田市 東内 美智子

マチユピチュヘ行つてみたいが竹田城

シミシワが明日にも消えるコマーション

面接テストばあちゃんは押す太鼓判

試験官あんたも同じ道を来た

雪あかり若く見えると世辞も見え

宝塚市 太田 としお

お互いに辛抱したな五十年

正直だ子供は痛いところを突く

驕りだな感謝の二文字を忘れてる

馬鹿になる阿呆になるのも生きる知恵

認知症になるまでにする遺産分け

姫路市 中野 忠

黄水仙乱れ咲きだが匂い立つ

茶柱のご機嫌のよい朝の膳

そこそこに生きて公園ゴミ拾い

正信偈朝の冷氣へよく透り

無口だが喧嘩となれば播州弁

奈良県 中堀 優

母のいう良い医者薬どんとくれ

老いたから染まらぬ黒の服を着る

盾と矛まだ持っているのは貴方

老いたのか痛さがしみるバラの棘

野良猫がノコノコ僕に付いてくる

和歌山県 森 下 よりこ

ときめきが優しくさせる春の宵
雨三日からだ怠けてくる農夫
八十年生きたわたしを褒めてやる
淋しがり分からぬように派手を着る
心配をしてる子がいて呆けられぬ

和歌山市 北 原 昭 枝

沈黙のカーテン空気入れかえる
向き合つて本音言えずにいる心
あの頃を思いうかべる古筆筒
丸くなる背がだんだん母に似る
大皿の今日の主役は萌黄色

和歌山市 定 松 宏 枝

葬儀代残して後は使い切る
卒乳へ母も時には鬼になる
阪神が勝つとおかずも豪華版
ボカボカの陽気に口も軽くなる
散る桜何はともあれ出かけます

大阪府 高 木 道 子

野仏に問答無用の桜降る
ぐらついたハートに愛の半減期
達筆の手紙に臆す糸でんわ
体操もお喋りもして一日濾過
疑問符が残る土俵の羅針盤

大阪府 畑 中 節 子

老いて今遊び心に救われる
我が姿伸ばして歩くくの字腰
ささやかな楽しみ一日詩と遊ぶ
ふきの薹早顔を出し春謳う
朝掘りの筍夕餉の顔となり

大阪市 柴 本 ばつは

ベッドはダブル落ちないように独りでも
へたばつてはならぬならぬと老いが言う
人間は無理のし過ぎだ人間に
毒舌もチラリとくればおいしいね
何よりも正直飾らずに生きる

大阪市 田 中 廣 子

良いことはすべての人に伝えたい
遅れても笑いとばしてすまし顔
一度だけ若げのいたり禁句言う
いいかげんわかつてくれと気がもめる
株で損家が何軒たつのやら

大阪市 長 高 俊 雄

俠気を出して所帯に穴をあけ
断捨離に世は使い捨てまっしぐら
お茶でもがいつしか酒になる嬉し
男でも見た目重視のリクルート
ブランドでコンプレックス繕つて

大阪市 横山 里子

泉大津市 助川 和美

ランドセル未来を入れてカラフルに
花吹雪ひとひらつけて猫帰る

神よりも頼りにできる救急車

さて明日は何ができなくなるだろう

あの無口外でおもしろい人らしい

堺市 羽田野 洋介

目に見えぬ手抜き時々やっておく

不利だとは分かっているがもう一度

もつとやれなんておだてりや有頂天

同じことやっても手足動かない

何でかな昔と違う酒の味

堺市 古川 光雄

予定表空欄ばかりの年になり

認知症逃れる努力の五七五

ほぼ八十路免許返納悩む年

寝ていても川柳寝言言いそうだ

お通じのない日心も閉じて来る

池田市 太田 省三

一徹に生きた親父の旋盤機

京情緒ゲリラ豪雨にかき消され

凝り過ぎた名前一生ルビをふる

食欲の猛者があふれるバイキング

持駒を使いこなせぬへボ将棋

ゴルフしてご馳走食べて改憲だ

晴れ晴れと一年生のアルマーニ

どっこいしょ今日一日も無事でした

スマホ手に空の青さを忘れてる

ラーメンもケーキも寿しも回ってる

門真市 坂本 星雨

整列乗車病院行きのバスが出る

春風にどうぞと席を譲られる

人生の区切りとなった痛告知

屑籠へ昨日の鬱をポイと捨て

葉桜へやつと治まる不整脈

河内長野市 中島 一彌

西行の墓守をする山桜

玄関の靴も賑わい出した春

入院で三日見ぬ間の徒桜

花びらを付けてご帰館靴の底

傾いた姿勢崩さず笑う母

河内長野市 原熊 知津子

筆順を間違え道を踏み外す

四捨五入され善人の仲間入り

歯ごたえのない人という疲労感

乾いた街へ降り立つ人の無表情

待たすのも待つのもイヤなひとりばち

吹田市 岩 口 のぞみ

寝屋川市 岡 本 勲

春霞晴れて今日から社会人
お花見で咲き乱れるは笑顔かな
夢のせた小さな背中ランドセル
新人に席を詰められ窓際へ
クラス替え密かに願う君の横

高槻市 三 谷 白 黒

寝屋川市 川 本 信 子

秋休みあつて欲しいと孫が言う
花散つてお花見してる律義者
猫と孫手足広げて寝ています
うるさいが居ないと寂しい女房です
甘いよね身内の調査形だけ

豊中市 荒 木 郁 子

枚方市 佐 藤 武 紀

生きてきた証のような土踏まず
内科外科更に耳鼻科へ誘う春
ジャカランタ花見気分の一心寺
観劇の女形の所作にうっとり
父と母ボケとつつ込み潤滑油

豊中市 貝 塚 正 子

少しだが我が身の福をお裾分け
今日もまた一緒にしゃべる友がいる
人命の重さはかなさ沁みる日々
亀でいい宛似合わぬ私です
鎮魂曲独り静かに友訃報

八尾市 田 邊 浩 三

我一人起承転結編んで生き
一人居て人間嫌い治療中
放任主義ほめてはくれぬ親でした
枯れた樹に我が身の果てを重ね見る
ランドセル小さな背からはみ出てる

酔ったかな言つて本音をそつと言う
呆けたかな笑つて通すこわい日日
本棚の本の裏からポケットビン
酔ってないいつもそういうおじいちゃん
さまざまな生き方あるさこれでいい

八尾市 前田 紀雄

ゆつくりと歩いて来たがもう八十路

ほんわかとアルツハイマー顔を出す

私のすべては妻の掌に

拘泥を捨てるととてもチャーミング

FA になって派遣の辛さ知る

岡山県 大杉 敏夫

白髪染め買う気にさせる山桜

休田へ今年こそはの水を張る

改心の坊主頭が通じない

喰う時期を逸して育つ露の臺

鞭打って畑へ馴染ます歳となる

瀬戸内市 宮宅 比佐恵

さくら散るあやかりたくて蝶になる

平和だな犬も服着て美容院

新しい年号どんな風になる

曲り角幸せ神に背を押され

子の支えあって今年も花見でき

尾道市 小畑 宣之

古傷の痛み薄らぐ春が来た

校歌にも小節が入る同窓会

リストラの主人をじゃれて癒す犬

人類の滅亡予感核兵器

八十路前時代遅れを勲章に

竹原市 若年 幸子

野も山も陽気に浮かれ花絵巻

のほほんと今が青春花巡り

思い遣り優しく温い彩で咲く

影絵遊び魔法に見えた祖母の指

一円玉軽いドラマを歩かされ

府中市 岸田 武

遠回りに言われ気付かぬ振りでした

鍬の柄に帽子かぶせてひと休み

半分の大きい方を僕が取る

横に振る首を時には見せない

またしてもシオルダーバッグずり落ちる

三原市 笹重 耕三

最高です母ちゃんの塩むすび

雑踏の中で消されている自分

大胆になる4Bの広い海

悲しい嘘もうれしい嘘もすぐばれる

八分咲き頃が飲みごろ歌いごろ

山口市 中前 幸子

海の蒼さへことさら白しゆりかもめ

屋根瓦一枚ずれてから闇に

いのちの瞬き蜉蝣輝けり

無防備にこころを許す白い画布

主語の無い街で鼻緒の切れた下駄

鳥取県 門 村 幸 子

倉吉市 宮 田 風 露

せつないね友のあれこれ聞くランチ
心の襷に遠いあなたを住まわせる
肩の力抜いて病を遠ざける
料理本つくりもせずに飽きず見る
帰り道の景色違ってまた迷う

鳥取県 橋 本 整

見ぬふりと知らぬ顔する思いやり
娘と孫と曾孫をむすぶスマートホン
六〇年オイで返事をくれた妻
幸せであつただろうか逝つた妻
貧しくも慰めあつた若い日々

倉吉市 岡 崎 美知江

言い切つた男の眉は本物だ
口実を言うたび言葉浮いてくる
錆ついた言葉ひたすら掘り起こす
揺れているハート貴方にとどかない
酔いざめの水がうまいと誘う風

倉吉市 堀 かずこ

陽ざしあび春の息吹が横切つた
やさしさにふれて涙のひとしずく
真実を隠す心が痛みます
悲しみを笑顔で隠し耐えています
言い訳をぐつとこらえてひと呼吸

春先の目鼻むずむず花粉症
雑草の背伸びに追われへとへとだ
葉桜になって元気な蟻の列
春ですね臉がとろりドッキング
腹八分守り切れずにメタボです

倉吉市 若 松 由紀子

トップにはなれぬ性格大雑把
頑張つた敗者は何も語らない
エプロンを外すとふわふ蝶になる
家族から忘れられてる誕生日
記憶にない人も集まるクラス会

米子市 池 田 美 穂

たくさん黄砂の御礼どうしよう
筍も少子化なのね生えて来ぬ
マスクでも私の女上がらない
目配りの仕方は猫に教わつた
桜とのデート春雨にじまされる

米子市 伊 塚 美枝子

雨風に負けぬと散らぬ花もある
友誘い今日は花見と言つて飲む
危険です食べ物すべて旨過ぎる
回らない寿司を食べます誕生日
古稀まぢか私の取り柄元気だけ

米子市 川 本 美津子

ボケ防止神から貰う孫のもり
後期高齢私にも来た赤札が
手の平に載せた小銭で決める飯
なんか変うるさい夫が大人しい
ひっそりと住んでる所死角です

松江市 山 根 邦 代

春野菜友の笑顔と共に来る
友のグチ聞く耳もまだ達者です
年波か花冷えですかこの寒さ
仕舞忘れひよんな所から現われる
晴天の明日を信じて今日を終え

雲南市 永 見 安 子

無理するな自分に言って畑仕事
地球儀を置いて五輪のテレビ見る
忘れもの行ったり来たりで今日も暮れ
スキップをしたくなるよな青い空
幸せを感じて一人よもぎ摘む

大洲市 花 岡 順 子

立ち話主婦には主婦の潤滑油
注油したはずの頭が働かぬ
伸びる芽の早さ卒業式が来る
人生の余白に書いた五七五
おふくろの味を忘れぬ総菜屋

西予市 井 関 はるえ

生き方が下手だな回り道ばかり
いい目覚めこうもおいしいお味噌汁
骨埋める覚悟もできたUターン
死線からきびす返してきた奇跡
子が巣立ち母退屈な台所

沖縄県 宮 すみれ

西日差す日よけカーテン三重に
電話口早口しゃべりおいつけず
春眠にさあさあおきて朝ですよ
御礼にと琉球グラス夏の音
隣り客貧乏揺すり気がめいる

那覇市 前 川 真

素うどんなに静かな幸の色を見る
書き慣れて無職の文字に味が出る
別件で誘い出されて荷を担ぐ
句読点打って坂道八合目
行き先をスクランブルで見失う

山鹿市 前 田 幸 子

忘れもの度重なるも認められ
肩の荷を降ろした今は腰重く
毒舌も子なればこそと頂こう
あーつらい延命治療望まない
花ふぶきコップに一ひら今日の幸

東京都 高岡弥生

豊橋市 西郷紀美代

誕生日祝って終わる一年間
新学期肌ブルブルの子が入園
ゼロ歳児最初覚える半分こ
いつまでもチャレンジャーでい続ける

横浜市 長島亜希子

探した時なかった物が湧いて出る
夫婦の会話増やしてくれるカケとモリ
国民をバカにするなどテレビ前
あの人も使えるスマホ使えそう

静岡市 渡辺芳子

風邪気味がちつとも抜けぬこれが古い
親友がホームに入るむなし春
花吹雪これが最後と知らないで（桜伐採）
さし木してどこかでさくら生さてくれ

名古屋市 山本三樹夫

願掛けた氏神様に酒の礼
退屈の虫を押えに競馬場
教育に礼儀作法が抜けている
行政の文書管理に底が抜け

江南市 脇田雅美

連絡ない知らないうちに家族葬
落葉樹春を夢見て立っている
紫外線除ける日傘が回りだす
カラカラとペットボトルに不眠症

正夢を恐れて止めるバスタアー
痛よりも認知保険を勧められ
元職が垣間見られる趣味の会
大人には早くならない頃を悔い

神戸市 奥水弘

さび抜きの小言が効いた亡母まねる
また小言ウィットあるから救われる
不安ですトランプ嵐吹き荒れる
いい人で通して傘寿疲れ果て

神戸市 近藤勝正

人生の花は今です喜寿の春
西の端に沈む夕日に今日を問う
我が心読んでくれたか臘月
昨日は祝日だったと後で知る

神戸市 敏森廣光

ネクタイの結び目まがる入社式
何よりも身を守ってる二枚舌
桜餅亡母の笑顔を連れてくる
桜なき桜祭りで一句詠む

伊丹市 平井富夫

口寂し線は細いがメタボ腹
ダイエット水だけ飲むも肥満体
昼休みスマホピコピコ社員皆
筆筒奥聖徳太子久しぶり

篠山市 岩 下 さゆ子

愛してゐるまだ一回も言われない
好きだったあの日の夢は今どこだ

私ネコあなた愛してつめたてる
不愉快は生きるスパイス今ベスト

篠山市 永 井 かほる

表彰台親子の涙見て涙

叱る事なくなつて老いを知る

満開の梅林テレビで満喫し

三世代暮した家族今は夢

篠山市 藤 井 美智子

夢いっぱいセーラー服に花吹雪

入学の孫へばあばのお祝い句

人生もあと少しとは言わせない

老い歩む残りの人生いい色に

三田市 辻 開 子

日日老いる今日一日を元気でと

されるのもするのもなくて老い生きて

終活だ母の年齢越えたから

寒の雨老いの体を縮ませる

三田市 馬 場 貴美江

昼下り舟をこぎ出す講演会

寝つかれず羊の数をかぞえてる

花の下宴もおす平和かな

老い一人魔法の箒風にのる

三田市 松 本 ゆかり

白っぽく桜満開友が逝く

肩抱いて泣く刻もなく友送る

独居でも食費こんなにまあいいか

待つという情緒の消えたコンコース

宝塚市 岸 田 万 彩

妻の前重宝してる遠い耳

五体みな小さな老化積み重ね

金借りる話スマホをいじりつつ

気の抜けた七味山ほど振りかける

西宮市 福 田 正 彦

野に山に発電パネルが照り返す

侘び住いスマホ来たりて日多忙

笑い足り平和に過ごす日日を行く

隣国の平和の兆し実り乞う

奈良市 尾 畑 なを江

老眼鏡わずらわしいが仕方ない

頼んだらするが気きかすことはせぬ

晩酌の隣で梅酒舌鼓

食器棚使う器も決まつてる

和歌山市 佐 藤 ま き

春の恵み蕨竹の子賞味する

隠り世に繋げてみたい糸電話

懐かしい映画スターのカリカチュア

御点前の幼稚園児の神妙に

和歌山市 鍋嶋 澄子

寝そべると桜と空が手をつなく
たんぼぼがどうにかなると陽にむかい
おにぎりに花弁うけてかぶりつく
咲き競うさくらたんぼぼ青い空

和歌山市 福島 一雄

散り際を知らぬ造花と議員さん
冷汗を流し続ける相撲界
おいしそうお米の名前多種多様
頭撫で餌やるだけの愛猫家

岩出市 村中 悦男

つまずいた足に責任おわせてる
つばき一輪そうじを終えた床に活け
追伸は本文よりも先に読む
調味料ひとつに和して味自慢

京都市 櫻崎 篤子

包帯の下から痛い声とどく
わかつてる様な顔して囲碁を見る
咲いた咲いたと喜ぶ内に散っていた
学歴の欄は抜かして書くことに

大阪府 小栢 こずえ

逝くまでは夢は大きく持つて生き
限りある命大事に使い切る
一歩進み二歩後退に慣れてくる
朝が好き今日の元気が湧いて来る

大阪府 神野 千恵子

浮いているような気がする今日の脳
何かいいニュースないかとテレビ消し
ちぐはぐな話でなぜか盛り上がる
季が迷い日替りでする衣替え

大阪市 磯島 福貴子

海越えて益益冴える二刀流
ビギナーズラックにつられズルズルと
表札を掲げぬ家が何故か増え
血圧を計り始動の古い二人

大阪市 小野 雅美

許そうか赤い涙が涸れたなら
透明な鎖繋いでいる明日
手のひらで起きた程度のかすり傷
殻ひとつ破れぬままに朽ちてゆく

大阪市 中島 栄子

リハビリに行ける間はまだ元気
老い同士昔話の繰り返し
足や腰日替わり痛み攻め寄せる
なばなの里あの世に来たか美しさ

大阪府 樋口 眞

痛いけど気張れと別の僕が言う
通院が暮らしのリズム狂わせる
行けぬうち惜しくも終る美術展
相応に多少の憂いある余生

大阪市 前川 善之

豊中市 源田 啓生

子の誕生家庭の中心子に変わる
日本外交腹を開けての話し合い
おおきにと言わして見せるボランティア
春なのに熱中症に気を付ける

大阪市 松田 聰

豊中市 木藤 こみつ

あと二年五輪に北が来るのかな
首によいスマホの見方教えられ
パスワード数が多くて出てこない
面白い噂勝手に歩いてく

堺市 大和 峯二

羽曳野市 磯本 洋一

付度の政治のもとで民は泣く
改革の仮面をかぶり改憲へ
九条に守られ生きて古希の坂
フクシマを福島にする政治こそ

泉大津市 磯野 不二夫

枚方市 坂本 ミヨノ

母さんの気づかいそれが辛いんだ
気がつけば何も言えない国になり
そういえば言わなくなったセルロイド
戦争とよばない戦おこりそう

河内長野市 渡邊 修

枚方市 谷 英也

持たないと言ったスマホを抱いて寝る
西郷のゆかりの旅は高くつく
老人会ふるえる指でスマートホン
ばあちゃんが帰ると分かるサロンパス

証言の真偽を問うか散る桜
隠蔽の歴史があつた大本営
握り締めやがて無になる身も財も
私にもあつた桜の一年生
使いこんだ消しゴム丸く手になじむ
丸いお腹がしあわせそうな妊婦さん
古い手帳にその時々々の男の名
何事も文句は言えぬ安い宿
実を結ぶ風にまかせて春のぞく
永田町国民忘れ税を食う
水ぬるむ喜寿を迎えて角も取れ
六甲山春一番が走り抜け
草花が元気に咲いて楽しみで
温泉街浴衣の波にゆられてる
夕日しずか山の谷間に燃え落ちる
健康で日々楽しくて九十四
喜寿すぎてこの時時がいとおしい
恋愛も卒業したと負けおしみ
効率化終活式も家族葬
時の声うかつに乗って馬鹿をみた

箕面市 寺井柳童

咲く桜散る桜にも花の宴
水温む川面に遊ぶ鴨のペア
通り過ぎ後から知った土砂崩れ
豪雪を知らせる予報無事祈る

岡山市 大石洋子

桜咲く仕切り直しの深呼吸
宴会の目付となつて烏くる
窮屈な世の息抜きの花吹雪
思い出に押しつぶされる終活期

玉野市 片岡富子

同級生刺激もらつて春を行く
旬の物食べられるだけ幸なこと
爪もみで健康療法一つ増え
片付けた分だけゴミの山となる

広島県 田桑恵子

雑草も力をためて春を待つ
また事件ネタに困らぬワイドショー
コメンテーター見飽きた顔にテレビ消す
ウインドウ背中丸いと叱つてる

広島市 松尾信彦

皆がみな地蔵の顔で日向ぼこ
コタツから無精引き出す黒電話
産声を村で育てた良き昭和
闇鍋を知つてる父の腕まくり

竹原市 土井輝恵

健康寿命枠の中には嵌まつてる
お隣と我が家を繋ぐワンが居る
孫の婿なんとはなしに爺ちゃん似
町内会男の枠に入れられる

三次市 伊藤寿子

過ぎし日へ酔つてみる夜のひとり酒
一年を過ぎても亡姉の事ばかり
客の笑みドリンクよりも出る力
まだまだと奮い立たせるひとり言

山口市 青木隆子

大笑いユリに負けないチューリップ
得るものは一人旅より二人旅
古希近く病名だけは五十肩
挫けるな雑草にまた励まされ

宇部市 高山清子

新党の花の命が短すぎ
卒寿すぎ百歳目ざすがままならぬ
歩行器を押して老軀も花の道
ありすぎても無くても困る雨と金

鳥取県 飯野菖子

ベンを取れ指が私に指図する
来年も吹く風に乗り生きていく
生きている母に習ったことだけは
春の陽が歩け歩けと肩叩く

鳥取県 下田 茂登子

立話出来る老人村に居ぬ
一人者救急呼んで疑われ
一人寝に馴れた途端にまた病氣
八十路越えまだ幸せが見えて来ぬ

鳥取市 上山 一平

春爛漫走つて見たいいい気分
どじよう住む過疎に時めくコウノトリ
古時計たまには酒を注いでやる
出る愚痴も臨時ニュースが蓋をする

鳥取市 大前 安子

許すこと覚えた正座どつしりと
ひと呼吸春の風吸い案が浮く
妥協するそれはいいねと春の風
春の風老いるじゃないと誘い来る

鳥取市 副井 裕

頂上へ過去のしがらみ置いて来る
弱点を不意に突かれてうろたえる
我が苦屋建て替えるか宝くじ
ザル法も抵触すれば塀の中

倉吉市 大羽 雄大

一日に一句目指して日が落ちる
人込みの同じ世代に目が向かう
終活に力入らぬ八十路前
ショーウィンドウに見る丸まった背

倉吉市 田中 けいこ

礼儀知れ嘘をついてはなりません
友見舞う早く逝きたいと泣かれる
ゆうゆうたる天地だけれど温暖化
環境汚染石器時代に戻らねば

米子市 生田 和之

自慢には聞こえぬように言うはやき
自画像の斜め後ろにいるわたし
大リーグ帰りが並ぶ春の陣
昭和まで美人だったとおばあさん

米子市 黒田 紀美江

体重がね医者の一言良く効くね
ジェット音見上げた空に夢託す
あと五分下の句やつとひねり出す
衛星に全部写されどうしよう

米子市 野川 宣子

なるほどな鍛えた足は蹟かぬ
口も手も出さぬと決めた嫁の乱
男にもお産の苦勞半分こ
産めよ増やせよ国が沈没してしまふ

米子市 見山 温子

ほかほかと心浮きだつ花便り
老夫婦孫に観察されている
今日は元氣将棋の音がよくひびく
有りあわせの食事に口を閉ざす夫

島根県 原 徳 利

剪定をされた庭木が色気づく
嫌なことすぐに忘れるよい頭
戸車にたまに油を差してやる
長靴を買おうか地球おかしいぞ

松江市 相 見 柳 歩

平凡な比較は個性つぶすだけ
軽石にしつかり重い役目あり
なつかしい顔が待ってる橋向こう
独り者指をくわえて堪えている

松江市 中 筋 弘 充

読経終えやたらに酒を飲む法事
忘れ物に気づくまだまだ大丈夫
混浴ですとあまり宣伝せぬ足湯
鬼ごっこ優しい鬼が終らせぬ

出雲市 黒 目 ひでお

世直しに一生かけて実らせる
刑事訴追決まり文句で逃げおおせ
ストレッチ老いた体に合っている
思い出に浸りこの先思案する

高知市 三 谷 松太郎

保険料おまけ付かぬか高齢者
赤シャツが僕の男気揺さぶった
暮れ方のさくらとろりと純米酒
もう一度あの日の魔法かけてみて

今治市 渡 邊 伊津志

正直に自分を晒す鏡拭く
土壇場で決意を変えた日の誤算
組板のリズムが愛の朝の音
人情に触れて故郷の風になる

沖縄県 島 村 つばき

思い出よまとわりつくな断捨離に
一眠りした後冴える初老の句
セミナーの成果浸み入る背と脳
黙々と薬分けする卒寿の手

沖縄県 禰 モモト

どら声の風邪がはなさぬ春ごたつ
入学の孫祝つてる桜花
母留守で値引き五品のバイキング
孫の夢卒園式で祖母は聞く

福岡県 本 田 さくら

朝起きる新聞またも寒い記事
青い空花屋で春を買ってくる
桜さくらどこもかしこも花に酔う
入学式親の着物が鮮やかだ

唐津市 岩 崎 實

生きてるよ趣向をこらす案山子村
休み方働き方のありようで
しみじみと土に帰ると古人言う
流転する一日の速さつばめ来る

(斉藤宏子さん、鈴木たけしさんは43頁にあります)

英語 de Senryu ⑦⑧

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

書置きもなく 料理人河豚で死に

with no letter left behind

a cook dies from

the poison of a blowfish

兄らしいところは 年回知らして来

just like my elder brother

to inform me only of

our parents' religious event

letter left behind 書置き *cook* 料理人 *die from* ~で死ぬ *poison* 毒
blowfish 河豚 *like* ~のような *elder brother* 兄 *inform* 知らず *only* だけ
parents 両親 *religious* 宗教の *event* 行事

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑩ ガーナの俳人、再び登場

アジェイ・アギーバー (Adjei Agyei-Baah, Ghana)

アフリカハイクネットワークの創設者の一人であり、ガーナのハイク運動の第一人者であるアジェイ・アギーバーは、2015年にナイジェリアの詩人と二人で、アフリカ最初の国際ハイクウェブジャーナル誌 *Mamba* を立ち上げました。日本にいなからインターネットを通してアフリカのハイクに親しめることは、この時代の恩恵であり、刺激的なことです。彼の活動はすでに『川柳塔』3月号(2017)で紹介しています。アマゾンで購入できる最新句集 *Ghana 21 Haiku* (Afriku Press House 2017) では、時にはやり場のない悲しみがあふれるガーナの日常を鮮やかにそしてユーモラスに描写しています。アフリカ生まれのハイク的な新しい詩の形式は魅力のある短詩の世界です。

cocoa beverage—/ the farmer only smells the aroma/ in Ghana

ココア飲料 農夫は匂いかぐだけ ガーナでは

only soccer/ keeps a nation under one banner/ in Ghana

一つの旗の下 国をまとめるのはサッカーのみ ガーナでは

**harmattan/ bares trees to their bosom/ in Ghana*

ハーマタン風 木々の芯まで露にする ガーナでは *アフリカ西海岸の砂混りの熱風

誹風柳多留一二二篇研究 60

山田昭夫・石川道子
小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男

清 博 美

506 杉部やにかくれると手におへぬ也

山田 吉良上野介は本所松阪の屋敷の炭小屋で、赤穂義士によって捕らえられるが、これもし、炭小屋ならぬ「杉部屋に隠れる」というのだ。上野介の長男は出羽米沢十五万石の上杉家の養子の藩主上杉綱憲。

お身の上杉た処へ息子やり 九五13
そこに隠れたら、万事休すだつたろう。

上杉家だから「杉部屋」と洒落た。
杉垣へ隠れるとモウ知れぬ所コ
清 賛。 九五21

507 御したくハよしかとどらの師匠来る

山田 「出かける用意は出来たか」と、ワル遊びの「どらの師匠来る」。だが場面がはっきりしない。まさか家まで来て「御支度は良しか」などと堂々と誘いには来ないだろうから、ワル連中の溜まり場だった髪結床あたりであろう。

まだかみが多イとどらの師匠いひ 一六30
小栗 賛。ではあるが、「御支度は良しか」といふ言ひ方が気になる。謡講行でもかこつて堂々と誘いに来ているのではないか。
清 同右。

508 生酔を家内中出て落手する

山田 酔いづぶれて動けない家人を「家内中出て落手する」。酔いづぶれて動けないよう

では人並みには扱えない。だから品物並に「落手」されたのだ。

生酔をやれくくくと落ク手する 一三25
清 賛。ぐにやぐにやで骨がないような状態である。

509 二十けん一トたびゑめば百とれる

山田 浅草寺境内の二十軒茶屋。美形の看板娘が相手をしたから、それを目当てに日参する者も多かった。

いさ、かもほれず茶代を五文置キ

安八礼3
という句のように、娘たちに「些かも惚れ」たりしなければ、茶代は五文ほどで済んだ。ところが彼女たちが「一度び笑めば」、鼻の下を長くした客人から、何と二十倍の「百取れる」というのだ。「二度び笑めば」は、玄宗皇帝と楊貴妃の愛欲詩「長恨歌」の「回眸一笑百媚生。六宮粉黛無二顔色」からの文句取だが、

さわらハおちん風情にて茶やはやり

茶をきつし尻をつねる代百銅 七六13
二五10

というのだから、百文でも安いのかも知れない。

清 賛。

510 なにばかだとれとつさまはだをぬぎ

山田 「何馬鹿だ、どれ」と、言つてとつ様が諸肌を脱いだというのだから、状況がいま一つはつきりしない。「川柳風俗志」では子供の項にあるから、それに従うと、子供がむずがって父親に「馬鹿」と言ったので、「何馬鹿だ、どれ」と父親が諸肌を脱いで威かしている景となろうか。

とつさんのなまゐいやいと母へにげ

一二四

小栗 わからず。子供の喧嘩に親が出る光景か。

清 よく分からぬが、礎稿のようなことか。

511 ごふく店なでに成ルほどとこほり

山田 なのは「(なんで)」の変化した語「御用はなんでございますか」の意で、主として商人が用いる「語(日国)」。越後屋のような大店では、お客が大勢で、「御用はなんでございますか」などと応対しては捌けず、「なで」とつづめて言わないと間に合わない程に顧客が渋滞しているというのだろう。商

売繁昌で店内の混雑ぶりを、「なで」という語で表現したところが手柄の句。

するが丁寧にきまぬなんでこんす也 一九二七

清 賛。

512 いそかしい中で薄田どらをうち

山田 薄田隼人は「剣客岩見重太郎といわれた、豊臣方の将薄田隼人正兼相のこと。秀吉に仕えて五千石を領した。慶長十九年の大坂「冬の陣」に織多崎の守備についていたが、陣外に出て娼家にいたため、徳川方に敗れたという逸話の持ち主である」(『新編川柳大辞典』)。大坂冬の陣で「忙しい中で」薄田は、事もあらうに、遊女と遊んでいて敗れるという大変な「どらを打ち」。

居つ、けさといふ内ゑたがさき落

天二礼二

遊軍といふハ薄田隼人也

一八四二

清 賛。

513 ばあさまのやうに山ぶし年がより

山田 山伏ハくわゐのやうに髪をゆひ

明元宮三

という句もあるように、山伏は慈姑頭に髪を

結った。慈姑頭は「総髪をすべて後頭部に束ねて、末を垂らしたものの。江戸時代、医者などに多く見られ、その姿が、クワイの芽の出たのに似たところからいう」(『日国』)。山伏の髪は、一般に老婆が結う髪形と同じだといふのであろう。

姑婆々たんこぶほどな髪をゆひ

紅晶一七

清 賛。

514 ひやめしの方からしなの片つける

石川 冬季江戸に出稼ぎにくる信濃者といえは大飯食らい。まず冷飯から片付けて、それから暖かいご飯を食べようというのである。

わづらつて人なみにくふ信濃もの

宝三礼四

こついにむまそうに喰しなのもの

明六宮二

伊吹 賛。普通はどちらか片方。

山田 賛。江戸では朝に飯を炊き、昼や夜は冷飯を喰うのが一般的でしたから、本句の場合、朝食で先ず昨夜の残りの冷飯を食べ、それから炊きたての御飯を食べたというのでしよう。残り物だから遠慮がいらぬ。

清 賛。当時の生活習慣。

愛染帖

新家 完司 選

(投句273名)

春雷が虫けらどもに喝入れる

河内長野市 中島 一彌

(評)「いつまで寝ておるのだ、この怠けものどもが」と、大地を揺るがす雷鳴。怒鳴られている虫けらの一匹は、間違いなく私。

おばちゃんは何でも少し盛って言う

奈良市 阿部 紀子

(評)おばちゃんは何でも大袈裟に言うのは「話を面白くしたい」というサービスピース精神の表れ。鮎ちゃんを配るのと同じだろう。

起きてから寝るまで続くひとり言

岡山県 紫 しめの

(評)「そんなヤツ、おらんやろ」と突っ込みを入れたくなる「盛り過ぎ」の面白さ。独り言も自覚をしている間は大丈夫なのだが……

グルコサミン飲めば金毘羅行けますか

三田市 村田 博

(評)石段はっかりのコンピラさん。その数なんと、千三百六十八段！ 胡散臭いサブリメントなどより冷えた缶ビールだ！

大阪市 平賀 国和
熟年にも元気をくれる鯉のぼり

(評)子供たちだけではなく熟年だけでもなく、老年までも元気づけてくれる鯉のぼり。廃れて欲しくない美しい日本の風景の一つ。

珍しく真ん中にある今日のヘン

八王子市 川名 洋子

(評)いつもは曲がってそっぽを向いている臍。今日は珍しく素直に収まっている。何か良いことがあったのか、これからあるのか。

全没の予防接種を打って行く

神戸市 上田 和宏

(評)「この程度でいいか」と油断したときに喰らう全没という拳骨。そのショックを和らげる予防注射とは？是非お教え願いたい。

何やかや言うても春はやって来た

三田市 上田ひとみ

(評)厳しい寒さは体を縮ませ考え方まで後ろ向きにしてしまう。だが、すべてを解決してくれる大らかな春がまたやって来た。

静かなあ桜が散って人死んで

岡山市 丹下 凱夫

(評)花の宴も人のいのちも、いつかは失せるときがくる。消えたものが残した静寂に身を置き、来し方行く末をぼんやりと……

生命線を手首下まで長く足す

鳥取市 奥田 由美

(評)百歳以上の長寿者に共通するのは、何事にも前向きでポジティブであるとのこと。生命線を書き足すなどピットリではないか。わたくしを取り囲んでる無言たち

三原市 笹重 耕三

気がつけば石に頭を下げていた

紀の川市 宇野 幹子

錆止めの絵具たつぷり絞り出す

那覇市 前川 真

立ちしよんが街の死角を濡らしてる

和歌山市 古久保和子

イベントで出会ったボン菓子屋のボン

大阪市 高杉 力

開けるにはちよつとコツ要る実家の戸

鳥取市 倉益 一瑤

酸欠のわたしにハートメール来る

青森県 松山 芳生

誤差なんか気にも留めない鍵の穴

大阪市 樋口 眞

パソコンも老いてゆつくり立ち上がる

奈良市 大久保眞澄

あがいても年寄りほぼ粗大ゴミ

大阪市 大治 重信

朝めしを食べたら晩を考える

大阪市 柴本ばつは

大阪市 江島谷勝弘
旨いのだコーチン比内土佐ジロー

札幌市 三浦 強一
ストレスが溜まると寅さんの映画

豊橋市 小松くみ子
映画観てヒマつぶしとはバチ当たる

佐賀県 真島久美子
文句ではないですこれは意見です

門真市 坂本 星雨
古書店へ琥珀の中の虫になる

鳥取市 福西 茶子
氷河期が来たらみんなで死にましよう

堺市 奥 時雄
教訓になる訳がない赤っ恥
託児所もいずれば余るようになる

大阪市 古今堂蕉子
つまめぬほどけぬめくれぬしびれた手

松江市 石橋 芳山
ケセラセラと思えばトゲは刺さってる

アバウトなわたしときどき空を飛ぶ
昨日より上等な嘘ついている

尼崎市 清水久美子
Tシャツに婚活中と書いておく

府中市 岸田 武
めんどりが鳴いたら文春が動く

名刺には頭を下げる癖がある
バチンコのチラシの裏は真っ白だ

長岡京市 山田 葉子

丸テーブル向き合わなくていいんだよ
懐メロの好きな男に気を許す

桜井市 安土 理恵
上澄みの下のどろどろ性に合う

奈良県 長谷川崇明
来年は元号二つ揃い踏み

寝屋川市 籠島 恵子
断捨離と言っているのに増やす鉢

三田市 堀 正和
年金を雑所得とは失敬な

岡山市 永見 心咲
二つ手前 歩数稼ぎでバス降りる

海南市 小谷 小雪
古時計一応ネジは巻いておく

高槻市 片山かずお
隅の席ひと言文句言い易い

堺市 矢倉 五月
愚痴っても仕方ないけど利子の文字

弘前市 高瀬 霜石
帰宅してパンフで名所再確認

八尾市 宮崎シマ子
酔っぱらいが嫌いなばくも酔っぱらい

お日様も西のお家に妻がいる
ブスなりに苦労重ねてできた顔

山口市 青木 隆子
自信作ボツの途端に色褪せる

みな熟れて甘い味するクラス会

大阪市 榎本 舞夢
一気に春お墓参りと花めぐり

鳥取県 門村 幸子
散歩コース変えて満開花の中

池田市 上山 堅坊
一年の元氣貰いに行く花見

富田林市 中井 アキ
お疲れのマドンナもいる花見会

瀬戸内市 宮宅比佐恵
平和だねワンちゃん抱いて花見する

鳥取市 上山 一平
桜花ふわり吸い付くランドセル

寝屋川市 森 茜
降りそうで降りそうもなく花の駅

八尾市 山根 妙子
一年を十日で咲いて人酔わせ

香芝市 大内 朝子
待ち侘びて咲いた桜が散り急ぐ

東大阪市 佐々木満作
散り際もサクラは品位失わず

京都市 櫻崎 篤子
もう花が散ります安倍総理も散るか

三田市 北野 哲男
首の無い羅漢さんにも花吹雪

鳥取市 吉田 弘子
過疎もいい春は苦味の匂を食う

倉吉市 大羽 雄大
花終り浮いた気持ちにリード巻く

寝屋川市 平松かすみ

乗り継いで行けるパワーを句会から

枚方市 谷 英也

川柳回路うまく回れよ澱みなく

吹田市 木下 敏子

思い切り心ぶつける五七五

大阪市 藤原千恵子

私の句生きた私のストーリー

堺市 大和 峯二

川柳に五分の魂入れておく

富田林市 片岡智恵子

てにをはが生きるも死ぬも十七字

塩竈市 木田比呂朗

題「重い」手軽に詠んで没だった

箕面市 中山 春代

冷汗は投句の後で気付く誤字

加西市 金川 宣子

うっかりと過ぎてしまった投稿日

西脇市 七反田順子

全没で磯巾着になりました

岡山市 藤成 操江

吊革の下に並んでいるスマホ

島根県 原 徳利

誰も遊んでくれぬからスマホする

東大阪市 北村 賢子

赤子抱き心はそぞろスマホ族

尼崎市 市坪 武臣

スマホ所持僕の頭は活性化

高槻市 初代 正彦

葉桜の次は私と花みずき

奈良県 中原比呂志

春陽気大仏さんの目は細し

宝塚市 岸田 万彩

なすびを思い付かない臘月

鳥取県 石谷美恵子

桜ボケしたのか未だシャンとせぬ

枚方市 海老池 洋

耐用年数とつくに過ぎている老駝

豊中市 松尾美智代

熱と痛み取れてから行くお医者さん

八幡市 今井万紗子

多過ぎて薬の管理手間かかる

西宮市 緒方美津子

いろいろあるありがたいジェネリック

神戸市 細川 花門

足腰の老化の防止ケンケンバ

岡山市 大石 洋子

散る散る真っただ中の団塊世代

枚方市 寺川 弘一

人生がわかる頃には天国に

鳥取県 斉尾くにこ

突然死秘部もおバカもあからさま

川西市 大坪 一徳

お骨揚げ人間一人消えました

大阪市 谷口 義

人見知りだったし家族葬がええ

豊中市 木藤こみつ

離婚したからまた振袖は着てもいい

豊中市 水野 黒兎

もう少しもう少し後歯の治療

大阪市 大川 桃花

負け方に疑問符がつくタイガース

堺市 羽田野洋介

同じこと続くと飽きる昨日今日

河内長野市 山岡富美子

響き合う友との贅沢な時間

米子市 竹村紀の治

探しもの見つけてガッツポーズする

藤井寺市 太田扶美代

良心を捨てるチャンスを待っている

高槻市 富田 美義

人情の入る余地なしレジ捌き

大阪市 笠嶋 恵美

生き方は金遣いにもあらわれて

土佐清水市 辻内 次根

もう一度免許更新する

鳥取県 山下 節子

おろろの夫に何とかなると妻

岩出市 村中 悦男

あどけなさ豊かな老いにある気品

弘前市 稲見 則彦

七回忌ちちのことだま蘇る

倉吉市 岡崎美知江

裏打ちをしてある孤独八十年

大阪市 若本 安代
飲みましょうガーデンングは花盛り

三田市 谷口 修平
花見酒月もこっそり仲間入り

広島市 岸本 清
花冷えにちよつと濃い目の芋に酔う

大阪市 平井美智子
「好きです」と酒から受けるプロポーズ

大阪市 藤田 武人
俺達の絆は猪口の回し飲み

羽曳野市 徳山みつこ
鼻濁音に触ったらダメ酒の席

鳥取市 夏目 一粋
気の弱さ隠すためには酒がいる

大阪市 小野 雅美
水割りの水嚙んでも出ぬ答え

河内長野市 村上 直樹
つまみには春夏秋冬冷やっこ

大阪市 岩崎 玲子
食前酒あまりに少な誘い酒

松江市 梅瀬みちを
酒飲むためにつらい胃カメラ飲んでおく

藤井寺市 鈴木いさお
アルコール消毒をしてきれいな胃

米子市 生田 和之
休肝日そんなヤワではありません

羽曳野市 吉村久仁雄
ひと月の断酒人間試される

橿原市 居谷真理子
最後にはやはり焼かれる佃鮎

大阪市 坂 裕之
カードより現金がいい昭和の子

大阪市 栃尾 奏子
半音を上げて女の自己主張

横濱市 川島 良子
泣き処心得悪女演じきる

三原市 鴨田 昭紀
届かない距離から吠える正義感

芦屋市 黒田 能子
やれやれと思つた途端風邪を引く

広島市 松尾 信彦
念のため頓服のんで卵酒

京都市 榎本 宏子
楽しみは日本一周地図の上

河内長野市 辻村 ヒロ
恋の唄探す路線に乗りかえる

熊本県 岩切 康子
名物のうなぎ目指してホテル出る

香南市 桑名 孝雄
平和日本どのチャンネルもああのどか

鳥取市 岸本 宏章
退屈なときには見ますワイドショー

河内長野市 原熊知津子
時代追うことに疲れた裏通り

岡山県 山縣のぶ子
友達が帰ると急に冷えてくる

大阪市 奥村 五月
もつれても切つてはならぬ赤い糸

高槻市 富田 保子
許されて一つの屋根に五十年

田辺市 岡本 昇
腰痛に負けてたまるか万歩計

鳥取市 岸本 孝子
食べる量もつと減らせと膝がいう

玉野市 片岡 富子
ワイン飲み痩せる気配の無い夫婦

篠山市 長谷川善輔
あれとこればくも夢みた二刀流

日高市 根岸 方子
娯楽費は残業代に左右され

堺市 遠山 唯教
破産しても踊りつづける阿波踊り

鳥取市 前田 楓花
三日目のサイダー甘さだけ残る

岩国市 上村 夢香
百二十機肩にずっしり基地の町

枚方市 山口弘委智
故里の木洩れ日浴びて五感研ぐ

大洲市 花岡 順子
独り住む母へ苦手な文を書く

橋本市 石田 隆彦
当り前だった和式トイレが使えない

大阪市 榎本日の出
堂々と年齢言つて心地よい

共選欄

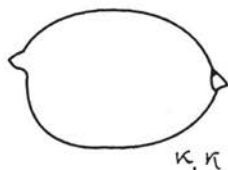
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 359名)



「退屈」山口久選

退屈のあくびに消えた思考力	南あわじ市	萩原 狸月
ひらがなが退屈してるなにぬねの	和歌山市	坂部紀久子
退屈か赤ちゃんのする大あくび	三田市	堀 正和
聴衆が半分寝てる講演会	堺市	村上 玄也
退屈な日々にスパイスふりかける	笠岡市	藤井 智史
しつぽ下げ気だるくだらり鯉のぼり	札幌市	齊藤 宏子
持て余すしゃべる相手のない時間	鳥取市	前田 楓花
向い風うけて退屈せずに済み	高槻市	富田 保子
窓際で人間観察しています	横浜市	川島 良子
校長の訓辞はいつも眠くなる	藤井寺市	鈴木いさお
退屈は敵だビールの缶増える	岡山県	紫 しめの
暇潰し環状線をひと廻り	三田市	足立つな子
退屈の相手に財布危険過ぎ	大阪市	原田すみ子
退屈を五欲が消してくれました	名古屋市	富田 末男
退屈のあくびしてても腹はへる	三田市	北野 哲男

「退屈」斉尾くにこ選

花便り私を置いて駆け抜ける	三田市	松本ゆかり
退屈なハサミが猫のヒゲに向く	豊橋市	高柳 閑雲
退屈な男が見てるトラの檻	大阪市	高杉 力
如何しよう時がのつべらぼうになる	松山市	柳田かおる
昼寝するので退屈の暇がない	堺市	奥 時雄
あちこちに小石を投げている独り	富田林市	中村 恵
葱一本長い一日だと思ふ	黒石市	北山まみどり
退屈になればポケットから新書	大阪市	川端 一步
退屈をさせない与野党の愚論	三原市	鴨田 昭紀
酒の席繰り返し聞く武勇伝	堺市	村上 玄也
子育てを終えて退屈やつと知る	米子市	池田 美穂
退屈のかたまりテレビだけ笑う	和歌山市	古久保和子
退屈な残務整理と定年と	弘前市	浅田 隆樹
切りたいが切らしてくれぬ長電話	奈良市	高橋 敬子
こちらから出掛けなければ蚊帳の外	札幌市	三浦 強一

豪邸は退屈ですか貧乏神
退屈と言う贅沢に慣れてない
退屈を喜ばれてる消防車
退屈の二文字忘れておりました
退屈な時は犠牲になる鼻毛
満員の店の行列動かない
退屈な会議に主催者も眠る
退屈な夫婦朝から無言劇
雨の午後妻とあくびを移し合う
雨三日今日も電話を待っている
付添いで待合室の大欠伸
退屈をすっかり忘れていた余生
退屈ですか私お相手しましょうか
待ち合せ水のおかわり三杯目
五連休退屈だけの人もいる
手と足も退屈自動運転車
優しさに慣れて欠伸が出てしまふ
六Bを友に退屈などしない
退屈なでも幸せな非常口
退屈なおまわりさんで村平和
観客が無いと退屈するパンダ
退屈を満喫する幸せな日
退屈な日皿を一枚割ってみる

大阪府 高木 道子
大阪市 升成 好
三田市 福田 好文
桜井市 安土 理恵
米子市 竹村紀の治
長岡京市 山田 葉子
弘前市 稲見 則彦
神戸市 細川 花門
奈良県 渡辺 富子
島根県 伊藤 寿美
弘前市 福士 慕情
藤井寺市 太田扶美代
枚方市 小林 わこ
和歌山市 定松 宏枝
唐津市 仁部 四郎
松原市 森松まつお
佐賀県 真島久美子
鳥取市 倉益 一瑤
明石市 穂谷 和郎
寝屋川市 平松かずみ
宝塚市 岸田 万彩
東京都 川本真理子
三田市 野口真桜子

退屈な顔を揃えて聴く古典
運動かねイオンモールで暇つぶす
徒然にスマホと遊ぶ通車
船旅もいい退屈を金で買う
退屈を知らないばかりのクロスワード
しばらくはゴルフ飲み会消えなし
終バスで退屈な雨数えてる
退屈になると悪事がしたくなる
この家に夫の居ない暇な夜
退屈な人生だけど死はこわい
母の日は家事を取り上げられている
行ったのか来るのか知れぬ過疎のバス
退屈なお経も後の食事会
暇潰し環状線をひと廻り
退屈の副作用かもメタボです
退屈で持った絵筆が弾む画布
退屈と思わぬ一人旅の窓
時間まで我慢我慢の隅の席
退屈になった退院日も近い
天井をにらんで過ごす療養中
退屈な時間が縛る闘病記
退屈が出ていったので昼寝する
退屈と右脳気付けば廻りだす

那覇市 前川 真
尼崎市 藤井 宏造
豊橋市 藤田 千休
松山市 宮尾みのり
寝屋川市 森 茜
松江市 中筋 弘充
松江市 藤井 寿代
神戸市 田本 古鈴
鳥取市 前田 楓花
倉吉市 岡崎美知江
長岡京市 山田 葉子
尼崎市 清水久美子
倉吉市 大羽 雄大
三田市 足立つな子
箕面市 広島 巴子
南あわじ市 萩原 狸月
鳥取県 山下 節子
奈良県 中原比呂志
三次市 伊藤 寿子
姫路市 古川 奮水
大阪市 津守なぎさ
寝屋川市 籠島 恵子
西脇市 七反田順子

繰り返す刑事訴追の恐れあり

雨三日晴耕雨読飽きてくる

退屈をしないだろうな嗜好

退屈を感じる暇のない介護

退屈だ足の爪でも切ってみる

退屈だろうなア百歳の座椅子

家中が退屈してる妻の留守

タマちゃんが欠伸しているうつりそう

私の時間に退屈は入れぬ

大の字の空を流れる白い雲

満開のさくらが退屈する宴

特別に書くこともない日記帳

退屈げな警察犬に安堵する

爪切った鼻毛も抜いたあと耳か

退屈か遺影は限りなく笑う

退屈なんてしてはおれない崖つ縁

退屈になればポケットから新書

趣味が無い企業戦士の定年後

じつくりと聞く木や草の伸びる音

秀句

つまらないくだらないなとテレビ見る

肩書きの取れた名刺の大あくび

無為の日々体重だけがが増えていく

川西市 山口 不動

和歌山県 森下よりこ

大阪市 岩崎 玲子

三田市 辻 開子

鳥取市 岸本 宏章

三原市 笹重 耕三

大阪市 大治 重信

大阪市 江島谷勝弘

米子市 政岡日枝子

土佐清水市 辻内 次根

京都市 都倉 求芽

三田市 上田ひとみ

米子市 後藤美恵子

八尾市 田邊 浩三

大阪市 榎本日の出

松山市 柳田かおる

大阪市 川端 一步

大阪市 藤田 武人

倉吉市 牧野 芳光

弘前市 高瀬 霜石

大阪市 平井美智子

橿原市 居谷真理子

ベッド抱き宇宙の夢を見るとする

運悪く休刊日には休肝日

退屈だろうなア百歳の座椅子

誰も来ぬ家の時計に針が無い

平和と言う退屈を噛み締める

退屈な夜長世界はテロ戦火

退屈なでも幸せな非常口

退屈は許さぬ不意打ちの病魔

窓際で人間観察しています

退屈な日の日記には手間が要り

つれづれに古い日記を読み返す

退屈しても天国からは戻れない

極上の退屈だねと雲笑う

退屈しのぎに大空へ描くアート

退屈に罪の意識がつき纏う

退屈が心の錆に火をつける

うつ伏せに流れる間延びした時間

木偶ですが花を買ってもいいですか

このところ使わないびつくりマーク

秀句

繰り返す刑事訴追の恐れあり

退屈へ月の宴と宗次郎

優しさに慣れて欠伸が出てしまう

大阪市 内田志津子

広島市 松尾 信彦

三原市 笹重 耕三

和歌山県 土屋起世子

豊中市 源田 啓生

鳥取市 加藤 茶人

明石市 梶谷 和郎

茨木市 島田 誠一

横浜市 川島 良子

豊中市 江見 見清

河内長野市 藤塚 克三

枚方市 寺川 弘一

橿原市 居谷真理子

山口市 中前 幸子

大阪市 樋口 眞

沖縄県 宮 すみれ

松江市 石橋 芳山

沖縄県 森山 文切

東京都 川本真理子

川西市 山口 不動

八尾市 宮西 弥生

佐賀県 真島久美子

主幹・理事長の選任について

川 柳 塔 社

今年は主幹・理事長の改選年に当たります。

立候補者は下記の「主幹・理事長の選任に関する規則」に基づき
期間内に事務所（06-6779-3490）へ申し出て下さい。

総 務 部

主幹・理事長の選任に関する規則

- 1 主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行う。ただし、会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。
- 2 主幹・理事長を選任するための投票は2年ごとを原則とする。ただし立候補者が一人の場合には選挙は行わず無投票にて選任する。
- 3 主幹・理事長が退任（定年を含む）する場合において後任の立候補者がいない場合には、主幹、理事長、副主幹、副理事長が協議の上、次期候補者を推薦する。
- 4 複数の立候補者がある場合には選挙により決定することとし、最高得票者を当選者とする。
- 5 主幹・理事長の立候補資格は、同人歴10年以上の者とし、同人15名以上の推薦を得た者、または現任主幹、理事長、副主幹、副理事長協議の上推薦を得た者とする。
- 6 立候補の受付は、7月1日から10日までに川柳塔社事務所総務部宛て必着とし、投票は7月中に所定の用紙によって行う。
- 7 この規則は、平成23年7月7日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

「タイム」

(投句 223名)

鴨 谷 瑠美子 選



ショータイムと呼ばれ期待の二刀流
目の覚める一撃タイムリーヒット
池江選手凄いな全部日本新
日本新六つ池江の底力
タイムシヨックこんでんがえしおもしろい
時刻表アバウトで来る無料バス
挽ぎ立ての噂持ちよりティータイム
焦らない時が解決してくれる
時間外労働ですと夜食拒否
寂しいねタイムリミット越えました
アンコールタイムオーバー幕降りる
数独で自己満足のタイムとる
おやつ付きおしゃべりタイムエンドレス
留守番の多忙はお八つタイムなり
何回もタイムを取って登る坂
待たすのも待たされるのも落ち付かず
タイムカード無かつた古き良き時代
タイムより完走をして得る自信
華やかな時もあつたとキリギリス
タイムは自由マネーは不自由だよ

堺市	村上 玄也	河内長野市	木見谷孝代
三原市	鴨田 昭紀	大阪市	江島谷勝弘
鳥取市	田中 天翔	白河市	鈴木たけし
		大阪市	平井美智子
		宝塚市	太田としお
		大阪市	古今堂蕉子
		倉吉市	山中 康子
		藤井寺市	田付 絹枝
堺市	奥 時雄	鳥取市	山下 凱柳
		唐津市	仁部 四郎
		松原市	森松まつお
		富田林市	片岡智恵子
		海南市	堂上 泰女
		大阪市	原田すみ子
		高槻市	初代 正彦
鳥取県	竹信 照彦		

飲み仲間来ると時間が進まない
後五分タイムサービスまで我慢
半額のシールをみても手を出さぬ
特売のタイムセールの癖になる
校庭へタイムスリップする桜
タイムカプセル恥ずかしたラブレター
タイムシヨック答え後から九十二
ロスタイムほどの余生に咲く花も
退屈な男といま午後3時
人類の終末時計日々進む
絶好調標準タイム視野におく
タイムカードが隠し持つて偽証罪

佳 句

横浜市	菊地 政勝	名古屋市	関本かつ子
堺市	坂上 淳司	名古屋	山本三樹夫
米子市	後藤 宏之	大阪府	米澤 俣子
堺市	遠山 唯教	大阪市	小野 雅美
堺市	内藤 憲彦	榎原市	居谷真理子
大阪市	柴本ぼつは		
大阪市	高杉 千歩	大山市	関本かつ子
大阪市	高杉 力	名古屋	山本三樹夫
大洲市	中居 善信	豊中市	水野 黒兎
弘前市	富士 慕情	堺市	矢倉 五月

人

時は金ならば私は財産家

地

一秒へ鎬を削るアスリート

天

一秒も待てず救命土俵上

軸

タイムリー夕日が沈む散歩道

「不足」

後藤 宏 之 選

(投句 220名)



欲しいのは愛を補うサプリメント
妻の愛溢れけれども酒不足
やさしさが足りずにゴムの木を枯らす
ぬるま湯の中は不足の怪文書
体重が不足のサンマ売れ残る
執念が足りず履き潰せない靴
語彙力の不足と啜う春あかね
引き算はしないと決めてよく笑う
ふところが寒いと笑顔まで不足
満ちていた気がついたのは欠けてから
力不足という逃げ道がある人生譜
一円も負けぬ自販機いしあたま
レンジでチン不足の愛を少し足す
金不足埋める工夫を愛という
誠意不足だから言い訳くどくなる
終活のドラマへ笑い足しまししょう
微笑みで言葉の不足埋めておく
足りぬところあつて可愛い女となる
足して2で割った答えもまだ不足
七三に分けるにしては薄い髪

岡山市 大石 洋子
唐津市 坂本 蜂朗
藤井寺市 太田扶美代
倉吉市 岡崎美知江
三田市 谷口 修平
沖繩県 森山 文切
高槻市 初代 正彦
大山市 金子美千代
鳥取県 石谷美恵子
朝霞市 前田 洋子
三原市 笹重 耕三
高槻市 松岡 篤
米子市 伊塚美枝子
下松市 有海 静枝
大阪市 平賀 国和
鳥取市 大前 安子
和歌山市 土屋起世子
米子市 池田 美穂
奈良県 長谷川崇明
奈良市 米田 恭昌

日本が危ない未来人不足
足一本足りぬだけです安い蟹
過不足無き角度でメロン切り分ける
花を見る昨日も今日も恋不足
不足とはつまり自分の至らなさ
只管に脇役演じ春の海
残高が大名旅行には不足
うまいこと不足見つけて愚痴を言う
言い足りぬ位が丁度いい会話
年金が冷たい顔で入ってる
金になるなら寝不足もいとわな
チーターと呼ばれた脚も骨粗鬆
すり減った若さへ赤い靴をはく
蓄えの崩れる音のする四月
まだ少ししこり残している握手
十円を足せば届いたラブレター
ひかえめが値うちを上げる年の功

倉吉市 山中 康子
堺市 村上 玄也
大阪府 高木 道子
熊本市 杉野 羅天
米子市 成田 雨奇
今治市 渡邊伊津志
富田林市 山野 寿之
倉吉市 牧野 芳光
和歌山市 武本 碧
大阪市 榎本日の出
三原市 鴨田 昭紀
鳥取市 福西 茶子
奈良県 渡辺 富子
土佐清水市 辻内 次根
大阪市 平井美智子
三田市 野口真枝子
堺市 大和 峯二
高槻市 原 洋志
弘前市 高瀬 霜石
横浜市 川島 良子

軸
今日はもう不足言わないことにする

初しぎ教室

題一 感謝

居谷 真理子

「日々感謝」「感謝して生きる」といった立派な心がけを詠んだ句がたくさん寄せられ圧倒されました。もちろん、そうありたいとの願望も含まれているのでしょうか。

誰に読まれても恥ずかしくない人生訓的な句は、感心はしても人間の匂いは薄いです。自分の、または人間の恥ずかしい部分を溜め息と共に吐き出す、笑いながらご披露する、照れながら詠む。そんな川柳つていいですね。

(原は原句 参は参考句)

原 子に感謝親に感謝でうまくいく (高弥 生)
その通り。でも、そううまくいかんのです。

参 子に感謝親に感謝の難しさ

原 師の恩は気付かないだろ最期まで 孚彦

参 師の恩に気付けないだろ最期まで

原 健康な体感謝九十四

ミヨノ

具体的な数字が入って句が締まりました。

参 健康な九十四ですただ感謝

原 舟で往くナニワの花見痛み入り まさる

参 舟で見るナニワの花に招かれる

原 ファスナーの開きを密かに教えられ 隆子

参 ファスナーが開いてますよとささやかれ

原 母の日に感謝の気持カーネーション (田廣 子)

母の日、感謝、カーネーション。ありきたりの言葉が並びました。ひねりましょう。

参 カーネーションだけでごめんねお母さん

原 感謝することを忘れず慕まいり 昭枝

参 今年またお礼を言いに慕まいり

原 ありがとう言わぬ日はないありがたい 亜希子

参 ありがとう言わぬ日はないありがたい

原 妻癒えて朝の味噌汁する幸 剛

「幸」まで言わない方がいいでしょう。

参 妻癒えて朝の味噌汁する音

原 感謝などせんでもええよ恩に着せ (貝正 子)

参 感謝などせんでもええよ恩に着せ

原 感謝状付属の品に気を取られ 一雄

参 感謝状より気にかかる記念品

原 ありがとう足向け寝れぬお母さん

参 足向けて寝られぬ方にお母さん

優

原 金婚式妻への感謝無限大

武紀

参 金婚の妻へあふれるほど感謝

原 ありがとう五文字言えずに損をする 美穂

参 ありがとうの五文字が言えぬ損な質

原 誕生日孫に感謝の散歩杖 洋一

原 わたしを産んで育てた母に感謝 風露

両句とも「感謝」を省いた方が余情を持ちます。

参 誕生日孫にもらった散歩杖

参 わたくしを産んで育ててくれた人

原 感謝状もらってうれしこそばゆい くみ子

参 こそばゆい顔で受け取る感謝状

原 片言の孫に元氣出ありがとう モモト

参 片言の孫に元氣を頂いた

原 恩人の後姿に手を合わす

俊雄

作りすぎの感じがします。

参 恩人の後ろ姿が消えるまで

原 子に返す親への感謝恩送り 福貴子

参 恩送り親から私そして子へ

原 ありがとう言われうれしいこの年で 勝正

参 この年でお役に立てるありがたさ

原 ありがとう空へ大きく響かせる (小雅 美)

誰に、何に向かつてのありがたさでしょう。

天国におられる人と解釈しましたが、

参 ありがとう空まで届くよう叫ぶ

原 道しるべくれた恩師に感謝する

参 今がある恩師がくれた道しるべ

原 三猿をつづけた母へいま感謝

参 三猿を続けた母がいればこそ

原 九〇路を生かされ神に日々感謝

参 九十を生かされてます神様に

原 素人の畑の野菜喜ばれ

参 素人の野菜だけれど喜ばれ

原 今の人生大昔から贈りもの

素 晴しい着眼です。

参 太古から贈られてきたこの命

原 いい人が揃って審議無事終わる

参 いい人が揃って議案無事通過

原 マニュアルのお辞儀で感謝が響かない

参 マニュアルのお辞儀で感謝されている

原 相合傘粋なはからい春の雨

参 相合傘春は雨さえ粋に降る

原 箸持てば食べる幸嫁感謝

参 今日また嫁に感謝の箸を持つ

原 おおきにと関西弁が深みます

参 おおきにと関西弁がなごませる

原 親不孝亡母に感謝忘れまい

参 亡き母にせめて感謝を忘れまい

原 雪も去り冬乗り越えた術後の日

作者は札幌の方です。

参 雪解水冬も手術も乗り越えた

原 健康体母に感謝す老い独り

参 健康体くれた母さんありがとう

原 介護中近隣好意に助けられ

参 介護してご近所様のありがたさ

原 晴天と無事に感謝高野連

参 晴天と無事に感謝の高野連

原 感謝され反論出来ず手を打った

参 先に礼言われてしまい手を打った

原 太陽に活力頼るマイハウス

参 太陽に活力貰うマイハウス

原 嫁からのさし入れ感謝の夕餉する

参 嫁からの煮物嬉しい夕ごはん

原 今日の日を感謝を込めて日もあらた

参 今日の日を感謝で送りさあ明日

原 健康が取り柄の体ありがとう

参 健康が取り柄の私ありがとう

原 神よりも一升瓶に感謝する

参 神よりも一升瓶をまず拝む

ひでお

原 年齢が上がり身につく「おかげ様」

参 「おかげ様」素直に言える歳になり

原 合席もどうぞ一言いいランチ

参 合席も笑顔でどうぞいいランチ

原 思ってる感謝だけではしょうがない

参 思ってる感謝だけではしょうがない

原 口癖の感謝は軽くみられます

参 口癖のありがとうです受け流す

原 戦争を放棄している国に住む

原 とりあえず長らえているこの命

二句を一句にしてみました

参 戦争は放棄の国で長らえる

【佳句】

この巨体支える足に日々感謝

花の道トレマークがありがたい

感謝デイ少し浮かれて買われる

母の日は母に育てた子に感謝

言葉より妻へ感謝の花をかう

【今月の推せん句】

感謝の顔が下手です私こめんなさい

米一粒たりとも残さない茶碗

あの時に叱ってくれてありがとう

門 幸子

厚 子

紀 美代

雄 大

開 子

勝 治

光 雄

和 之

一 平

美 枝子

里 子

のぞみ

木 藤こみつ

磯 野不二夫

梅 瀬みちを

廣 光

こずえ

一 彌

廣 光

徳 利

徳 利

徳 利

徳 利

川柳塔鑑賞

同人吟 升成 好

―5月号から

スキップは出来ぬが背伸びなら得意

福西茶子

加齢と共に、脳の指令に身体が謀反。
スキップの如きは頭の中では、たやすく
踏める筈が現実には足許が縫れ、思い通り
にはならない。後期高齢のわが身にこの
句は大いに共感。背伸び程度はまだまだ
できるので、屈伸と合わせてスキップな
らぬスクワットを毎朝日課として続けて
いる。日常を巧みにまとめた軽みの句。

世界中勝負に「待った」相撲だけ

須郷井蛙

相撲は古代から宮廷で秋に行われた神
事の一つ。今では国技となっているが、
古くからの神事ものだけに何故そうなっ
たか、理解し難いものが多い。句のよう
な「待った」や「鬚をつかむと負け」とか「勇
み足」など、枚挙にいとまない。それで
も廃ることなく今尚場所中は連日満員に
なる人気は、理屈を越えた魅力があるか

らに外ならない。相撲ファンでもある私、
今から五月場所を待ち侘びている。作者
も相撲に造詣深い方と拝察。

血圧も脂質も糖も僕が好き

浅田隆樹

定期的に血液検査を義務付けられてい
るが、この三つは必ずH（ハイ）マーク
が付き、医者にあれこれ指摘され、たか
がこの三病に毎日四種の投薬を余儀なく
されている。

下五の「僕が好き」は私のことと思え
てならない。穿ちの牙えが見事な句。

似合わない誰が名付けた犬ふぐり

前田洋子

犬ふぐりは春に淡紅色の花をつけるゴ
マノハグサ科の二年草。道ばたなどに自
生する。ところがヒョウタングサの別名
もあるように、果実の形が独特であるが
故にこの名が付けられたもの。

この草はさぞかし迷惑なことだと、名

付け親を恨んでいる様がこの句から伺え
る。軽妙洒脱の句。

おはよう朝には早すぎる時間

川本真理子

朝の定義は日の出から数時間を示すが、
広義には正午までを指す。作者はおそら
く暗いうちに起き、ウォーキングなどこ
なしておられる方だろう。この時間でも
人に会えばおはようの挨拶を交わし、ま
して同好の知人であれば立ち話なども。
実は私も毎日午前四時に起床する朝方人
間。滅多に人には会わないがたまに新聞
を配達されている方に会えば必ず挨拶を
交わす。世俗を離れたところに生活があ
るわけで、見つけが斬新。

それなりのナイスショットでまだテニス

板山まみ子

ナイスという掛け声は日本語では見事
で、普通は他人から掛けられるもの。自
分では言えばちょっと嫌味になりかねない。
しかしこの句はそんな事をものともせず、
胸を張って自分から自分に掛けたもの。
上五「それなりの」が慎ましやかで気取
らぬところがいい。健康第一のわれわれ
世代、大声で「ナイスショット」を連発

すれば長寿も約束。明るい愉快な句。

女房に懐いた犬も頭が高い

菊地政勝

犬は集団に生きる動物で、上下の順番に聡い。飼犬もその家の序列をす速く見抜き、この家のトップは奥様と決めつけ、ご主人は自分（犬）より下と見下しているに違いない。現実を的確に描写したユーモアの句。

限界はないかアスリートの記録

金子美千代

この句を一読してすぐ想起したのが、水泳の池江瑠花子さん。十七歳のこのスイマーは、御存知のように泳ぐたびに自己新。それも六種目すべて日本新であるから恐れ入る。この快挙を見る限り、句のようにまるで限界などはないように思えてならない。アスリートではないが、藤井聡太六段も然り。日本の若者の大活躍を期待してやまない。

指相撲孫は付度してくれ

島田千鶴子

付度はつい最近政局に関わる国会からとび出した言葉。よく考えれば他人の気持ちを持ちを推し量ると言うこの漢語表現は、

日本人に備わった美德でもある。

句会でも政局を風刺した句を昨今よく見かけるが、この句はそうではなく極く身近なことを素直に詠んだ意外性が良く、それものを射て言い得て妙。

お月さままで毎日メイクしています

加川靖鬼

月は太陽の光を受けて夜に輝く衛星だが、太陽に対する位置により種種の形を見せる。新月から満月までの姿をメイクと擬人化した比喩がたくみで鮮やか。更にこの句の裏に夜の月と昼の月のメイク差も見える。つまり夜の月に比べ昼の月は如何にもシンプルで、それは化粧崩れの顔とも言えないか。

十七音でこれだけの広がりと余韻を残す作者の力量はお見事。

生ビール一杯目には別な味

北野哲男

季節も春から初夏に向う今、これからの生ビールの旨さは筆舌に尽し難い。酒飲みの無言のルールに、酒の前は取り敢えずビールを一杯と決まっている。この一杯目は渴いたのどに格別の味。飲み干して「ああと言う」のも決まり文句。初

夏が待ち遠しいのは私一人だろうか。

この句はリズムも良く愛飲家の私好み句。

カタカナで書けば酸っぱくなる檸檬

中山春代

片仮名の片は不完全の意で、仮名が本流でカタカナは亜流。レモンの酸味は強いが不完全な片仮名で書くから余計酸っぱく感じて作者はこの一句を詠まれた。ことばの響きがよく完成度の高い句。

許したら楽忘れたらもうと楽

若本安代

もう少し元気でいたいから歩く

小林わか

どっこいしよ言える朝なら大丈夫

梶谷和郎

毎日を自分の好きに時間割

岡一心

鉛筆と広いこの世の旅をする

伊藤玲峰

九十歳もつとめでたく生きようよ

後藤美恵子

どの句も余生を明るく楽しく前向きに生き抜くヒント。肝に銘じたい。

水煙抄鑑賞

—5月号から

島

ひかる

考えておくと言うからきつと無理

玄 番 美恵子

考えておくと言うのは断り文句。美恵子さんはそれを察したのですね。下五の「きつと無理」の表現が面白い。

よろしくとありがとうが多くなる

上 山 堅 坊

歳と共によろしくとありがとうを素直に言えるのが、上手に生きる方法ですね。

百花繚乱平昌五輪の幕閉じる

川 島 良 子

平昌の余韻も覚めて風みどり

倉 橋 悦 子

百花繚乱と風みどりがいいですね。次の東京も良い結果でありたいものです。

警鐘が聞こえぬふりの免許証

岸 田 万 彩

高齢者の悲惨な事故が後を絶たない、

ヤッチャッタ!! では済まされないのです。

締め切りが迫る順位に畑仕事

大 羽 雄 大

太陽に畑の出来をたのみ込む

橋 谷 静 江

締め切りは待つてくれないが、雨の日でも夜でも出来る。自然相手の畑仕事は日中しか出来ない晴耕雨読。手を掛けるだけ掛け太陽に頼み込むきつと豊作です。

花丸を書いてうれしいベン先の

いいことがあると思つて生きている

木 藤 こみつ

子供も大人も花丸は嬉しいものです。ささやかな喜びも生きる糧にする前向きなこみつさんに大きな花丸です。

のんびりとローカル線の春を待つ

助 川 和 美

ローカル線乗れば訛りが心地良い

青 木 隆 子

お出掛けキップ、青春キップ我が家にも三月を待ち、ローカル線の良さ特に訛りの良さを楽しむ人が居ます。

イケメン医囁いたのは癌告知

東 内 美智子

言う方も聞く方も辛い、それをさらりと一句に出来る美智子さんの上手さ。

まち歩き出逢う人々皆優し

佐 藤 ま き

まささんが優しいから出逢う人々も皆優しく接して下さるのだと思う。

杖とめる梅のつぼみとふきのとう

松 尾 信 彦

次は何に杖を止めますか、自然と対話が出来るといいですね、そこでまた一句。

遊ぶならゲームをやめて囲碁将棋

小 畑 宣 之

ゲームにはゲームの良さがあるのかも知れないが、私も囲碁将棋を勧めます。

酒は好き爛は嫌いと言つたわし

中 井 虎 尾

冷や酒と親の意見は後ほど効くと昔から言います。虎尾さんはきつと嗜んでいらっしゃるのですね、私も冷やが好き。

裏を読む人に無かつたのは素直

渡 邊 伊津志

ほんと！ 本当そんな人が居ます。素直に読んで欲しいですね。



ネコちゃんたち

一月号では戌年にちなんで「ワンちゃんたち」をご紹介しました。遅ればせながらネコちゃんたちの登場です。

猫の句といえば、猫好きの木本朱夏さんが「ことばの国の猫たち」というアンソロジーを出されています（平成28年）。私の句もありますが「猫に石投げて当たったことがない」とか「猫の恋今年も邪魔をしてやろう」など、猫派から叱られそうな駄作で申し訳ありません。今回はこのアンソロジーに収録された作品とタブらぬようにピックアップしました。

野良猫に裏も表ものぞかれる

牧淵富喜子

口下手の私になつく野良の猫

水谷 正子

非常勤ネコが時々うちへ来る

辻 弘司

来訪は猫一匹と書く日記

大島ともこ

心配は野良猫来なくなったこと

西谷 悦子

最近、野良犬は見かけなくなりましたが猫はうろうろしています。犬よりも野生を残っていて人間に頼らなくても生きてゆけるのでしょうか。しかし、猫にも「寂しさ」とか「人恋しさ」があるのでしょうか、何度も顔を合わしていると親しくなるようで、いつもの猫が来ないと心配にもなります。

玄関に三つ指ついて猫が待つ

沖野おさむ

窓拭いて猫に添い寝の日向ぼこ

梶谷 和郎

鉢缶を開けて小猫と半分こ

津村志華子

愚痴はみな猫にこぼして穏やかに

岡崎美知江

マゴノテで時々ネコも掻いてやる

藤原 富恵

私が猫に対して失礼な句しか作れないのは、一緒に暮らしたことがなく可愛さを感じたことがない所為です。玄関で待つてくれている猫、日向ぼっこをしたり、鉢缶を分けあったり、愚痴をこぼしたり、マゴノテで掻いてやつたりしていると我が子と同じような愛情が湧いてくるのは解ります。

自惚れた鼻を引つかく猫の爪

宇野 幹子

妻に爪立てるとはまあ強い猫

水野 黒兎

物言わぬ夫婦に猫も遠慮気味

藤井 則彦

何かある猫が夫を見て逃げる

紫 しのめ

貧乏を見抜いた猫が家を出る

福田 好文

犬は上下関係をしつかりわきまえて飼い主に服従しますが、猫は飼い主も「同居人」程度にししか認めておらず、少し不快になると爪を立てたりするようです。亭主さへ遠慮している奥さまに立ち向かうとは大胆不敵。また、危険を察知する本能は健在で、険悪な夫婦仲もお見通し、食事の内容から経済状態まで推理しているのかもしれない。

風に乗る匂いを嗅いだ猫の髭

中居 善信

初夏の風ひくひく動く猫の耳

岩見かず子

猫の耳揺れた天使が通ったよ

松原 末湖

俊敏を過信したのか猫の事故

福士 慕情

影ほどの重さで猫が死んでいる

木本 朱夏

猫の髭は大切な器官で、風向きを読んだり狭い通路の幅を感知したり、暗闇ではセンサーの役割までしているとのこと。また、犬よりも鋭敏な耳は音源までの距離を察知し、感情まで表現できるとのこと。そのような超能力を持ちながらも、人間の造った走る機械に及ばないのは哀しいことです。

『麻生路郎読本』余滴 (46)

「川柳職業人宣言」前後⑥

葉 原 道 夫

昭和11年6月号「川柳雑誌」の「社告」で、編集担当の増位汀柳が提供していた事務所を廃止したと発表した。事務所廃止を路郎から聞かされていなかった汀柳は6月30日に同人を辞退した。そして、7月2日に路郎は同人会を開き、「川柳雑誌」は同人誌ではなく、路郎の個人経営とすることを決議した。

この川柳雑誌社の騒動について、もともとくわしく記しているのが、森雄牛子の「三味線草」である。例えば、「番傘」（昭和11年8月号）の「あれから」では、「川柳雑誌社の編輯をしてゐられた増位汀柳氏は、今回茶房「川柳」を經營され同社を退かれる事になりました。」とあるだけである。

「三味線草」（昭和11年7月15日発行）の「諸家消息」に、次のようにある。

（○）川柳雑誌社異変

*1 昨年は統制無類の番今に分裂を生じ昭和川柳社を生んだが本年も鬱陶しい入梅のさ、中有保証唯一の川柳雑誌社に異変が起つた。今日の川柳雑誌は旧たまむしの増位汀柳氏中心とするものであつたが*2汀柳氏の身辺多忙の爲めか雑誌の遅刊著しく其間いろ／＼のデマも飛んで甚だしき（筆者註「甚だしき」は「は」の脱落したもの）廃刊の危機招来など傳ふるものもあつた。一方主幹路郎氏は引続きの遅刊に焦燥亦焦燥持前の肝癪玉破裂してとうとう汀柳氏方の事務所に氏に無断で玉出の自宅へ移転した。それを雑誌で見初めて知つた汀柳氏の心は勿論平かならぬものがあつた。その結果か大阪朝報に脱退を報ぜらるゝに至つた。もと／＼川雑誌とたまむしでは水に油の感あり必ず訣る、時が来るだらうとは思はれる所だつたがかくまで早く来るとは思はれなかつた。一方路郎氏は*3葎野夫人の病臥と川雑誌の組織変更等で腹背に敵をうけた観がある。随つて金力で物事をするものの嫌ひな氏もこんどはうんとガンバリズムを発揮せぬと川雑誌がいかなる運命を辿るかわからぬ。しかし三十年只一心に川柳の

ために盡した氏の功績はさう易々と没落するものでない。汀柳氏は再び「たまむし」を出すと傳へられてゐる。何れも運命のいたずらごとであるとあきらめるより仕方がない。

*1「川柳総合大事典 人物編」に、堀口塊人は、（大正一五年番傘同人。塊仏改め塊人の命名は岸本水府。昭和一〇年六月、同人を辞退し小川百雷、岩崎蟬古、宮田夕蜩、永先茅十らと翌月「昭和川柳」発刊。）とある。

*2 汀柳の身辺多忙については、前回の余滴で記した。ここでは、路郎自身の当時の様子を確認しておきたい。「川柳雑誌」（昭和11年1月号）の「金色蝙蝠」で、路郎は昭和10年を振り返っている。引用しながら要約しておく。引用部分は、（ ）で示す。

三月の中旬に和歌山に預けていた四男の洋が急病になつた。病氣が長引くと判断した路郎は葎乃を和歌山に行かせ、自身は和歌山と大阪を毎日往復していた。そして、医療費を稼ぐために就職の決心をした。しかし、洋は短い日数を病んで亡くなつてしまつた。一

方就職の話は進んで、路郎は幾年振りかのサラリーマン生活を始めた。(これは「川柳雑誌」のためには困った話であるが、私一家にとつては誠に有難い話で、殊に愛児を喪つた悲しみを忘れるためにも、あとに遺つたことも達の將來のためにも、愁眉をひらく一つの出来事であつたのである。)

路郎は、せつせと働いた。そうするうちに、別の仕事が舞い込んだ。自由出勤の会社で、路郎にとつては好都合なのだが、最初の会社をやめるわけにもいかず、二社の仕事をするようになった。(私はヘト／＼になつて走り廻つた。その間川柳のこと、家庭のことの相談、オチ／＼眠る閑もたぬ身體になつた。随分忙しい仕事に慣れてゐる私も遂々十一月の中旬に病臥した。かなりな神經衰弱に罹つてゐることを知つたので考へざるを得なかつた。)そこで最初に紹介してもらつた会社をやめ、十二月からは、自由出勤の一社だけになった。(一寸閑人になつたやうな氣がしたがそれも束の間である。それはそれだけに仕事は殖えてゆく。

十二月もキリ／＼舞で暮らした。)

そして、4月には自由出勤の会社も辞め、川柳に専心することになった。

* 3 昭和11年7月号「川柳雑誌」(7月25日発行)の「川柳雑誌社組織變更に就て」に、(七月十一日の夜、荊妻霞乃が津守驛の構内で仆れ、その後澤田博士や阪大の井上博士に御足勞を願つてゐますが脈搏の結滯する騒ぎに徹宵看護に當つてゐるため(以下略)とある。

また、品川陣居が、「きやり」(昭和11年11月9日発行)の「川柳萬歳の唱和へ大阪に於ける「川柳人協會」創立への希望を中心として」で、次のように述べている。
(大阪の「川柳雑誌」社の増位汀柳氏が同社を脱退されたといふニュースは僕をして必ずしも意外の感に打たれしめなかつた、といふことは同誌のこ、一、二號の遅刊からみても、何かに在るなどいふ豫感を感じてゐたし、橋本綠雨氏の事實上の引退、福田山雨樓氏の東京詰などから、在來の「川柳雑誌」色が茲僅かの間に塗り換へられた感じを受けてゐた。此間固より麻生路郎氏

の個性乃至方向に變化のあらう筈もないし、これは思ふところあつての新機構編成であらうと考へしめられたのは恐らく僕一人ではなかつたらう。といふのは舊「たまむし」同人としての山本雨迷氏の増位汀柳氏との同時入社がわれわれに何かフレッツシユな感覺をもたらしたものの事實であつた。僕らをして當時の「川柳雑誌」に新しい期待をもたせたのも正直言へば雨迷、汀柳のコンビなればこそであつた。

ところが最近の「有保證」といふ柳界に於けるセンセーショナルな活躍を僕らの前に誇示した同誌が、いくばくならずして汀柳氏の脱退を報じて來た、次いで大阪の「三味線草」七月號に於て所謂「川柳雑誌社異變」を讀んだ僕等はそのニュース・ヴァリユウを全部的に受けないまでも、多少の眞相に觸れた氣がした。そこには僕ら第三者の考へた如く「雑誌の遅刊」が取り上げられてゐた。純粹な氣持の麻生氏の「持前の肝癪玉」も云爲されてゐた。「汀柳氏方の事務所を氏に無斷で玉出の自宅へ移轉した」といふことも傳へられたのである。事茲に至れば最早何をか言はんやであると思つた。(次回に続く)



追悼

閻魔さんに逢いに行つた敏さん

川柳大阪 中原 比呂志

3月3日は桃の節句。奇しくも恭子夫人との結婚60周年目に当たるとこの日の午前1時、敏さんは深い眠りににつき西へ旅立った。閻魔大王に逢うために。

5日の無宗派家族葬にも関わらず百余名の参列者は、それぞれの想いを込めて最後のお別れを惜しみ棺へ小花を捧げた。

塩満敏（本名敏雄）昭和6年9月。鹿児島霧島市生まれで享年87歳であった。

地元高校を首席で卒業し、京都大学に合格したものの戦後混乱期のさなか、家庭の事情で進学を断念せざるを得なかった。家計を助けるため上阪し、大阪市交通局に入局、車掌になったのが昭和28年であった。

川柳との出会いは配属先の天王寺運輸事務所に川柳会があり、非番者が仮泊所に集まり麻生路郎先生が指導にいられていた。分かれぬままに句会に参加した敏さんは雅号を「閻魔大王」と称したので「誰だ！こんなふざけた名を付けたのは」とひどく叱

られたという話は有名である。

天王寺運輸事務所と言えば大阪市内中心部を南北に走る動脈中の動脈であり、昭和16年「市電川柳」発足の地元でもあった。

「酒を飲まん奴は男じゃない」と子どものころから飲まされたという薩摩隼人の敏さんは焼酎を好んだ。しかし、深酔いや悪酔いは見たことがなく、居酒屋では、川柳短冊を掛けると客が喜ぶとか、お箸袋に即席川柳を書き合つて店の人と客との親密度を増すとか、とかく酒席を明るく賑やかなものにした人である。

正義感のある敏さんは職場青年部活動と文化活動にも熱心に取り組み、非番の日でも帰宅が遅い活動家でもあった。

あるとき互助組合上部から「川柳大阪」の一部に政治的な句は困るとクレームがついた時があったが敏さんは、職場文化活動に干渉は許さないと断固拒否し、削除に応じなかったことも有名な話である。

出版物に「川柳大阪50周年大会誌・

500号合同句集」ほか編纂も多く、個人出版「川柳資料室」「句集・夫婦酒」がある。

昭和45年、路面電車廃止、地下鉄配転で会員がばらばらになった大混乱期は、岩井本因棒、西岡洛醉氏らと各駅に句報を持って川柳の灯を消すなど訴え回り、会議室が使用できない折は、狭い仮泊室二段ベットの座りながら5、6人で句会をもつたこともあった。一方、古書店を巡り、『橋本緑雨編・川柳雑誌』ほか、散逸していた貴重文献を給料の大半をつぎ込んで収集された功績は極めて大きいものがある。長年の蔵書は六畳部屋に山積みになっている。

近年、脳内出血による病で身体不自由となられたが情熱は衰えず、川柳家や日川協の組織で川柳関係の文庫を作りたいとの願望を熱心に話し合つたこともあったが、叶わぬ旅立ちとなつてしまった無念さが残る。

敏さんの川柳界を影で支えた功績は他にも数多くある。平成10年、造幣局通り抜け投句箱が廃止されたが本田溪花坊先生の遺志を消してはならないと翌年、有志27名の句を持って造幣局に掛け合い、継続を訴えたのも彼であり、地元、羽曳野・藤井寺川柳会にも関わり、あかつき川柳会発起人の一人でもあり、川柳塔社参与の重責にも就かれた。



追悼

柳弘さんを悼む

川端 一步

柳弘さんは「逝くならばその如月の花のころ」二月三日に亡くなった。

交通局の大先輩橋本緑雨さんは『川柳雑誌』普及のため、非番公休を全部使い全国行脚した。「その距離は地球一周以上である」(山雨楼) 古い「川柳大阪」巻頭随筆に書いている。この教え伝統を守り実践してくれたのが柳弘さん。

彼が川柳を始めたのは、昭和60年2月「川柳大阪」に登場。それから定年近くまで、15年に涉り、交通局の各事業所や診療所、会員誌友のいない職場をまわり、持ち前の気易さを生かし「句報を置かして下さい」「良かったら読んで下さい」と「川柳大阪」句報の宣伝普及活動を行った。

「川柳大阪」は今年一月で九〇〇号を迎えた。戦中戦後営々とその歳月を重ねた輝かしい歴史の一端を柳弘さんは果たしてく

れた。

川柳塔への登場は平成4年3月で鈴鐺たる先輩に囲まれて作句活動を行った。

普及活動と合せて私が範としたのは、川柳塔社の各句会に多く参加していること。他柳社の句会にも顔を出し足を運んだ。「何か手伝うことがありますか」と進んで用事を買って出た。一言多いことが難となり、その労の評価は半減した。しかし彼はそれを気にせずへこたれず川柳に全身全霊を捧げた。

川柳塔社の常任理事の役も渉外部として腕を発揮した。とにかく理論も行動も前向きであった。

以前、「二歩さん他柳社の句会も楽しいですよ」と言った。それが私への置き土産だったのか。口八丁手八丁の彼に対して私の評価は常に辛口であった。彼の

汗を正しく見なかった。何かの記念に『葉根譚』を贈ったが読むべきは私の方であった。通夜の席でその非礼を詫言した。

選んだ川柳は彼の笑っている顔を思い出しながら読んで下さい。

「私の一句」より

風誘う食欲誘う月に酔う

取り柄などちつともないがよく食べる

優柔不断私を裁くコンバクト

よろめかず媚びずに人の群れに居る

以心伝心おなじときめき追う二人

貸し借りがちよっぴりあって腐れ縁

マナーモード活かし上手で聞き上手

姿見て今朝の機嫌を整える

ともすれば独り善がりになる利那

身の程を悟る男の守備範囲

「各地柳壇」より

産声はハモッています双子ちゃん

迷信に誘われているあかたれ

母さんが決めたことだと逆らわず

へこんだら修正液で立ち直る

成し遂げた充実感にある余裕

シナリオにない信号に追い越され

飲み会に君がいないとちと淋し 一步



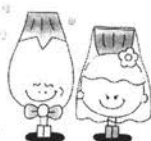
(投句195名)

アツという間に春も過ぎて、いい季節もあり無いままに夏へ突入しそうですが、あまりの気温の変動に身体が付いていきません。

時々出させて頂く大会などでも苦吟すること甚だしいです。

しかし、この苦しさこそが川柳という文芸に触れていることの実感だと自分に言い聞かせている次第です。

では、ナビと一緒に！



沖縄県 森山 文切

迷うなあどつちのタマネギも軽い

(評) 軽さもいろいろ、てのひらに乗せ感触によっても違う。その迷いに人の個性が出るのかも、さあ、どっち。

世の中は小顔流行と言っけれど

(評) けれど、大きな顔の方が舞台映え

岡山市 永見 心咲

すると言います。まあ、みんなが舞台に出るわけではないのですが。

奈良県 長谷川 崇明

正規です人手不足のおかげです

(評) 昨今の人手不足はかなり深刻だとか。でも、そのおかげで正社員になれたのならルンルンです。

和歌山市 武本 碧

神様が教えてくれた消去法

(評) 自分が何かを削ってゆくのは少々の罪悪感が伴いますが、神様に教えて頂いたのなら誰に遠慮が要りましようか。

神戸市 上田 和宏

国民はどちらが嘘か知っている

(評) 昨今のエライ人達は恐ろしいほど平気で嘘をつきます。閻魔様、お願いですから舌を引っこ抜いてやって下さい。

寝屋川市 平松 かすみ

土儀には上がれぬけれど強くなり

(評) 女人禁制って意外とあるようですね。今の時代に、と思われそうですが、支持する人も結構いると聞きます。

和歌山市 磯部 義雄

高かった野菜庶民に詫びている

(評) 高値が続いたのは決して野菜のせいではないのです。責任を全く取らないどこかの政治屋に聞かせてやりたいデス。

大阪府 米澤 俣子

男女の関係一切ありません

(評) このコトバ、ちょっと古くなった

かも知れませんね。そう言って堂々とデイトだなんですこーい。

米子市 生田 和之

似た者が出会い似て来る日を過ごす

(評) 犬だつて飼い主に似ると言います。夫婦はなおさら、男はオバサン化し、女はオジサン化するらしいですから。

奈良市 大久保 眞澄

ヴェールの中では笑っているんだね

(評) ウエディングヴェールの中で笑う可憐さにも、何かしら不穏な予兆を思わせませんか。そのうちそのうち。

大阪市 宇都 満知子

梅ラッキョ恵みを漬ける瓶洗う

札幌市 三浦 強一

集合写真インスタ映えを心して

箕面市 出口 セツ子

手のうちで転がす男品定め

大阪市 坂 裕之

入社式社長あいさつ辞めないで

松山市 栗田 忠士

神前の誓いに嘘はありません

米子市 八木 千代

コウノトリの羽音とにかくとりあえず

豊中市 上出 修

幸せをギュッと重ねたミルフィーユ

沖縄県 宮 すみれ

屋根と屋根いびつな月がのぞきこむ

尼崎市 清水 久美子

お互いにトラキチだから馬が合う

現実を知らぬふたりの有頂天 大内 朝子

香芝市

起き上がりこぼし何度もトライする 北村 賢子

東大阪市

キラキラネーム新担任を手こずらす 木見谷孝代

河内長野市

若かった君のポッケで手をつなぐ 久保木 剛

箕面市

百人の願い一度に聞ける神 禰 モモト

沖繩市

ゴンドラで登場しましたねバブル 奏子

大阪府

紅を差すオンナ鼻毛抜くオトコ 高瀬 霜石

大阪市

フラダンス一夜漬けてまた忘れ 七反田順子

西脇市

おたがいにガラスの靴は宝です 仁部 四郎

唐津市

肴見て赤白ワイン飲み分ける 坂上 淳司

堺市

ハロウィンも仮想通貨も馴染めない 榎重 耕三

三原市

井戸水にトマト冷やしてひと寝する 重信 能子

大阪市

いろいろと長い人生ありました 黒田 能子

芦屋市

打ち明けていない話の二つ三つ 高杉 力

大阪市

好かれまじしかしさつぱりモテません 磯野不二夫

泉大津市

救急の訓練やつと霧が晴れ 根岸 方子

日高市

昼顔のドヌーブかしら七年後 斎尾くにこ

島取市

法善寺彼女と拝み飲み直す 海老池 洋

枚方市

カップルへ風船とんだ澄んだ空 山中 康子

倉吉市

優しさを求ム！当方小金持ち 平井美智子

大阪市

朝早く行ったらあつたわらび採り 竹信 照彦

島取市

お互いに我慢の山も崩れ出す 定松 宏枝

和歌山市

な、な、なんとやつぱりこんな結果です 柴本ばつは

大阪市

こんな日もあつたわネエと燃えるグミ 宮野みつ江

岸和田市

悪びれもせずに招待状が来る 真島久美子

佐賀市

一円が足らず万札だすのもねえ 片岡智恵子

富田林市

友情という逃げ道を持っている 宮尾みのり

松山市

モンタンのシャンソンぞだね「愛の讃歌」 茜 五月

寝屋川市

マジシャンが次次増やす論吉さん 奥村 五月

大阪市

土壇場で風が死ぬのを待っている 夏目 一粋

鳥取市

鶴翼も魚鱗もすべて負け戦 石橋 芳山

松江市

いいですね君らの未来大きくて 江島谷勝弘

大阪市

宴果てて庭のカップル星月夜 富田 美義

高槻市

四畳半ドラマここから始まった 川島 良子

横浜市

過去形はピュアで微かにほろ苦い 山岡富美子

河内長野市

あの時の誓詞すっかり忘れ去り 佐々木満作

東大阪市

自家野菜出来はともかく豊かです 富永 恭子

神戸市

慎ましいそんな昔もありました 内田志津子

大阪市

乾杯の音頭はどうぞ手短かに 田中 章子

宝塚市

批判した父の気持ちしが今解る 堂上 泰女

海南市

先の事考えるのもうやめた 穂口 正子

河内長野市

8月号発表

(6月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句

青砥たかこ 選

豪雪もなかったように桜咲く
 出不精の母も浮かれる花便り
 風が描く路上アートの花吹雪
 二次元に戻りたがっているサクラ
 飽きるほど四、五年分の桜見る
 葉桜になってあなたに会いました
 満月に満開ディレクターは誰
 街中の家空っぽにする桜
 桜見の出ばな挫いた名残雪
 魂は軽く 沈まぬ花筏
 ひと駅を歩かせる今夜のさくら
 酒あればアカペラ楽し花の下
 改竄を告白潔い桜
 空っぽの校庭に満開の花
 国訛り乗せて別れる花筏
 葉脈を仄かに印す桜餅
 パーベキュー桜がやめたと鼻つまむ
 葉桜に茶屋の亭主が下ろす腰
 画用紙を零れる花の写生会
 前ならえソメイヨシノは行儀良い
 さくらからさくら百歳なんてすぐ
 盲導犬さくら愛でずに主見る
 ケンカして枝重桜に諭される
 見たかった桜に停まる霊柩車
 枝ぶりをとやかく言われない桜
 再検に向かう道のり花吹雪
 跡継ぎのない過疎の村にも桜さく
 咲いて散る誰のためでもない桜
 さくら咲く除染袋のそばで咲く
 新発見熊野桜を見て育ち
 あやかしが居て桜の下は無重力
 夜桜に奪われてゆく喉仏
 佳 近く春のあとがき葉さくらの風情
 佳 議事堂の前の桜もうつくしい
 佳 人間の我がまま見飽き散る桜
 佳 歳時記に背を向けながら散る桜
 佳 さくら散るなにか文句がありますか
 人 蟬ほどの寿命と知らず咲く桜
 地 あんパンの隣で桜がまだ匂う
 天 桜はいつもオープンカーでやって来る

石橋 芳山 選

偏屈なさくらも褒めるのが礼儀
 散ってなお葉桜などとおだてられ
 桜には綺麗な嘘がよく似合う
 葉桜になってあなたに会いました
 酔って候いろはにはへと散る桜
 後始末考えないで散る桜
 パツと散る例えを否定するさくら
 年ごとにあわてん坊になる桜
 おならする旦那は誘わない花見
 静脈をしずかになでてゆく桜
 今日またサクラに釣られパチンコ屋
 満開の桜が儂いと漏らす
 幾筋もためらい傷のある櫻
 葉桜の下へと辿り着く迷路
 人の行く後をぞろぞろ八重桜
 ソメイヨシノ心惑わす魔女に似る
 あんパンの隣で桜がまだ匂う
 墮落した桜未だに咲いている
 花の下チキンラーメン煮るもよし
 桜満開金持ちの気にさせられる
 次の方どうぞと桜散っていく
 桜サクラまた日本がおかしいぞ
 さくらひらひらまだ幻想を抜けられず
 桜舞う何も言わない言わせない
 枝ぶりをとやかく言われない桜
 神様に咲き人間に散る桜
 カウントダウンしまししょうひとひらの桜
 桜はいつもオープンカーでやって来る
 深追いはいたしませんと花吹雪
 桜はらはら私にも言えぬ恋
 花吹雪やさしい威嚇だと思う
 夜桜に奪われてゆく喉仏
 佳 さくら散る甘酸っぱさを連れながら
 佳 二次元に戻りたがっているサクラ
 佳 春の雪しだれ桜の腹上死
 佳 約束の桜とモルヒネの追加
 佳 さくら散るなにか文句がありますか
 人 花は咲いたのかドモホルンリンクル
 地 あやかしが居て桜の下は無重力
 天 アドレス変えました葉桜になりました

心 咲
 岡野 満
 穂口 正子
 乙川 初音
 澤井 敏治
 竹中 正幸
 木田比呂朗
 塚山 繁
 たごまる子
 田村ひろ子
 木嶋 盛隆
 うちだあつこ
 平井美智子
 平井美智子
 福 多 郎
 片山かずお
 西沢 葉火
 勢藤 潤
 柴田比呂志
 春川 秋男
 平尾 定昭
 平尾 定昭
 藤井 智史
 久保 卓子
 awa j i
 居谷真理子
 大内せつ子
 寺川 弘一
 美馬りゅうこ
 水 た ま り
 怜
 怜
 三好 光明
 森山 文切
 森山 文切
 ま さ と
 丹下 凱夫
 田口 和代
 水 た ま り
 美馬りゅうこ

投句方法 【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net/html/index02.html (サイト管理 森山文切)

第33回 国民文化祭・おおいた2018 川柳作品募集要項（概要）

「湯けむりたなびく温泉地別府 川柳の祭典」

1. 応募受付期間 平成30年4月20日（金）～7月20日（金）（当日消印有効）
2. 応募規定

- (1) 作品 一人各題二句詠（未発表作品に限る）
事前投句1,000円、当日投句1,000円
- (2) 応募料 （ただし、海外投稿者、身体障害者手帳等の写しを添付された方は無料）
所定の応募用紙に必要事項を記入し、郵便振替請求書兼受領証又はその写しを添えて応募してください。

- (3) 応募方法 一般社団法人全日本川柳協会 〒530・0041 大阪市北区天神橋2丁目北1・11・905
- (4) 応募先 一般社団法人全日本川柳協会 〒530・0041 大阪市北区天神橋2丁目北1・11・905

3. 題・選者

〈事前投句〉

「解ける」 米島 曉子（千葉） 「チャンス」 坂下 清（富山）
「湯」 篠田 東星（栃木） 「旅」 宮村 典子（三重）
「香」 田中 寿々夢（群馬） 「煙」 川上 大輪（和歌山）

第二次選者

岡崎 守（北海道） 田中 新一（大阪） 雫石 隆子（宮城）
梅崎 流青（福岡） 古谷 龍太郎（福岡）

4. 賞

文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・大分県知事賞
第33回国民文化祭大分県実行委員会、第18回全国障害者芸術・文化祭実行委員会会長賞
大分県教育委員会教育長賞・別府市長賞

第33回国民文化祭、第18回全国障害者芸術・文化祭別府市実行委員会会長賞

5. 発表会場

別府市教育委員会教育長賞・全日本川柳協合理事長賞・大分県番傘川柳連合会会長賞
川柳大会（当日投句、入選・入賞発表、披露、選評、表彰式）

平成30年10月21日（日）9時30分～16時30分 別府市公会堂 2階 大ホール
後日、入選作品集として刊行し、応募者全員に無料配布します。

6. 問い合わせ先

後日、入選作品集として刊行し、応募者全員に無料配布します。

〒530・0041 大阪市北区天神橋2丁目北1・11・905 一般社団法人全日本川柳協会
TEL (06) 6352・2210 FAX (06) 6352・2433

7. 主催者

文化庁・厚生労働省・大分県・大分県教育委員会・別府市・別府市教育委員会
第33回国民文化祭大分県実行委員会、第18回全国障害者芸術・文化祭実行委員会

第33回国民文化祭、第18回全国障害者芸術・文化祭別府市実行委員会
一般社団法人全日本川柳協会・大分県番傘川柳連合会

本社 五月句会

◇五月七日(月)午後一時
アウイーナ大 阪

連休明けの七日、5月句会は雨催いにもか
かわらず百三十二名(内投句者五名)の参加
で開催された。初出席は河内長野市の森田旅
人さん。

今月のお話は山本進さん。題は「川柳と点
字パソコンpp」。網膜色素変性症という難
病で視力を失われた進むさんは、目の難病患
者の仲間(この指止まれ同じ悩みを持つト
ンボ)とRP-net川柳会「もやい傘」を拠
点に活躍されている。進むさんの心の軌跡を、
句で紹介したい。

歩いても歩いても暗いトンネル

点筆で悔し涙をたたき込む

死ぬまでに見えたらいいな妻の顔

「わろうてんか七十点の歌唱力」の歌に賛え
て「妻よ子よにらめっこしよういつの日かこ
の目に光り戻る日あれば」を大養節で詠じて、
お話を終えられた。

月間賞は山本加お里さん(大阪市)

(司会)眞理子・志津子(協賛)扶美代・ま
つお(受付)裕之・ひとみ

(懸垂幕墨書)耕治(清記)憲彦・勝弘

席題「まだ」 長浜 美籠 選

まだ未婚もうてもうてと連呼する
まだ飲んでいます片付けするなかれ
暗証番号まだ元カレの誕生日
一病を抱いてまだまだ生きている
もういいね母は句点を打って逝き
百歳時代まだ結論が出ていない
この下はビキニ勝負は脱いでから
まだ元氣二合飲んでも上げぬ腰
君なら出来る魔法の言葉まだ残る
まな裏にまだはつきりと昭和の絵
百までは生きてやるぞとローン組む
まだと言う甘えの歳がもうになる
まだチャンスあるのか風がやわらかい
神さまに縋りつくのはまだ早い
「まだか」もうか微妙なお年頃傘寿
三姉妹みな未知数だ楽しいな
もう持てぬまだかまだかの拉致家族
南北はまだ一波乱あるだらうな
愛がまだあるらし夫婦喧嘩派手
まだ何も言うてないのに酒が出る
チャンスまだくると自分で思う
断捨離でまだ捨て切れぬ絆たち
半世紀前の浮気が未だ弱み
戦中派まだ九条は手放せぬ
悪臭のまだ匂つてる財務省

清水久美子 新家 完司
木藤こみつ 久保田千代
森田 旅人 丹後屋 肇
栃尾 奏子 北野 哲男
山田 葉子 山本希久子
山崎 武彦 宇都満知子
森松まつお 新家 完司
鈴木いさお 柴本ばつは
永田 紀恵 江島谷勝弘
西出 楓楽 森松まつお
立蔵 信子 中村 恵
松岡 篤 柿花 和夫
米田 恭昌

しゃあないか後期高齢迫つてる
意気に燃えまだ九十と戦中派
古希過ぎてまだ学び中人の道
まだ若いつもりで磨く膝小僧
まだまだと貧乏神が離れない
浄土への方程式がまだ解けず
老いてなおまだまだしたい事がある
まだ母の骨が熱いか彼岸花
臆病でまだ人間を続けてる
まだですかあなたのノック待ってます
その日まで女でいたい傘寿です
仲間でも心の底は開かない

佳

秘めた愛 発酵させている途中
半熟のままでお嫁にまいります
老いの春まだ間に合うと風が押す
余白まだ埋めたい晩学の途中
脳みそに未だ詰め込める空きがある

人

切り札がまだふところにある迷い

地

きつとまだ生きろとお迎えが来ない

天

桜からさくらへ浮かれまだ此の世

軸

また余命あればと励むスクワット

江島谷勝弘 水野 黒兎
藤原 大子 木本 朱夏
木崎 盛隆 升成 好
安田 忠子 伊達 郁夫
前 たもつ 上田ひとみ
小川賀世子 榎本日の出

松原 寿子 鴨谷瑠美子
木本 朱夏

兼題「同じ」 鴨谷瑠美子 選

やつと佳い句が出来たのに同想句
結婚も離婚も同じ口が言う
同じなら美人揃いの店がいい
没句同士ホッとコーヒー飲んで
同じなら重たい方を貰つとこ
徘徊もやはり散歩と同じ道
同じ釜の飯味が出るのは十年後
白浜も上野も同じバンダです
美人へは同じ返事も語尾上がる
南と北同じ言葉で語り合う
偶然に同じ服を着て笑い合い
惚れたからあなたと同じ色を着る
同じ人と思えぬ地位の「記憶なし」
災いを何度も招く同じ口
五十年同じ体重ですエヘン
同じ題表現達う五七五
セクハラが同時に多発するヒト科
着信音同じメロディー満員車
再発防止決まり文句のごとく云う
父親のコピーのような子の短気
慣らされて同じになった味音痴
同じ事していて群れを抜け出せず
メンバーは同じ党名ばかり変え
左に同じ右に同じいい調子
同じ物欲しがる癖が直らない

下戸の家ワインに醬油同じ棚
スマホ漬け敬語が死語におちぶれる
スタートは同じと見えぬ努力の差
人生も竹と同じで節がある
そっくりと言われたくない双生児
皆同じ角度心にもない謝罪
盛りつけで同じ刺身が違ふ味
同じ服着ても姉には華がある
阿弥陀経同じところで眠くなる
社内旅行上座も同じ浴衣着て
同じもの二つと出来ぬしやばん玉
同じこと続けることがむづかしい

佳

長谷川崇明
山口弘委智
升成 好
藤田 雪菜
三宅 保州
田中ゆみ子
古今堂蕉子
太田扶美代
上田 和宏
柿花 和夫
藤井 宏造
榎本日の出
坂 裕之
江島谷勝弘
吉道あかね
坂上 淳司
川端 一步
栃尾 奏子
鈴木 かこ
中島 一彌

兼題「熱い」 初代 正彦 選

熱燗で偲ぶ親父の七回忌
熱い血が静かに燃えて夜が更ける
しゃあないな黙ってられず大ヤケド
いい朝だ揃って熱いお味噌汁
熱愛がゆっくり冷めていい夫婦
川柳を語れば熱い時が過ぎ
アルプスの詰襟帽子塩を噴く
熱い涙この侮しさを忘れない
体験談熱い語り目に目が潤む
熱狂の渦の大きき二刀流
チンをしていらちが触る燗徳利
熱燗で男は今日の鬱洛かす
ほどほどがいいジェラシーも熱燗も
若さだな熱く語れる夢がある
ハグしたら火傷しそうな美魔女たち
ノーサイド固い握手の目が熱い
パワハラと熱血指導紙一重
初孫へ熱い四人の祖父母達
反戦の熱い叫びが渦となる
損得を計算しない熱い人
晩学の根っこに熱い好奇心
熱っぽく話すが中身何だっけ
熱熱と言っても後期高齢者
壇蜜に熱い視線を向ける夫
ありがとう熱いご飯へ玉子かけ

伏見 雅明
伏見 雅明
鈴木 栄子
田中ゆみ子
藤原 狸月
長高 俊雄
丹後屋 肇
小林 わこ
佐々木満作
緒方美津子
澤井 敏治
石田 隆彦
片山かずお
新家 完司
伊達 郁夫
水野 黒兎
原田すみ子
渡辺 富子
立蔵 信子
内藤 憲彦
坂 裕之
山田 耕治
榎本 宏子
平松かすみ

べしやんこのころ正した熱いお茶

山本 昌代

暑くても熱うどん私好き

磯島福貴子

白い飯熱い味噌汁ある平和

山野 寿之

ささやかな抵抗お茶を熱くする

升成 好

熱視線大谷君の居るところ

宇都満知子

胸にまだ熱いモノあり辞書を繰る

鈴木いさお

沸点に達し男の顔になる

米澤 俣子

百度石熱い願いに耐えている

柿花 和夫

詫びながらしつかり挟む熱い骨

小野 雅美

近づくと火傷しそうな曼珠沙華

鈴木 かこ

反戦を説くペン先を熱くして

吉道航太郎

ラストラン熱い思いが込みあげる

中川ひろ介

佳

口に泡世をぶった斬る縄のれん

村上 直樹

目が冴えて深夜のペンは熱くなる

柿花 和夫

熱湯も冷たい水も出る蛇口

川端 六点

同居してからのスープが熱すぎる

三宅 保州

太陽の熱気漲るゴッホの黄

藤井 宏造

人

熱い男 飲めば暑苦しい男

新家 完司

地

熱っぽい午後だと猫を抱きながら

木本 朱夏

天

本物になるまで叩く熱い鉄

鴨谷瑠美子

軸

イチローというクールで熱いダライラマ

兼題 「マスク」

石田

隆彦 選

同じ屋根飯面夫婦の腐れ縁

米澤 俣子

森友も加計もマスクとりなさい

酒井 紀華

永田町マスクの欲しい人数多

前田 紀雄

マスクして世界惑わす北の嘘

村田 博

ドクターのマスク安堵の息を吐く

居谷真理子

人避ける意識がマスク掛けさせる

村上 玄也

マスクして今日は残業断る気

山田 耕治

定年で脱いだ飯面は傷だらけ

大坪 一徳

よく喋る口へマスクのプレゼント

山本 昌代

重いマスク外しさわやか自然体

藤原千恵子

掛け付けの歯医者素顔まだ知らず

坂上 淳司

厚化粧飯面の上にまた飯面

村上 直樹

巨大マスク杉にかけた花粉症

升成 好

子が東大鼻がマスクを突き上げる

米田 恭昌

やっこさ飯面を脱いだ晴れやかさ

山本 昌代

ニコニコマスク時々疲れ干しておく

今井万紗子

マスクメロン分數習った子が分ける

川端 六点

わがマスク親を恨んだこともある

西出 楓楽

マスクより心正しい人を選ぶ

宮崎シマ子

低い鼻かくせる丁度いいマスク

藤井 宏造

銀行へはかけて入らぬデカマスク

内藤 憲彦

少し緊張マスクメロンを真つ二つ

森 廣子

世界一マスクが好き日本人

栃尾 奏子

善人のマスク外して生き伸びる

山崎 武彦

速射砲マスクの下に隠してる

中島 一彌

挨拶がマスクのままでさて何方

坂 裕之

饒舌なマスクの下の二枚舌

山野 寿之

並みの出来親に感謝をするマスク

川端 一步

マスクして眼だけ鋭き消えぬデカ

村上 玄也

マスク越し全て見ていた野村さん

上田 和宏

欲と嘘飯面つけたりはずしたり

山口弘委智

無駄口を封じ自戒のマスクする

長高 俊雄

マスク越し手振り身振りの立ち話

佐々木満作

穏やかなマスクの下にある炎

鈴木 かこ

思い出一つ残せない児のデスマスク

吉村久仁雄

苦も染もみんな飲み込みデスマスク

松尾美智代

信頼のマスクドクターの重いくち

津守 柳伸

佳

政治家にすげかえの利く顔がない

大久保真澄

この世の憂さ解き放されたデスマスク

渡辺 富子

美しいマスクが真実を覆う

山岡富美子

家一步出れば強気のマスク付け

油谷 克己

マスクする言にくい事言えそう

能勢 良子

人

マスクぐらいいお喋り止まる舌じゃない

澤井 敏治

地

マスクとはつきりノーと言うために

穂山 常男

天

花びらがほころぶはのデスマスク

木本 朱夏

軸

第三のマスクに替えて夜の街

兼題「家」

木本

朱夏選

帰る家みんなありそう改札機
帰る家あるので急ぐことはない
自由奔放哲学者の家青テント
淋しいな五軒長屋に一人住む
我が家だけ目立つ板塀瓦葺き
サラリーマン家一軒の物語
ごめんよな三十坪の土地だけで
駅前のマンションにする四コマ目
六畳も酔えばわが城下が城下
やせがまん大きな家は住みにくい
マンションに生まれ知らないすきま風
この家でやつさもつさと生きてきた
いい供養父母なき家に孫集う
あの頃は家も笑って武者飾り
お隣も今は二階は閉めたまま
三世帯から悲劇喜劇が始まった
家付きで車も付いて介護付き
家を出て父との距離が近くなる
カーテン変えるだけで我が家の風はしやぐ
悲しみを背負ってかたつむりのように
ふるさとの空家に帰るたいまに
古家の私にちやうど合う香り
過疎もよし古民家にある住み心地
家を持つ夢より古家売る思案
朽ちかけた空き家の庭に舞う螢

久保田千代
前 たもつ
矢倉 五月
山本加お里
坂 裕之
木嶋 盛隆
江島谷勝弘
鈴木 栄子
長高 俊雄
中里はこべ
萩原 狸月
緒方美津子
平賀 国和
山根 妙子
片山かずお
今井万紗子
太田としお
伊達 郁夫
小川賀世子
居谷真理子
山下 純子
森田 旅人
澤井 敏治
小山 紀乃
渡辺 富子

代代の家も時代の抜け殻に

廃屋の屋根が崩れて泣いている

サクラサク家が傾くまで笑う

夕焼け小焼けひとりになったマイホーム

生活感あるのがわが家我慢です

ふるさとに殖生の宿と呼ぶ生家

住んでではなみたい洗濯物出てる

分家の身墓は自力で建てました

軒修理今年も中止燕の巣

婿殿に家の権利書見せておく

プチ家出したのに誰も気がつかぬ

恋しい家であつただろうな山頭火

佳

旅三日ハウスクリーニングを依頼

ぼつと灯が点つてハウスからホーム

玄関にこの家の主婦の顔がある

小綺麗に暮して猫が寄りつかず

売った家となが住んでおられるか

人

路面電車の窓から覗くよその家

地

苦屋でもここが私の解放区

天

古い屋敷だ 百歳がひとり住む

軸

築六〇せめてバラなど咲かせましょ

奥澤洋次郎

新家 完司

伊達 郁夫

鈴木 かこ

立蔵 信子

山田 耕治

山田 耕治

藤井 宏造

柴本ばつは

三宅 保州

西出 楓楽

森 廣子

田中ゆみ子

吉道航太郎

米澤 俣子

鴨谷瑞美子

新家 完司

木藤こみつ

山岡富美子

小島 蘭幸

兼題「邪魔」

小島

蘭幸選

電線が車窓の富士を真つ二つ

邪魔者は一人もいない縄電車

深入りをし過ぎて煙たがられてる

いいムードでした携帯鳴るまでは

お邪魔します家族がひとり増えまし

ますすぐに進めば邪魔が多くなる

ゴルフバッグ本当に全部要りますか

ミサイルが邪魔する汚れなき地球

広辞苑重く邪魔になるけれど

邪魔な日もあるけど有り難い家族

時々生年月日邪魔になる

邪魔しない遠慮もしない子との仲

本当に軍隊邪魔かこの平和

邪魔されず向き合う後期長すぎる

貯め過ぎた諭吉が邪魔になりだした

ときどき邪魔ときどき好きになる夫

子の邪魔にそろそろなつて来たか

約束の二時間前に来て座る

保育園元氣な声が邪魔と言う

邪魔な物何も無いのに転ける老い

諭吉ほど邪魔なヤツなどいてません

雨上りの傘ほど邪魔なものはない

邪魔なもの無駄なものなど無いこの世

せめて邪魔にならない様に生きていく

邪魔ですかこんな顔ですこんな僕

石田 隆彦

前 たもつ

村上 玄也

栃尾 奏子

鈴木 かこ

升成 好

中岡千代美

小野 雅美

川端 一步

吉道航太郎

西出 楓楽

藤原 大子

上山 堅坊

山田 葉子

澤井 敏治

緒方美津子

小川賀世子

内藤 憲彦

内田志津子

原田すみ子

鈴木 栄子

吉道あかね

清水久美子

能勢 良子

前田 紀雄

太陽の邪魔にならない場所で咲く

中村 恵

てにをはの二つが邪魔をして破調

木本 朱夏

邪魔な人が減った呆けたのかもしれない

江見 見清

ひっそりとお側で咲いていいですか

山崎 武彦

知らぬ間に人の邪魔しているごめん

松尾美智代

お邪魔しますと挨拶ぐらいいしろよガン

村上 直樹

ピンポン昼寝の邪魔がやって来た

堀 正和

核兵器人が作って人が病む

山岡富美子

目障りなところに椅子が置いてある

木本 朱夏

最後の最後プライドが邪魔になる

太田扶美代

夢のかけらが邪魔してこけてばかりいる

吉村久仁雄

邪魔者は消してトランプひた走る

村上 直樹

住

気の利かぬ棒が一本邪魔になる

太田扶美代

地球にはゲジゲジである私たち

新家 完司

邪魔なもの少しあるから寛げる

飛永ふりこ

神ってる選手に解説は邪魔だ

山田 耕治

花吹雪に行く手はばまれ遅刻する

吉村久仁雄

ブライドは捨てないとも邪魔だけど

居谷真理子

邪魔にされても姉ちゃんの彼が好き

中岡千代美

天

あの人の遺品邪魔にはなりません

山本加お里

軸

掃除機に追われ朝刊抱いていた

句会 燦 燦

月句会を読む 弘 津 秋の子

止まり木の奥に憂き世の指定席

島田 誠一

時間制限のある席題の作句は、集中力と発想力が要求される。
この句は映像まで浮かんでくる。

何となく落ち着く奥から二ツ目のトイレ 島田 握夢

「奥から二ツ目のトイレ」というフレーズに心惹かれる。し
かし上九が気になる。夏井いつき先生ならバツサリと線を引き
見事な添削をされるだろう。添削より自分で推敲することを勧
めたい。それが身に着く道であると思う。

浪人も留年もした夫です 緒方美津子

バトラーを追い越せないで遅刻する 村上 玄也

今なんで皆笑ったか訊いている 江見 見清

兼題「遅れる」から三句。愛とウエットに富んだ二句である。

ホーキンス宇宙のすべて解けたかな 川本 信子

先日のNHKラジオで「ホーキンス春の星座へ仲間入り」と
いう川柳を聞いたところである。ホーキンスさんは車椅子から
解放され自由に宇宙を飛び回っていらつしやることであろう。

こだわりのパン屋にのどか長い列 山根 妙子

今の時代をよく捉えている。突如駅前パン屋がオープンし
て行列ができる時代である。ラインだか何だか若い人の情報力
は凄い。そのさまを「のどか」と見る目が楽しい。

出直しはまず透明になってから 小林 わこ

無色透明をめざす腹黒い僕 吉村久仁雄

ボーイソプラノおばさま達も透き通る 柴本ばつは

透明に生きるのは難しい。「腹黒い僕」と言い切った久仁
雄さん。出直しを決意する小林さん。ところで天使は男の子だ
そうである。少年合唱団の歌声に包まれ、せめて卑怯な人間に
はなりたくないと思うことである。

ふたば

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

川柳塔みちのく(青森)

稲見 則彦報

絵手紙に春爛漫の城描く
榮転も左遷も乗せる春の風
三百円にも欲しいです前後賞
飯の世に群れて泣いたり笑ったり
両の手で春のお日様抱き寄せる
牛の群れ胡麻粒にする大平原
落ちこぼれ背に観音群れている
白髪染め上手に使って夜に生き
欲しいです夫から出す努力賞
吹いていあわせ色に染まる汗
カメレオンのように染め替えるのは辞めました
この群れは貴方待っているのです
プロポーズ受けた賞品指輪です
かたくなな人の心も溶かす春
デモ行進民主主義まだ生きていた

風来坊 慕情 重虎 則彦 美鈴 洋子 隆樹 一吞 井蛙 柳子 孝子 初枝 吹喜 ひとし 小とみ 規子

パートナー漬けても煮ても昆布だし
あたたかな心の群れと語り合う
わたくしの賞味期限がわからない
くたびれた左脳をじゅつと陽で染める
海鳴りをリユックに聞かす一人旅
戦争を止めてごはんにしませんか
ヘンクリを始末してから大掃除
煮こごりが溶けて流れる風に遭う
これで良し飯は喰ったしあと薬
加齢臭古い辞書には載ってない
冷酒がぶり理性乱れて右左
黒い薔薇今夜は他人の関係で

和歌山三幸川柳会

楠見

章子報

落ち椿覗けば花蕊もえている
覗かせてほしい百年後の子孫
百歳のしわから神様が覗く
谷底を覗き寡黙になる男
楽屋裏覗き込まないのがルール
へそくりの場所をカラスに覗かれる
鍵穴を覗けば謎が解けて行く
約款はルーベで覗く中途まで
ギネスより長寿のトップ目指したい
トップより遅れて走る風が好き
先頭の負担を分かつ渡り鳥
肩書きがときどき邪魔になるトップ
トップから離れ気楽なマイペース
落とし穴掘ってトップを待っている
トップにはいつも孤高の風が吹く

久美子 真由美 黙人 芳生 のぶよし 龍馬 ふさあ 花峯 きよし 霜石 吞舟 和香子 菜摘 保州 智三 ダン吉 次根 章子 千鶴 まき エイ

トップギア上げてマンネリから抜ける
徒競走いつもトップの良き記憶
運命の刹那を指している時計
たたみ針頑固に老舗守っている
生計を立てた針箱鯨尺
針の穴そこから何が見えますか
満月と重なり合うてから不明
反抗期のドアも雪解け待っている
作り手の思いも知らず食べ残し
欠点も愛嬌なんですの私
人のんだ川が静かに流れてる
春が来た人それぞれの春が来た
湖のような人です母のこと
人柄が好きで時々する喧嘩
レモンティー二人の席をあたためる
一人前になつて清濁併せ飲む
ひとりだけ違う意見で浮いている
人権を疎かにした罪と罰
人の道教えてくれたお針箱
人生の森でしみじみ探す愛

はびきの市民川柳会(大阪)中川ひろ介報

敏さんが逝つた三月空仰ぐ
首飾りのご浮き名纏つてはる
輪の中で一人浮いている天邪鬼
天ぶらに山菜増える春の卓
鶯の美声やよいを欲しいまま
痛いこ衝かれ総理の浮かぬ顔
あれこれと思ひめぐらし難流す

碧 一雄 幹子 起世子 当代 宏枝 理恵 純子 敏照 知夫 宏夫 よしこ 和子 かず子 絹子 昇 准一 義雄 ひろ子 富香 ダン吉 みつこ 壽峰 ちづる 欣之 いさお 美代子

利に走り大手メーカー土台揺れ

三月なのはいえもう産み月なんです

浮かんでは消える小さな恋の夢

存在が浮いて寂しい酒の席

給料日浮き浮き待ったのは昔

一線を越えた話が面白い

もうかと信じて何度も詐欺にあう

公園の百花繚乱莫塵の宴

損失は出すが利益はかくします

年度末確定申告還付金

赤字での受注の工事手抜きされ

小さな恋喜寿のときめき浮き浮きと

浮き彫りのみごとな欄間職人技

内部保留にベースアップを社長さん

浮いた噂ひとつ無いまま八十路坂

ささやかな夢がこわれた低金利

書き換えの毒まんじゅうは誰食べた

神風が吹いて八億儲かった

ふわふわと風にまかせる古稀の日々

春新酒搾り立て飲む生原酒

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

難病の原因不明がもどかしい

原因は医者のもと加齢です

冷蔵庫開けてばかりで肥えてゆく

愛妻の白髪も皺もボクのせい

原因は最初についた嘘ひとつ

原因はいつもお金やなああんた

久仁子

清

専平

高鷲

雄太

さくら

紀雄

かつ美

シルク

千鶴子

真

章司

洋一

フジ

喜久子

登志子

泰子

冬のト

まつお

久仁雄

ひろ介

里子

朝子

賢子

雅美

一步

満知子

里子

原因をたどり過ぎれば窮鼠猫

原因は桜吹雪がスルーする

原因が解つてない時笑つとく

原因は寒さ梅桃桜爆発す

とりあえず立替えといたただけなのに

生き残ることが錯覚かも知れぬ

阪神のパレードに沸く御堂筋

年かさね思いちがいで徳をとり

錯覚も良し人生一度きり

犬も錯覚ここ掘ったけど何も出ぬ

幸せな日々と毎日言い聞かせ

お互いに錯覚しあい今夫婦

錯覚だボール坂道登つて

錯覚と聞こえはいが物忘れ

罪ですよその気にさせるその笑顔

ボクにだけやさしい人と思つてた

スナックのママを目当てにくるシニア

スナックのグラスに残るホロ苦さ

懐かしき昭和スナック枯れたママ

手厚くして役目を終えた盲導犬

思いっきり慰めあえる無二の友

救い待つ難民の子の眼が悲し

この山を越えればきつと別天地

虐待の子供ら全員救いたい

フクシマの暮し生業救わんか

拾う神救う神あり青い空

ロビンギヤへ届けユニセフのこころ

老う親へ早く拉致の子救わねば

俊雄

ふりこ

舞夢

あかり

(矢)五月

保州

克己

廣子

美龍

シマ子

久仁雄

福貴子

直子

妙子

大輔

志津子

勝弘

満出

日の出

ひろ介

たかこ

ばっは

萌

ゆみ子

芳香

美世子

清

隆昭

福士慕情選

少年の翼に怖いものがない

病む人の心をさする介護の手

どんな花咲かすが明日へ種を蒔く

幸せのチャンス両手で引き寄せる

干支聞かれ内緒にしてた年がばれ

星くずを食べた瞳だ澄んでいる

次ページをめくれば満開のさくら

おもしろい本があるからまだ死ぬ

仲直りしたくて喧嘩吹っ掛ける

できることやつておこうよ春の靴

佳句地十選 (5月号から)

古久保 和子 選

次ページをめくれば満開のさくら

耳栓がボロリと落ちて春になる

リュック買ったどこに旅する訳もなく

錠剤ボロリ誤反はいつも突然に

財布からちゃりんと落ちた生活費

スマホ中心誰も彼もが失語症

抜けるなら抜けと錆びてる釘の声

包帯の中味は小さい小さい傷

見返りの無い軍手干すボランテア

良い寝息今日一日が満ちている

富香

誠一

くにこ

芳光

現代

陽子

由紀子

洋

龍馬

シマ子

芳生

志津子

賢子

ひかり

隆明

ひろ介

川柳塔なら

大久保眞澄選

ミサイルが飛び交い地球唸り出す
改竄に隠蔽偽造しやがって
盃の絶句を包む花吹雪
唸るほどお金は妻が握つてる
唸りつつ大木おろす馬愛し
唸らせる今日は自慢の手料理で
二刀流海の向こうを唸らせる
唸ったら気持ち楽になりますか
風唸る里は絆も切れ切れに
パレットが唸り大地の春が萌え
悔いのない命を生きる砂時計
女つてすこい命を産んでいる
ミジンコも象も一つの命かな
梅におう命の洗濯深呼吸
君こそが命それから五十年
春爛漫老いの命も弾んでる
長生きしたいつも覚悟のこの命
食べる喋る笑う命のとは口
介護保険使わぬ様に日々感謝
夕焼け小焼けしあわせ色を抱く命
虎落笛囀ひとつも消しきれぬ
どの顔も社長を目指す入社式
豊熟の海いきいきと青い森
まっさらな画布へいそいそ弾む夢
水を得た魚のように妻の留守
颯爽と歩く花びら浴びながら
太陽のおかけいきいき発芽する

雅美 勝弘 欣之 清 美代子 栄子 薫 妙 辰雄 美智子 寿之 まさじ 萌子 主 優 敬子 賛郎 眞澄 紀雄 恵美子 よう子 貫一 成子 富子 盛隆 枉子 ふりこ

もぎたての愛をあなたに差し上げる
輝こう歳はさておき気は若い
輝いた命今では日向ほこ
一色足せば春の山河が光り出す
シミとシワ輝き生きてきた証
八十を十八にして輝かす
いつの日か輝く時がくる努力
誰だって輝くまではただの人
竹原川柳会(広島) 古田 太虚報
耳澄まし風がドラマを連れて来る
失恋をドラマ仕立てにして笑う
やがて春ドラマをくれる花の下
風雪に耐えて笑顔もあるドラマ
ドラマより奇なり想定外ばかり
そしていつかひとりぼっちになるドラマ
国守る総理借金ばかりする
指切りでした約束は守りきる
後戻り出来ぬ地球をどう守る
黙々と家族を守る父の汗
冤罪の父を守った家族愛
元気です今日も誰かに守られて
青春の時代を生きた舟木一夫
みんな主役ご当地ソング絆で
三才と歌う茶の間を春にして
校歌にも小節が冴える同窓会
君が代を歌い輝く宇野羽生
君子蘭温室出ると歌い出す
廃校になっても胸にある校歌

百合子 展代 隆吉 國治 崇明 理恵 甚之市 和夫 半徳 寛 鬼焼 規代 淑子 蘭幸 慶子 比呂子 弘子 昭紀 敬子 夢香 一徳 千代美 笑子 宣子 幸恵 輝香 栄香

寝ていてね呪文をかけて母は寝る
春風ころを叩く地を叩く
チューリップ草と並んで芽を出した
桜咲く出会いと別れ積み重ね
おせんべいみたいまんまるおつきさま
川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報
満開の梅林テレビで満喫し
大臣も医者も僕より若い人
父の日も母の日もあるみな家族
努力賞夫に貰った銅メダル
良い妻だ残り福だねこの私
福祉タクシー初めて頼る返納日
昔はねばくも夢みた二刀流
年重ね体力知力さらば告げ
年月が家族を次々連れて出る
花見の日決めたあとから早く咲き
夫婦の喧嘩帰省の孫が呆れてる
南大阪川柳会 松岡 篤報
指先で作るハートは半分こ
追伸に足した思いは首つ丈
ラブラブの君に逢えるかクラス会
ラブラブは生きる活力白寿まで
老いふたり人の字が好き支え合う
トラだけは今もラブラブ放さない
あーんして昔はチョコを今クスリ
苦も楽もいつも二人で半分こ
呼ばれるまで夕陽みていた坂の町

歩美 厚子 初音 史子 ちか かほろ 哲男 稠民 真由 幸子 さゆ子 善輔 照代 美智子 重男 喜弘 篤報 裕子 弘委智 武臣 国和 克己 和雄 一歩 真佐子

夢も希望も四角にたたみ町に住む
行き交う子が挨拶くれるぬくい町
終章は夕陽きれいな町に住み
おらが村いつの間にやら町となり
スマホなど持たぬ手紙で用を足す
ユニークな発想マンネリを破る
ユニークな発想で詠む五七五
良く慣れた捨てるに惜しいちびた靴
看護師の言葉それぞれある個性
慣れるまで我慢がまんを強いる義歯
朝夕の葉に慣れて恙無く
定年後遅寝朝寝にすぐ慣れた
住み慣れた町が汚染という悲劇
慣れた町車椅子ではちと照れる
まずい字に滲み出てくるあたたかさ
美味い不味いわからぬ舌になった古い
不味いもの不味いと言える歳になる
改ざん文書発覚不味い財務省
不味いとは云えずご馳走勢揃い
母の手にかかるとまずいものはない
サシセン控え不味いが元気です
カツ丼が不味くて自白まだ出来ぬ
不味いなあ家に携帯置いてきた
アベさんよこまできたたら潔く
ひと言がすぎて気まずい風が吹く
不味いとも言えず我が家のマスオさん

ばっは
楓 楽
たもつ
あさ子
篤
栄 子
いさお
ひさ乃
なぎさ
柳 伸
弘 子
峰 子
敏 治
忠 昭
益 子
ルイ子
修
恭 昌
柳 右子
更 紗
東 風
郁 夫
直 子
勝 弘
志 華子
俊 雄

川柳わかあゆ(鳥根) 松本はるみ報

一工夫高値の大根しっぱまで 恵美子

いつ帰る行かぬうちから聞くあなた
今できるチャンスはいつも逃さない
カーナビを付けたが今日はあてがない
その昔戦一筋とゆう月日
ふるさとに名物はなし餅を食う
海だけは怖い昔の女です

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

大臣のことばは助詞がキーワード
生かされて流れによむ小舟です
太閤も花に合わせていた花見
子が嫁ぐまではお迎え遠慮する

川柳塔わかやま吟社 小谷 小雪報

行く春を惜しむ桜のいさぎよさ
背を伸ばし歩きなさいと春の風
両手からこぼれる春の設計図
もし当たりやその後が怖い宝くじ
七転びその後すべての糧にする
とりあえず休んでからにするその後
泣くだけ泣いた後はもう笑うだけ
その後どうと親近感をだしてくる
残される人にもきつとある覚悟
生きてきた証を残す皺の数
食べ残し飢餓の子の眼にどう映る
残さずに食べて終え父の喝
三世代の落書がある木の机
運命をどう使おうと僕のもの
この父と母があつての私です

かつ子
安 子
ハル子
はるみ
昌
好 栄

おばちゃんに運命にぎる選果場
運命に邪魔される程もえる恋
運命に椿ボトリと自己主張
運命に寄り添い覚悟して生きる
運命と想った人と縁がない

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

国策だ耕作放棄地平まで
前途茫茫君は射程内に置く
手作りの父の遺品の将棋盤
戦争が青春連れて行つたまま
青春の寄り道挫折みんな糧
射るの春の陽ざしにまぶしすぎ
頑張ったけど風になる風になる
呼び水をして青春を呼び戻す
青春は甘くて古い過去のこと
馬糞紙の将棋の駒で王手飛車
射ぬかれたハート虜になつて嫁く
青春の思い出の中君がいる
タフガイのガードを甘くする桜
親子でも将棋を指すと好敵手
負け将棋笑い飛ばすが胃に悪い
最後の矢矧やかな死を的に射る
欲の無い稚児の笑顔に射抜かれる
初恋は甘く切ない宝物
処世術桂馬の動き取り入れる
青春はモンペ竹槍薄き粥
船霊にスルメエビタイ飾りつけ
ミサイルが脇の甘さを突いてくる

日出男
紀久子
秀 子
寿 子
京 子
大 鯨
孔 美子
綾 子
実 満
すみれ
和 子
弘 子
盛 桜
文 道
照 彦
みさ子
草 文
完 司
重 忠
好 幸
鈴
いさお
茶 子
裕
蟹 恒
小 鹿

キユービット弓矢外れて今夫婦
耳もとで甘い言葉に乗せられる
歩の心いつかと金の野望秘め
思考の甘き脱線の臭いする
幸せを射止め溶けだす雪女
卵焼きほんのり甘い母の味

拓庵
富久江
満
かおる

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

さりとてもくわえ煙草でらちあかぬ
自己記録更新しても無いメダル
さきがけの苦勞に欲しい羅針盤
ワンコイン不足で歩く次の駅
泣かないで老いの整理もついたらから
さよならねクラス替えるランドセル

まみ子
遡行
美千代
三樹夫
雅美
かつ子

ブラザ川柳(大阪) 梶原弘光報

仮免の助手席座り油汗
米朝の会談固唾飲む世界
老いなのか気だけ先行き身体ここ
先頭は避けてくつろぐ四、五番目
風切って先頭走り過ぎて禿
親鴨が小鴨引きつれお引越し
五十鈴川指先浸し幸願う
山も水も清い故郷に父眠る
清らかな嘘をつかない空が好き
バワハラもメダルほしさに耐えた意地
お伊勢さん心清めたる小宇宙
無沙汰詫び清めた墓に千の風
野の杏雜木林を潜り抜け

克三
弘光
文子
正子
淳司
久美子
和代
五月
悦夫
一修
清乃
政夫

ほたる川柳同好会(大阪)水野黒兎報

雨水に心のゴミも流される
流れ藻は水の流れて決まる運
水風呂で鍛えた体風邪知らず
水たまり子らには池や海となる
近頃は姿を消した水枕
水のような人柄で邪魔にもされず
みな笑顔振り出し人はベビーカー
足音が聞こえる前にシッポ振る
割り勘に空気読まない飲みつ振る
沿道の小旗の先は金メダル
弟ができて張り切る鯉のぼり
内科外科更に耳鼻科へ誘う春
会心の笑みでスタート二刀流
歳重ね今年も会えたさくら花
追伸にまた会いたいと思ひ込め
雨の日は庭へ並べる植木鉢

桂子
久子
柳子
純子
正子
孚彦
美佐子
信男
奈津子
一弥
春代
郁彦
則彦
黒兎
守啓
順子

川柳塔おつばご吟社(香川)川崎ひかり報

転ぶ度天狗の鼻が低くなる
近道を行って転んで後もどり
立つ転ぶ見守るママの目が温い
下り坂転ばぬように回り道
わき見して躓き転び照れかくし
枕から明日のコントが転び出る
きやらほく川柳会(鳥取)後藤宏之報
多美子

初恵
よしみ
弘
いさむ
放任
ひかり

米寿迎え次の峠へまっしぐら
友達はいあわせの道つないでる
すべった道雪がとければうそのよう
サメの歯の遺伝子欲しい歯が欲しい
春風に撫でられ腰が浮いてきた
生きているみんなどこかが痛いんだ
家仕事自分に声を掛けながら
想定外八十三のバースデー
恋をしてみようもうすぐ春だから
大嫌いそう言い合える間柄
良い着地キヤスター声を張りあげる
沈丁花庭いっぱい香ってる
逝った子が傍らに居て桜見る
ありがと一言あれば和むのに
彼岸ですやと来ましたワンカップ
初鳴きのうぐいす上手元氣出る
西行の願いのままに兄は逝く

富柳会(大阪) 関よしみ報

花びらを散らして走る青い風
急がねば色褪せだした赤い色
せめぎ合う根つこの力あればこそ
枯渴した田畑潤す春の慈雨
じつくりと寝かせ引き出す深い味
うしろからいつも数えている席次
春の棚田土の饒舌水の黙
急がねば最終電車妻の顔
神様の死角で育つ病魔の芽
わたくしの個性キラリと光る春

あやこ
ひろこ
美草
瑞枝
美佐子
恵子
千代
紀の治
雨奇
美智子
治代
登美枝
令位子
汪
宏之
菜々
穂
文重
伸雄
田鶴子
壽峰
高鷺
隆充
正治
清男
あかり

逆風を両手広げて受け止める
古希はまだ育ち盛りのど真ん中
歳のせい指定席でも急いでる
咲き急ぐ花を手折ったのは嫉妬
そして今横座りして癒される
薫風を一気に鯉の轍立つ
咲き終えた以後の桜を桜守
逆らって見たいと思う血の絆

川柳あまがさき(兵庫) 大浦

初音報

武人 惠
一文 寿之
アキ よしみ
欣之 森子

川柳花の輪(大阪) 岡本

金正恩U.S.Jではしゃいでた
男なら顔より金で勝負しろ
甘い顔すればどんだスネが痩せ
俺に似た顔がテレビで親探し
四面楚歌ひとり花野を飛びはねる
私にも想定外はやって来る
三枚目路線が僕の生きる道
予期しない心も踊るプロボーズ

宏造 正和 万彩 修平
ヨシエ ひとみ 英坊 美籠

なまくらもやる気スイッチ持っている
八十路すぎ心満ちても鈍い足
満員車車内化粧はお止めやす
満ち足りた人生だった悔いは無い
満を持し住所氏名をでこに貼る
満足度微妙に違う夫婦仲
予定表眺めるだけで陽が暮れる
なまくらと言われ耐えてた日もあった
働いているのは電子レンジだけ
鈍刀と見せて策略だったのか
人間ドック何が起きてもええ歳に
七転び八起き化粧が厚くなる
春の予感土の匂がやわらかい
湯気の上ソフトに踊る花かつお
朝の小言はソフトに言ってくれ
日々平穏なまくらなりに日を送る
鈍臭い老母とみてたが今の我
大切に育ててなまくらができた
それとなく疼く三月のなまくら
ウエストが満足してかくびれない
ちよっと主婦休んで満ちた一人旅
満ち足りた今日を夕陽にふと感謝
満開の桜今年も会えました
邪魔臭いなまけていると癖になる
楽しいと書きたたびベンがやわらかい

弥生 五月 篤子 忠子
多津子 英旺 弘之 泰夫
美津子 紀乃 満子 洋志
万紗子 弘子 宏子 求芽
りこ 昌乃 文代 保子
則彦 則彦 則彦 則彦
元一 雅美

救命にまさかまさかの相撲界
玄関に外面用の仮面置く
共白髪無理だよ俺は禿ている
親友の言葉直球ど真中
顔パスが効かなくなった定年後
裏切りはまさかの隙をついて来る
鉛筆の先でツツツンセクハラよ
神の手にちよっと預けて小休止
花粉症にならないのかな鯉のぼり
何かあった帰宅の顔に母直感
まぶしくてライトアップの対向者
頂いた余生素顔を磨きたい
フグ提灯ふくれた顔で吊される
妻の介護受けるつもりが先越され
たばこ屋の看板娘あんたかい
振り付けは私夫が踊ってる
残酷な踊り食いするヒト科ヒト
お見合いに写真と違う顔が来た
サオダケーと叫んで金属のバイブ

千賀子 公子 新録 初音 紀恵
歌留多 花門 紀華 ためえ
菊江 つな子 雪菜 靖鬼
純 まつお 芳香 こみつ
かずお 耕治

京都塔の会

山田 葉子報

反戦をソフトタッチでちひろの絵
臆たけた女将の零れ出るソフト
ソフトでもいつもと違う目の威力
線香もソフトに春の説経する
懸命に生きてきたかと思う自負

公子 欣之 ふりこ 哲子
ルイ子

川柳 大阪

山崎 珠生報

気晴らしにデパート巡る浪費癖
酒2合飲むなら晴れる程のこと

朝子 堅坊

茶碗割つても壁を蹴つても気が晴れぬ
ありがとうあなたにいつも思つて居る
首相案件あなたが一番知つて居る
まだ居座るか私なら辞めますが

安倍総理貴女任せの無責任
恋焦がれ胸が燃えそうねつあなた
薬一本の約束胸を掻き乱す
コソコソの汗に約束された明日

口約束子供しつかり覚えてる
頼りないけど子の約束だ信じてとく
印籠を出すつとみなで恐れ入る
賀状での会う約束はいつの事

近頃はほんに出会わぬ福の神
良い医者に出会えて五年無事に過ぎ
メーデーで毎年出会う元気かな
春爛漫出会ひ詰まつたランドセル

川柳に出会ひ性格まで変わる
木曾路の宿女将の三味に惚れました
あすもまたありますようにいい出会ひ
ビビッと来て一生託してみたくなる

大皿に魚介山盛り船の宿
川柳塔さかい(大阪)
内藤 憲彦報

生きていることがギャンブルかもしれぬ
万策の果て鉛筆を転がせる
味しめた時からばくち依存症
パチンコで食費稼いでくれる妻

紙吹雪に化けてしまつたはずれ券
お茶お華日本のマナー詰まつてる

俊雄 芳香 紀雄 勝弘 かよこ 珠生 雅美 賢子 満知子 遠野 まつお 福貴子 蕉子 美世子 万紗子 克己 一步 美籠 司

勝つた日はマナー忘れる虎ファン
バス中で喧嘩始まる長電話
閉会の挨拶すでに席を立ち
電車内化粧をするは脚組むは

外見で人の値ぶみをする無礼
順番を待つて居る長い列もあり
ババ子守りママはいそいそ女子会へ
四六時中スマホに命預けてる

図書館の椅子に一日身を預け
預けるつと押しつけ意味が違ひます
銀行へ行く手間賃も出ぬ金利
入社社運預かる心意気

金利より粗品目当てで預けてる
定期預金の名義はなぜかすべて妻
お財布をポンと預けて仲がばれ
二度咲きへ命預ける花いかに

一礼で校門くぐるさわかさ
苦勞人マナー守つて逝きはつた
ゴミ出し日非常識まで捨ててある
頂きます可愛いマナー保育園

国会はマナー違反の見本市
誰ですか食べ散らかした花の下
糸と針和室で母は機嫌よく
何時だつて分けへだてなく気を利かす

言い決る訳ありみたい気掛かりな
生き様を分かてくれる君が好き
石握る若いダヴィデに気迫満ち
意地だけで若い者とは競えない

いい波は笑つていればきつと来る

みつ江 世紀子 ゆみ子 玄也 唯教 かりん 憲 八千代 雅美 扶美代 満知子 妙子 さくら 清 五月 佳子 廣子 和夫 誠一 ひろ子 みつこ 俣子 ばつは 瑠美子 澄空 雅明 憲彦 時雄 憲彦

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

退院の漸く離縁した病魔
目的は美味しい蕎麦に出会う旅
中国が日本の水を狙つて居る
民営化メトロの文字が馴染めない

尋ねたいけど西方浄土行つたきり
内戦のシリヤを分ける露と米と
目的がある人の目は生きて居る
時計からやとと解放定年日

多目的な働きをする独りもの
咲き終えて桜の花にある安堵
何故かしら西と言う字が酒に見え
耐えて来た日々がほどける水の音

水割りは薄いが通うわけが有る
間違つと山をも潰す怖い水
政治中枢に迫る政局逃がすなよ
一帯一路ジグザグスカーが揺る

ややあつて女房の怒り今ピーク
玉の水コロコロ蓮の葉と遊ぶ
あすの夢へ真つ赤に染まる西の空
川の水流の水まで飲んだ亡夫

黄昏も悪くないよと西の窓
西暦で生年月日書く米寿
大工方西を指すときさちよい海と
タイガース今年優勝出きるかも

ジム通いあなたを介護する備え
原発ゼロ黒四の水まんまんと
神のいのち水は流れて澄んでゆく

欣之 直子 秀夫 榮子 敏子 ひろ子 喜代志 常男 堅坊 喜八郎 盛隆 紀乃 篤 和雄 ひろ介 一志 高鷲 壽峰 いさお 清 満知子 哲男 ダン吉 福貴子 眞澄 克己 たもつ

— 106 —

こつくりに向はつこの世捨て人
こつくりが続くようなら危ないぞ
こつくりと病んだ月日が心くれ
春うらら窓際族は舟を漕ぐ

暗い部屋貧乏神が座つてゐる

政治家の野心が世相暗くする

家を継ぐ話になれば暗い顔

一生涯トンネル工事土竜くん
暗くても眠れば何もわからない

岬には情報網が張つてある

台風は足摺岬が好きらしい

ストレス解消には岬で叫ぶ

豊漁を待つて岬の灯は消えず

岬めぐり室戸三浦と地図探る
旅心くすぐる岬二人行く

夜道が暗いほど楽しかったデート

川柳藤井寺(大阪)

太田扶美代報

今夜からパパと呼んでもいいかしら
ちよつとした坂でも分かる齡

激戦地掘れと遺骨の日本兵

ざれごとを言つて見つかる君の嘘

平均寿命越してびつくりしてるばく

ときどきはびつくり水のいる夫

あんな坂こんな坂にも泣き笑い

再調査せずとも資料みな出てゐる
織田作に口縄坂で逢つて来た

ふる里は港が見える坂の町
おばちゃんの素顔仰天した鏡

石花菜

次男

恭子

野蒜

由紀子

祐子

美知江

智恵子

康子

節子

醉芙蓉

玲子

妻

紀美恵

茂夫

照彦

光男

まつお

信二

一文

喜代子

瑞美子

シルク

みつこ

一歩

いさお

六歩

貴乃花びつくり弟子が暴力す
夫婦坂夫恋い坂にくねり坂
喝采に行きつくまでの長い坂

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

親指の小指が疼く怠けた日

花と香にときめきもらう朝散歩

身内ひとり住む古里も春になる

元金を取り戻す迄生きぬくぞ

おだてられ誓つた言葉四月馬鹿

この僕に身内にまさる友がいる

散る桜深追いなんかするものか

啓塾だ僕もなんとかせにやならぬ

年金日だけは忘れぬ認知症

やさしさに触れた場所から癒えてくる

親だけがピカ一などと褒めてくれぬ

いやいやと体が無理を遂につきて

血の通う息子べつたり嫁につき

いやいやと風と逆らひ舞う花弁

年金でうまかくじとる妻の腕

ポケットの中で膨らみだす蕾

誓い合う二人の門出飛ぶ笑顔

戦争はもう語らない叔父白寿

しがらみを脱いだ心に春が来た

折にふれ身内の情にほだされる

神前の誓いおぼろになる齡

ついにきた減る月ばかりが増えてくる

首振つていやいや稚児の反抗期

風呂敷の結び目罪を知っている

真

絹子

扶美代

亜成

信子

わこ

尚世

弘委智

高志

郁夫

弘一

仁

寿子

かすみ

ルイ子

博泉

あさ子

薫

洋彦

武彦

茜

朝子

賢子

麗

銀杏

壽峰

高鷲

年金は百年安堵言うたはず

川柳塔まつえ吟社(島根)相見

柳歩報

敵味方X線を当ててみる

集まると味方の顔でそばへ寄る

味方ちの味方に付いて草履取り

赴任地の風も味方し力湧く

サルカニ合戦カニの味方が多過ぎる

やり直せやさしい言葉夢が湧く

いかですやさしく肩に介護の手

貴方のやさしさほろり花が散る

味噌汁の香りの中やさしさを

やさしさは他人にあげる方がいい

やさしい太陽塩パン買いに出る

やさしさで妻にキスして叱られた

行間を読めば我慢の跡がある

先を読み歩も前へ進めない

読んでいた打球が飛んでくる所

安心を壊さぬようにゆで卵

安心はできない亀がいる限り

安心を見通す眼鏡持つ私

油断などするな野獣が俺に棲む

田舎でもひとり暮しは安心か

安心のために大きい傘の中

山城の近くで生まれ歴女です

一個のリング食べて歴史は始まった

忘れました過ぎた昔はピンク色

鈍甲

美智子

ゆき

德利

あきら

弘充

芳枝

静枝

雪代

ひふみ

邦代

禮子

輝山

寿代

豊仙

柳歩

とも子

桂子

米估

瑞人

俊子

聡美

知恵子

みちを

草庵

川柳さんだ(兵庫)

田中

章子報

あせたつて私は私なんだから
川柳がもしなかったらひまやろな
草抜きをすれば秀句が浮かびそう
同意書を取れば安心出来る医者
私のもしものは何も残さない
独り酒楽しいもしも積み上げる
次世代に託すしかない廃娯処理
幕引きの後に尻尾が落ちていた
迷うなら私が捨ててあげようか
処理された紙のそうめん口固い
悪だくみ処理したはずが露見する
蛇行する流れにもある意地と欲
源流の一滴呱呱の声上げる
ゆったりと時の流れる認知症
輝いたページにもある酒の染み
ラストまで読まない本が積んである
ページくる度に懐かし父の激
若者と微妙にずれる笑う箇所
大笑い出した涙にある本音
大笑いで喜びを分かち合う
メタボ腹ボタン飛ばした試着室
大呆け小呆け家族が許す大笑い
騙しあい大笑いする四月馬鹿
下積みやがてやがての大笑い
大笑い金歯銀歯の老人会
幸せはこうして君を待つ時間
終章はこうでありたし花吹雪

ひとみ 隆太 利子 雅尚 千津子 堅坊 好文 義徳 耕治 美智子 健二 ヨシエ ひろ介 修平 哲男 祐康 美籠 厚子 紀恵 歳子 宣子 一子 つな子 恭太郎 雄太郎 千代美 周三

八十路きて今も歩幅の合う二人
意固地でも百歳までは生きてやる
お喋りにインフルエンザと紙見せる
どや顔を見るのが嫌な同期会
空仰ぎああ関西つておもしろいな
へそくりの場所を変えたら夫慌て
シユレッター秘密を守ってくださいな
逃げ足の早い四月の諭吉さん

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

ハンカチを膝に置いてる京美人
振るハンカチ長い別れとなった友
鳩が出るあのハンケチが欲しいなあ
大きめのハンケチ広げ春を摘む
真夜中にロボットの愚痴聴いてやる
実直な方と見受けて封を切る
此処と決め其処で咲いてる山桜
心の奥の山がなかなかこえられぬ
こだわらず柳に風と山頭火
後始末しておきました黒塗りで
いつまでも庇うバーヤが居てひ弱
いばら道進め進めと肩押され
庇われず尻尾は切って差し出され
少年は夢抱き進む一直線
前進する時間しかない八十路
腕時計少し進んでいるらしい
右手の怪我庇いきれない左の手
散る花を神様でさえ庇えない
庇い合い墓穴を掘った改ざん記

優門 花夫 富彩 万彩 野薫 ちあき 順子 正和 千津子 健彦 和宏 盛夫 哲子 一徳 わこ 紀華 恭子 千賀子 順子 洋次郎 野鶴 利子 章子 美津子 いわゑ 正彦

母犬の胸に五匹も丸まって
三度目は庇い切れぬと言っておく
善戦と庇つてみたが負けは負け
あの時に庇つてくれた借りがある
でこばこな道も進んで今がある
あの日から時間を五分進めてる
結び目を緩く風受け左遷待ち
戦死した父が遺影のあとだけなさ
遅咲きの桜と話す独りの絵
勝ち進むゲンをかついでシャツ替えぬ
泣いている母を見たのは一度だけ
やれやれはまだまだ言わず胃の緒

岸和田川柳会(大阪)

石田ひろ子報

ハイお茶と手盆でそつと昼三時
母ちゃんへ続けとカモのお引つ越し
カルガモの親子そろつてお引つ越し
しょっぱい湯ブクブクブクと100でる
山裾に群れなし競うシャガの白
ほのほのの記事に一日気が和む
退院の朝ほのほのと粥する
桜咲き6歳咲くよママも咲く
初参加藤の花をも愛でられず
生きているか風呂の外から夫の声
山里の訛の中に居る安堵
新緑とウグイスとお湯空は青
下戸の君おちよこ一杯桜色
頬染めて児童妊婦に席譲る
いよやかは白亜紀からの名湯の郷

ひとみ 弘子 弘智 千代 敦子 武臣 靖夫 忠夫 ひさゑ 邦男 伯備 嘉代子 彦弘 日出夫 忠太 心 忠彦 隆昭 喜代志 洋子 敏美 蓉子 大輔 律雄 白水 カズ子 一子

デイサービスはんのり祖母の薄化粧
 はのはと朝陽背に受け足鍛え
 はばかり乳房与える母の愛
 献血をすませはのほのした気分
 じぐざぐの道だが目ざすものがある
 初給料ちよつと小遣いくれる孫
 行き過ぎて振り返り見る山桜
 若葉萌えベンチはのほの老い二人
 年金の枠ではのほの二人旅
 もう二度と会えぬ人待つ花の下
 手作りの座布団がある無人駅
 牛滝の湯はのほのと空の青
 赤ちゃんの笑顔は希望はのほのと

豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

カーテンにボクの秘密を吊るカルテ
 難民キャンブ母重篤の子掻き抱く
 輪の中にふわりふわりと花の精
 一強の安倍を悩ます春嵐
 カーテンを開けて心の闇放つ
 花びらも愛もふわりとボケットに
 一灯が萬灯になる民の声
 灯明のゆれは悲しく嬉しくも
 繚乱の百花へふわり紋黄蝶
 カーテンにじゃれる子猫が叱れない
 誕生のいのちバスタオルに包む
 青葉風ふわりと飛ばす夏帽子
 結論を引つ掻き回す天邪鬼
 春風にふわりと乗って旅の空

國代 和子 洋二 保州 ダン吉 ひろ子 香代 みつ江 和美 珠子 章子 義泰 義博
 公子 英旺 求芽 肇 雅美 美佐子 健二 武彦 歌留多 歌留多 千鶴子 野鶴子

セレブ気分カーテン替えただけなのに
 LEDプロボーズには明るすぎ
 カーテンはしゃりとひかれレントゲン
 カ掻きの愛児見守るサン格拉斯
 飛花落花夏秋冬にないふわり
 黄昏の身をいとおしむ花吹雪
 土俵には行けぬかマツコ・デラックス
 古希は花百寿はもつと赤い花
 カーテンを洗いあしたを探してる
 妄想を掻き立てている春日和
 街の灯が消えて帰宅の仕事好き
 何一つ文句言わさぬ空の青

ふつもん吟社(鳥取) 両川 無限報

過疎に住み免許返して馬車引くか
 身の丈に合わぬ夢見てまた嘆く
 プレミアムフライデーだが休めない
 人生ってこんなもんかと苦笑い
 補聴器は電池切れです妻無口
 思い出は荷物にならぬ宝物
 老い二人目になり杖になり生きる
 につこりと笑いたいけど出来ぬ意地
 叫ばずに良くなる筈のない政治
 梅の花咲いて戻らぬ人ばかり
 三途の川渡ったことがない不安
 決済も殿のためなら書き換える
 側近の付度ボスの寝首掻く
 側近が主役に見えた斬られ役
 側近が時々踏み絵踏まされる

宏子 満子 久子 正彦 美津子 美智代 則彦 黒兎 ヨシエ 堅坊 見清 岩玲子
 振作 昌鼓 節子 幸子 妻子 俊八 雅女 一粹 楓花 一瑤 天翔 隆浩 回春子 白兎 殺

側近として仕えて最後首になり
 側近の中でくすぶってる火種
 側近は飲む時だけのカバン持ち
 側近に寝首かかれた下廻上
 大丈夫ですか側近首にして
 側近に卑弥呼出て来て神頼み
 付度が上手い側近手離せぬ
 おろろとせぬようリハ・サルシとく
 大穴が当りおろろするばかり
 名を忘れおろろ話合せてる
 おろろを見せぬ藤井は宇宙人
 おろろの特効薬に深呼吸吸
 負けたのはタツチの差だと言ひ逃れ
 タツチの差着いた途端にドア閉まる
 タツチの差負けて名前も忘れられ
 あきらめろタツチの差でも負けは負け
 タツチの差神は居るんだ怪我ですみ
 タツチの差と言うがこれも実力だ
 切り捨てた端数の中にある本音

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ報

魂の踊りアフリカから響く
 輪踊りを外れて二人闇の中
 旅の宿一期一会のワルツ舞う
 木の芽萌え気分ワクワク初デート
 ワクワクはお土産袋開けるまで
 ワクワクとハラハラが背中合わせる
 オオタニはまだかとファンが待つ
 老木もワクワクします花も咲く

茂登子 千賀子 行男 義徳 凱柳 勲章 金祥 みゆき 蟹郎 敦子 紀美江 一平 由美子 善平 清信 芳光 泰山 久芽代 滋 久江 清人

パンジーを植えた花壇が微笑んで
戦場で植え付けられたど根性
田植えした瑞穂の国の名も消える
やさしさを心に植えて闊歩する
埋め立て地金のなる木が植えてある
何故戦するか恐竜叫んでる
翔平はゴジラでないよ天使だぜ
恐竜に負けない孫のくする声
鶴竜は恐竜の血を引いている
恐竜の中国、毒虻の朝鮮
ネッシーが恐竜の夢抱いたまま
恐竜は絶滅生きる団子虫
恐竜をどこから料理して食おう
恐竜も桜吹雪を見たのかな
ハンドルを持つとティラノサウルスになる
菜の花をえくはいっぱい植えました

翠 洋 会 (大阪)

大久保眞澄報

貴恵 重忠 妻 子 紀美恵 紀の治 美美人 岳人 玲知江 珍坊 石花枝 龍 枝 野 蒜 照 彦 公 恵 完 司 弘 子 満 作 和 夫 蕉 子 すみ子 日の出 昭 げんえい 恭 昌 大 子 善 之

無料というカレーに肉が見当たらぬ
喋り出すまではきれいな人だった
落穂拾い農家の親を思ひでる
一万円落とし五百円拾う
桜の次はなんですかのおばあさん
子離れを修正したい八十路です
安倍総理ジャパンファーストで願います
健康の幸せ思いう青い空
新緑に歩調いきいき弾み出す
すり減った若さへピンク足してみる
政治家に恥の文化はないらしい
美しい嘘と分かった赤い紅

翠 洋 会 (大阪) (前月分) 佐々木満作報

自分流通しつづける鉄の意志
マンホールの蓋も武器になった頃
手も足も脳も休まず有馬の湯
春ですね人が恋しくなる休み
ずつと休日何でも出来て何もせず
休日は家族ばらばら好き勝手
徘徊でなし日曜のぶらり旅
休日にはわたくしいるの海に逢う
健康に休日歩く一万歩
閻魔の鼻明かしてやるぞ救急車
ありがとうの笑顔が救いボランティア
飢餓の子を救えずパンを食べ残す
千手観音どの手に救い求めよう
救うため思わぬ力宿る母
ゆつたりをめざし只今修業中
文書改ざん謎は謎生む財務省

アスリートみんな草の根平和の使
救出劇見るたび感謝自衛隊
悔いすべて断捨離したい春になる
知らぬのに解る顔して見る将棋
始まりは無垢な心であった筈
やわらかな桜の笑みに生きる活

和 夫 げんえい 富 子 紀 子 満 作 ふりこ

第19回 生駒市民川柳大会
日時 7月14日(土) 12時開場
会場 生駒市コミュニティセンター(セ
イセイビル内近鉄生駒駅より南へ3分
〒630-0800 生駒市元町1-6-12
電話 0743-7310500
事前投句 「再起」 笹倉 良一 選
ハガキで1句 6月16日(土)
宿題 消印有効(出席者に限る)
「凡 人」 荻野 浩子 選
「くすぐる」 片岡 加代 選
「女 神」 阪本 高士 選
「モデル」 山田 順啓 選
「暑 い」 米田 恭昌 選
出句 各題2句(出席者に限る)
締切 13時
会費 1500円(発表誌呈)
事前投句先 専用ハガキまたは普通ハガキ
にて下記まで
〒630-0022 生駒市壱分町1487-30
小金澤 寛一 宛
問合せ先 小金澤寛一 TEL 077-6793
主催 生駒番傘川柳会

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 飛ぶ・車・好き・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
岸 和 田 川 柳 会	16日(土) 14時締切 時計・配る・儂い・ピンチ	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	16日(土) 17時締切 意図・眩む・星座	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL 0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL 0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	17日(日) 吟行句会 席題・任せる・冒険・儲かる 自由吟	集合場所＝京阪電車「八幡」駅改札口前 集合時間＝11時 問 合 せ＝藤村亜成 TEL 072-867-4603
川 柳 藤 井 寺	17日(日) 14時締切 紐・踊り場・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊 中 もくせい 川 柳 会	18日(月) 13時50分締切 財布・迫る・そっと・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さ ん だ	19日(火) 13時30分締切 基準・働く・リーダー・厚化粧 自由吟	キッピーモール (JR三田駅前) 〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川 柳 たちばな	20日(水) 13時45分締切 席題・こだわる・後ろ・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL 06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造 TEL 06-6494-5187
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	23日(土) 13時15分締切 時・濡れる・若い	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川 柳 塔 すみよし	24日(日) 14時15分締切 本音・コラボ・乱れる	住吉区民ホール 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日) 14時締切 加・炉端・レントゲン	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
京 都 塔 の 会	25日(月) 14時締切 イメージ・感・ごめん・席題	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子 TEL 075-591-0424
南 大 阪 川 柳 会	25日(月) 18時30分締切 にじむ・けじめ・さすが・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日) 13時30分締切 自由吟・農地・レーダー 核のゴミ	開発ビル 2F (鳥取市片原1-107) 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金洋

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	2 日(土) 14時締切 包む・ガード・同情・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	2 日(土) 14時締切 後・まだ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL・FAX0721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	2 日(土) 14時締切 いつも・求める・いただく 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ 吟 え 社	2 日(土) 13時30分締切 流れ・険しい・本当・返事	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川 柳 塔 な ら	6 日(水) 14時締切 浸・どっぷり・虹	奈良市立中部公民館 4F 近鉄「奈良」駅④番出口 徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
あかつき 川 柳 会	8 日(金) 14時締切 明るい・長・煮物・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	9 日(土) 14時締切 吉報・衣替え・許す	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	9 日(土) 14時締切 歩道・パスポート・救う・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F E室 JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏
川 柳 塔 打 吹	9 日(土) 13時30分締切 棘・本気・ドキドキ・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	10日(日) 14時締切 大気・こっそり・嫌い・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	10日(日) 14時10分締切 兼 題 = 耳鳴り・目玉焼き・旬 課題吟 = 中	和歌山商工会議所 TEL 073-422-1111 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪町東2-208-5 桑原道夫
西宮北口 川 柳 会	11日(月) 14時締切 途中・狂う・ひょいと・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	12日(火) 13時30分締切 山・降る・とことん	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール蛭池 蛭池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 さ か い	12日(火) 14時締切 節目・ずばり・折り句・トヤマ	東洋ビルディング 4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月

柳界展望

★「平成30年新春龍ヶ崎川柳誌上大会」。同人成績。

天位 大久保真澄

出る杭になろう日本が揺れている

★第6回「ふるさと川柳」は、参加者373名。同人成績。

秀句 石橋 芳山

押し寄せる彩りさくらサクラさくら

秀句 平井美智子

点滴はピンク 午後から雨らしい

秀句 高瀬 霜石

淑女とはランチ 悪女とはディナー

★第38回「ときせん賞」は、参加者298名。同人成績。

とさせん賞 谷口 修平

喪の庭の雪はあれから溶けぬまま

三才 西川 無限

わたくしの指に止まっている夕陽

三才 三宅 保州

振り向いてごらんと向かい風の私語

★第22回「川柳展望全国大会」は、ホテル・アウ

イナードで134名の参加者で開催。同人成績。

秀句 新家 完司

コンニャクで五臓六腑の毒を抜く

秀句 新家 完司

新しい本の香りがする四月

秀句 藤井 宏造

待たした人に返してほしい待ち時間

秀句 高瀬 霜石

どんな草にもどんな虫にもある名前

秀句 大内 朝子

幸せをとても上手に呼ぶ笑顔

秀句 鈴木いさお

信号は青でも渡る義務はない

秀句 村田 博

絶対にミス許されぬ正誤表

▽訂正とお詫び△

○5月号 P3・3行目、

鴨田明紀→鴨田昭紀。P

78・下段最後尾、上田和彦→和宏。P97・1行目、

天野夢草→天根夢草。P

132・3段目、2・4行目、

新家完司句集『あきらめたとき美しくなるこの世』。

P132・4段目、神戸市久保直子→久保道子。

▽新誌友紹介△

奈良市 加門 萌子

紹介者 安土 理恵

常任理事会 5月7日(月)

①創立95周年記念事業基金取り組みについて②次期「檸檬抄」選者について③第24回塔まつり業務分担について④連絡網について⑤誌友拡大の具体策について⑥第6回誌上大会収支について⑦定例確認事項

第69回 広島平和祈念川柳大会

日時 6月17日(日) 10時開場

場所 広島市中央公民館 4Fホール

課題と選者 (各題2句)

「普通」 小林てるじ 選
「絵」 西岡 信彦 選
「まさか」 浅原志ん洋 選
「法螺」 林 武志 選
「頼む」 鴨田 昭紀 選
「靴」 弘兼 秀子 選
「ニュー」 小島 蘭幸 選
「傘」 増田マスエ 選

会費 1000円

欠席投句 締切 6月5日

会費 1000円 (切手不可)

規定の用紙 (蘭幸まで) に作品を連記

投句先 〒731-5111 広島市佐伯区美鈴が丘3-6-16

森崎八重子 宛

共催 広島市中央公民館・広島川柳会

'30 柳都全国川柳大会

期日 6月24日(日) 10時～

会場 新潟市中央区下大川通り 新潟グランドホテル

会費 3000円 (昼食・記念品)

講演 「大往生かボクッリ死か」

— 生き甲斐のこれから —

木津川 計 氏

宿題 (各題2句)

「風」 梅崎 柳青 選
「ひとり」 徳永 政二 選
「音痴」 森中恵美子 選
「力」 零石 隆子 選
「つづく」 小島 蘭幸 選

特別課題 (事前投句・2句)

「雑詠」 大野 風柳 選

締切 5月31日まで ハガキで

投句先 〒956-8691 新潟局私書箱15号

柳都川柳社 宛

*大会の参加と懇親宴 (6000円) の出欠も記入のこと

主催 柳都川柳社

第24回 川柳塔まつり

と き 平成30年10月6日(土)

開場：午前11時 出句締切：正午 開会：午後1時

と ころ ホテル・アウイーナ大阪 4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 (近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車) 電話 06-6772-1441

《 同 人 総 会 ・ 議 事 》午前10時より

平成29年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成30年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「自嘲と自慢」 川柳塔社 新家完司氏

兼 題 「カラフル」 大阪 平井美智子選

「配 る」 広 島 鴨田昭紀選

「不思議」 東 京 川名洋子選

「芯」 大阪 水野黒兎選

「遙 か」 奈 良 大内朝子選

事前投句 「男 と 女」(9月1日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午 (午後5時頃終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

◎会 費 2,000円 (当日頂きます) ご昼食は各自でお済ませください

◎ 呈 記念品

《 懇 親 宴 》

と き 平成30年10月6日(土) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウイーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円 先着申込み 130名様

☆宿 泊 ホテル・アウイーナ大阪 8,000円 (朝食付き)

* 事前投句および懇親宴のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて
9月1日(土)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14-17-201

〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490

振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

編集後記

★噴水と相似の緑 柳な
り 薫風

★作家出入根達郎氏が共同通信配信の大分合同新聞 新潟日報に連載中の「一人に言葉あり」の切り抜きを送ってくださった。「川柳一本で生計・麻生路郎」「プロ名乗り雑誌を主宰」「一生を川柳に捧げる」の見出しが躍る。また過去にも雑誌のエッセイ「いつのまにやら本の虫」にも路郎を採りあげてくださった。氏は長年古書店を経営されており、路郎もまた古書店を経営していたので親近感がありなのか。それにしても氏の和紙に毛筆の流麗なお手紙に、私はお返事が書けずに困っている。

★4月22日エヒメ春の川柳大会（川柳まつやま

吟社主催）に参加。関西

空港から松山空港まで飛行時間40分。遠くて近い愛媛である。大会のあと会長の田辺進水さんが有志の懇親会を開いてくださった。進水さんは「竜宮から帰りました」と挨拶されたが、退院されたばかりで申し訳なかつた。同人の古手川光さん、黒田茂代さん、栗田忠士さん、近藤修二さん、柳田かおるさん、西田恵美子さん、誌友の郷田みやさんはじめ川柳まつやま吟社の方々と楽しいひとときを過ごした。

★私には俳人山頭火終焉の地松山では非訪ねたいところがあった。一草庵である。月曜日は休館というところを、前もつてまつやま吟社の方が交渉して開けて頂くことができた。6畳と3畳の質素な部屋に「山頭火居士」の小さな位牌。放浪の俳

ひとこと

生 き る

柳歴五年、記憶に残る名句とたくさん出合って感動を戴いた。柳友に励まされ見守られていることを、ひしひしと感じ感謝している。

A氏との出会いもまた私の句に力を与えてくれている。

「首を吊るにも紐が結ばず、薬を飲むうとしても口に運べず、電車に飛び込もうとしても歩けず。そうなたら生きるしかしやあない

なあ、同じ生きるなら楽しゅう生きたい思うてな」とA氏。

A氏は頸椎損傷で生活全般を介護で暮らしている。ベッド上で過ごしなが、俳句を楽しみ、庭で遊ぶ鳥の名を調べ、野草の勉強、競馬の予想等を楽しむことに余念がない。生かされた命を全力で生きるその姿勢に学び、私もまた命を吹き込む句を心がけたいと思う。

（富永 恭子）

人はこの地に庵を結んで10カ月後にコロリ大往生を遂げた。以前「川柳華群」に「山頭火小伝・しぐれの中へ」を執筆した因縁でどうしても訪ねたかった一草庵である。周更があれば必ず事務所までご連絡をお願いします。

□「各地案内」日程に変更がなければ必ず事務所へまだ3句投句される方がおられます。2年前から2句出しになっていま

（朱夏）

□「愛染帖」「一路集」が発送しております。27日

が日曜日の場合は26日に発送しております。最近遅配の苦情が多く寄せら

れます。なぜ遅配になるのかを質したところ、意外にも郵便局に残されている場合などがあるそうです。配達が遅い場合は、郵便局を叱咤激励をしましょう。

□戦後の貴重な「川柳雑誌」をご寄贈いただいた佐渡市の高野不二さんが2月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。ありがとうございます。

（勝弘）

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いたします。

作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島蘭幸選
水煙抄 (8句)	川上大輪選
愛染帖 (2句)	新家完司選
檸檬抄「像」 (2句)	山口光久共選
インスピレーション・ナビ (2句)	斉尾くにこ選
一路集 (2句)	大西泰世選
「すんなり」	村上直樹選
「部屋」	多和田敬子選
「汗」 (3句)	居谷真理子担当

9月号

檸檬抄「頭」

一路集「組む」「少し」

初歩教室「ルーツ」

本社6月句会

とき 6月7日(木) 13時開場・13時40分締切

ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間

天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441

おはなし 「本社句会」ユモア句「パトリ」

兼題 「薄い」「ジャンプ」「もやもや」「はずす」「起伏」

席題 「鈴木いさお氏」

島田誠一選

加川靖鬼選

岩佐ダン吉選

久保田千代選

松原寿子選

小島蘭幸選

会費 1000円

投稿件 500円(切手可)

(各題2句以内)

路郎忌7月句会

6日(金) 午後1時から

兼題「持つ」「さらり」「細かい」

「旅」「想像」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「年」 青砥たかこ 共選

石橋 芳山

締切 6月20日 発表 6月25日頃

投稿件 無料

インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価 八百円 (送料88円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇一八年(平成三十年)六月一日発行

発行人 小島蘭幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

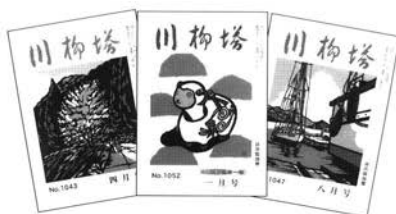
電話(06)6772・1441

振替 〇〇九八〇四一五九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4

TEL (06) 6372-1178

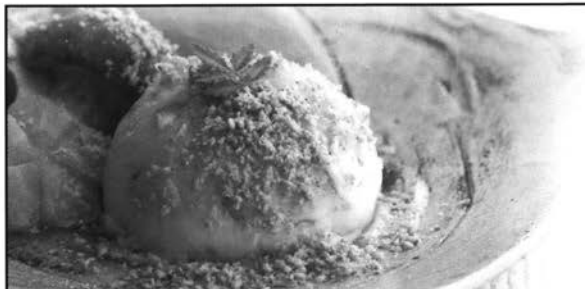
FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器内科・放射線科・脳血管内科
緩和ケア（ホスピス）

併設施設：デイサービス・ショートステイ



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>